
王立エトワール近衛隊
氷の薔薇に敬礼を
CHIHIRO KURIHARA
栗原ちひろ
角川ビーンズ文庫

王立エトワール近衛隊

氷の薔薇に敬礼を

栗原ちひろ

BEANS BUNKO
17298
角川ビーンズ文庫

王立エトワール近衛隊

氷の薔薇に敬礼を

栗原ちひろ

17298

角川ビーンズ文庫

LA GARDE ETOILE ROYALE

CONTENTS

1 星の主 …… 7

2 エトワール隊の昼と夜 …… 52

3 友達と行く暗い夜 …… 98

4 仮面が踊る結婚式 …… 146

5 この手にある正義 …… 180

6 守るべき星 …… 214

あとがき …… 253

王立エトワール近衛隊



「正義のために、全身全霊で戦う軍人になるんだ！」

「愛を知り、正義を胸に戦え。恐怖を知らぬ者に待つのは死のみだ」

イラスト／櫻井しゅしゅしゅ

アル

立派な軍人を目指す女顔の熱血新米士官。初任務でエトワール近衛隊に着任。

シャリオ

エトワール近衛隊隊長。アルの上官で中将。完全無欠＆ドSな美形騎士。

CHARACTERS



ソール

フィニステリア王国第2王子。弁が立ち国民人気も高いが、独裁政治で海外侵略を目論む過激派。



レア

エトワール近衛隊少年のように線の細い体で任務にまい進する生真面目な士官。

絢爛な軍服に身を包む
美麗近衛兵たち。
彼らの真の姿は、正義のため
極秘任務を遂行する
精鋭兵士集団だった――。



「正義ねぇ。あまり興味ないね。
あるのは隊長と共に在る、運命のみ」

フラム

エトワール近衛隊少佐。シャリオの忠実な部下。野獣系の肉体派で、高い戦闘能力を持つ。

本文イラスト／櫻井しゅしゅしゅ

LA GARDE ETOILE ROYALE

1 星の主

「ご覧なさい、あの星よ」

そう言って母親が指さしたのは、真っ黒な夜空に煌々と光る星座、その先頭の星だった。

アルはまだ四、五歳だっただろうか。

小さな身体で一生懸命背伸びをして、『あの星』を目に焼きつけようとしていた。

「きれいな星。あの星が、どうしたの？」

「あの星を、あなたにあげるわ」

いきなりの台詞に、アルは目をまん丸にして母親を見上げる。

「本当？　あれが、僕の？」

「そう。あなただけの星。……だからきっと大事にして、守ってね」

星を守るって、どういうことだろう？

少し疑問には思ったけれど、そのときの母親の顔はいつにも増してきれいで、優しくて、ほとんど別人みたいにも見えて。アルはわけのわからない、甘いうずきみたいなもので胸がいっぱいになるのを感じながら、思い切り何度もうなずいた。

後から訊いたら、母親は「あら、そんなこと言ったかしら？」なんて首を傾げていたけれど、アルはあの言葉を忘れない。

十年以上経った今も、自分は星の守護者なのだと知っている。



戦場で大切なのは、おびえないこと。

おびえたら体が動かなくなる。判断力もなくなる。

わけがわからないままぶんぶん剣とか銃とかを振り回して、敵を倒すどころか下手をしたら味方を傷つけて、あっさり敵に仕留められるのがオチ。

戦ってる間は心なんて忘れて、遊戯くらいに思ってるのがちょうどいい。

「――おい、いたか？」

「見つからん。このへんだと思うんだが」

兵士たちの不安そうな囁きを、アルは木の上で聞いている。

十七歳にしては小柄な体は鬱蒼と茂った枝葉が隠してくれる。あとはひたすらに落ち着いて、呼吸を整えていればいい。周囲の森に気配が馴染むまで、静かに、静かに。

眼下で話を終えた兵士のひとりが、もうひとりに敬礼して歩いて行く。

残ったひとりはしばらくきつい目つきで辺りをにらみつけた後、アルのいる木に背を向けて

歩き出そうとした。
（もらった！）
すかさず、アルは木から飛び降りる。
がさっ、という音に兵士がぎょっとして振り返ろうとした。しかしアルが一瞬早い。
彼が振り返る前に、背後から口を押さえて、のど元に短剣を突きつける。
「……っ……！　お前、どこにいたんだ……？」
「降参は？」
「……降参だ」
低くうめいた兵士を放り出し、アルは素早く森の道なき道を走り始めた。
（敵は数が多い。とにかく、一気に決める）
記憶の中の地図と目に見える景色を重ねて、行くべき道を割り出す。
そのとき、ぴりぴりっとアルの首筋に嫌な予感が走った。危険の予感。誰かが自分を見つけた。そう思った数秒後、離れた場所から鋭い声がかかる。
「止まれ！」
当然、止まるわけなんかない。
目をつけていた枝をつかみ、地面からつきでた岩をひらりと飛び越えて、その陰に隠れる。
間一髪で銃声。岩の表面に弾丸が当たる、ぴしっという音が響いた。
「くそっ、素早すぎだろ！　当たるかよ！」

敵は情けない声を出し、高らかに警笛を吹く。
「うっ、珍しくまともな対応だ」
アルは顔をしかめ、腰の銃に手をかける。しかし、すぐに考え直して、相手の射線に入らないよう、大雨で削れた森の斜面をすべり下りた。
「待て！　うっ、うわああっ！」
追ってこようとした男が、情けない悲鳴をあげる。
ちらと振り返ると、彼が片足だけで木に宙づりになっているのが見えた。
森に巧妙に仕掛けられた罠に、見事引っかかったのだ。
それに続いて、森の中のあっちこっちで「なんなんだ！」「罠がどうしてここに！」などという悲鳴があがる。
「自分たちの仕掛けた罠の位置くらい、覚えとかないとね。……まあ、俺が場所変えて仕掛け直したんだけど。お大事に」
アルは小さく笑って片眼をつむり、まだまだ悲鳴があがり続ける森を後にして駆けだした。
やがて木々が途切れると、彼の眼前には黒々とした古城が姿を現す。
そそり立つ石壁には、ぱっと見たところ、ろくな手がかりはない。しかしアルは、ここでも一切ためらわなかった。
（古い城だもん、どうにかなる。つるつるの金持ちの豪邸に忍びこむより、よっぽど簡単）
物騒なことを考えながら、石壁に取りつく。実際、古くなった石はあちこち風化していて、

指を引っかけられる場所はちょいちょいあった。
アルは鍛えられた指で的確にそれらをとらえ、次には牙を剝いた獣の姿をした雨樋なんかをつかみ、するすると壁を上っていく。
そうして大した時間もかけずに屋根の上へ身体を押し上げると、アルは急傾斜の石瓦に身を添わせるようにして、そうっと窓に忍び寄った。内部をうかがうと、濁った硝子の向こうで将校がひとり、うろうろ歩き回っているのが見える。
他に警備の人間の姿は……ない。まあ、あったとしてもアルのやることはひとつだ。
彼は石のひさしに手をかけたかと思うと、反動をつけて力一杯窓硝子を蹴り割った。
「何っ!?」
いきなりの騒音と飛び散る硝子に、将校が驚愕の表情で顔をかばう。
アルは足に引っかかった窓枠を室内へ蹴り落として中へ飛びこみ、将校の眼前に短剣を突きつけた。
「――武器を捨てろ」
「貴様……」
将校はおそるおそる腕を下ろし、じっとアルの真っ青な瞳をのぞきこむ。
アルは強い視線で彼を見つめ返していたが、やがてにっこりと笑って言った。
「俺の勝ちですね、教官」
「あ、ああ……実戦なら、わたしが死んでいた」

将校はゆっくりとうなずき、いかにも嬉しげな笑顔になって両手を広げる。
「――おめでとう、アルカイド・クレール。君は、フィニステリア王立陸軍士官学校の卒業試験を、見事乗り越えた。決定はまだだが、確実に首席と見てよかろう。よくやった！」
敵の将校――もとい、将校役をやっていた教官の賛辞に、アルも瞳を輝かせて敬礼した。
「はい、ありがとうございます！　これからも、フィニステリア王国のために全力で頑張らせていただきます！」
姿勢正しく爽やかな、士官候補生の鑑みたいなアルの姿に、教官も満面の笑みになる。
「ははは、期待しとるぞ。しかしまあ、派手な登場だったな。銃を使えばもっと簡単だろうに、短剣だけですますのが実に君らしい。さすがのわたしもびっくりした！」
「それを言われちゃうと弱いです。相変わらず銃だけはちょっと苦手で……でも、このくらいでしたら、使わなくてもどうにかなりますし」
「そうかそうか、規格外の奴め！　とにかく首席卒業おめでと――」
「首席だって、アル!?」
教官が笑顔で力一杯アルを抱きしめようとした瞬間、背後の扉が外から開く。
同時にどっと士官候補生たちがなだれこんできて教官を押しのけ、アルを囲んでもみくちゃにし始めた。
「アル！　首席とか、マジすげえ！　ありえねえよ、おめでとう！」
「試験見てたぜ、なんだよあれ！　模擬刀と塩の弾使ってるっつっても、怖くねえの？」

「まさか三階から乗りこむなんてなあ。せっかく、城の中にも罠を仕掛けといたのに！」

目を輝かせて、あるいは潤ませて、押し合いへし合いしながら叫ぶ彼らに、アルはちょっと困ったように顔をしかめて笑う。

「おい、駄目だよ！　まだ教官からのお言葉、終わってないって。大体お前らの考えは丸わかりなの。一番気合い入れて罠張ってんのが城の中だろうから、わざわざ裏から来たんだよ。ほんと、卒業試験だってのに本気になりすぎ。俺を素直に卒業させろ！　っ、聞いてる!?」

一生懸命説教口調で言おうとするのに、周囲からは無数の手が伸びてきてアルの金髪をぐしゃぐしゃにしてしまう。いくら俺がちっちゃいからって、そういう子供扱いはさ、とアルが口を開きかけたとき、ひとりが妙にしんみりした声を出した。

「でもさあ……お前、ほんとに卒業しちゃうんだなあ、アル……」

すると、今度はいきなり周囲に暗い雰囲気が漂い始める。本気で鼻をすする音まで聞こえてきたので、アルまで一転してちょっと切ない気分になってしまった。

（……困った奴らではあるけど。今まで、色々一緒に頑張ってきたもんなあ）

ここにいる友人たちは数年間寝起きを共にして、厳しい訓練を繰り返してきた相手だ。

アルたちの住む、北方大陸の大国、フィニステリア王国。

早くから文明の芽生えた肥沃の大地に広がる農業大国であり、北方大陸の文化の中心でもあるこの国は、昔から確かな富に支えられた軍事力でもって『北方大陸の主』の地位を揺るぎないものにしてきた。かつて多くの小国を呑みこんできたフィニステリア王国だからこそ、アル

たちの容貌はばらばらだ。それでもみんなフィニステリア人だし、ここに集ったみんなの目標は全員同じ。

大陸一の強国、フィニステリアの生え抜き軍人になること。

そうして油断のならない世界の国々から、フィニステリアを守ること。

同じ高い目標を見上げる友人たちと一緒にいるのは本当に楽しくて、嬉しくて。

――でも、士官学校は『途中』だ。誇りある王国軍人になるための、途中の場所。

だからやっぱり、暗くなりすぎるのはダメだ。アルはしゅんとしかけた心をあえて奮い立たせて笑顔になると、手近な友達の頭を抱え、こめかみを拳でぐりぐりやってみせた。

「ばーか、何泣いてんの、女々しいなあ。俺なんか、一年飛び級しただけだろ？　お前らもとっととこんな男だらけのとこ出て、俺のこと追っかけてこいよ。俺は一足先に、外で可愛い彼女作って待ってるからさ！」

「ああ、それはないな」

「うん、ないな」

「……え？　何がないの？」

いきなりの否定にアルが目を円くすると、士官候補生たちはさも当然、といった顔で言う。

「いや、だから。お前より可愛い女とか、この世にいないだろ」

「うん。お前に彼女とかできるわけねえ。絶対女のほうが横に並ぶの遠慮するわ」

「あ、そういや、『士官学校姫君投票』で優勝した記念もかねて有志でドレス作ってきたから、

ちょっと奥行って着て来い……へぶっ！」

最後まで言わせず、アルはひねりを入れた拳を相手の顔面に叩きこんだ。

「しんみりして、損したっ！　お前ら、ほんとろくなもんじゃねーな！　一体、どこの誰が姫君だっつーの!?」

さっきしんみりしたことを心から後悔して、アルは全身を怒りに震わせて怒鳴る。

確かにアルは昔から小柄だったが、心の男らしさは周囲に全然負けていないと思ったし、士官学校で厳しい訓練生活を送れば、身体だって筋肉むきむきになって男っぽい容貌に変身できると信じていたのだ。

ところが、現実は。

唇はふっくらと薄紅。目元は何もしなくてもくっきり、はっきり、睫毛は信じられないほどに長いし、糖蜜色の金髪は優美にうねり、金の縁取りのようにアルの美貌を飾り立てている。

そんな見た目で、きっ、とにらんでくるアルに向かって、士官候補生たちはそろって声を張り上げる。

「「お前が、姫君だよ！」」

「ふざけんな、死ね、変態！　成績一番、喧嘩も一番、魂は男の中の男目指してるこの俺の、どこが姫君だっつーんだ、言ってみろ!!」

「だから、見た目だって……うぐっ！」

すぐさま相手の急所に蹴りをたたきこんだアルを眺めて、教官はあいまいに微笑んだ。

「いやあ……クレール君は、その、悪ふざけ相手に本気になってしまうところがなければ本当に、非の打ち所のない生徒なんだがなあ。君たち、ほどほどに……あ、聞いてないね」

目の前で「姫、行かないで！」「今だから言う、愛してる！」「マジで死ね！　むしろ殺す！」などという叫びと共にいつも通りの大乱闘が始まったのを眺め、教官は深いため息を吐く。

――さて、そのころ。

卒業試験の舞台となった古い城の別棟には、士官学校校長と、ふたりの客人の姿があった。

「奴ですか？」

「え？　あ、ああ……」

客人に素っ気ない声を出され、校長は少々うろたえ気味に窓の外を見下ろした。

塔の下は、いくつかの建物に囲まれた石畳の広場だ。

ちょうど試験を終えた士官学校生たちが、わらわらと城から出てきてたむろしている。

仲よさそうにじゃれあう生徒たちの中でもひときわ目立つ美貌のアルを眺めて、校長はどことなくやけっぱち気味の笑みを浮かべた。

「とてもそうは見えんでしょうが、あれが本校設立以来の逸材です。普段の卒業試験はこんなにも大がかりではないのですが、彼の水準に合わせていたらいつの間にか、というやつです。こんな試験、他の生徒は八割が半分の地点までも到達しませんよ。はっはっは！」

「なるほど。生徒の無能は、爆笑するほど面白い、と」

いきなりの冷たい台詞に、校長の笑みはぴしりと凍る。
辺りに気まずい沈黙が満ち、今まで黙っていた客のひとりが不意にくすくす笑い出した。
「あー、ほらほら、お気になさらず、校長先生。閣下はいつでも、誰にでもこういう感じなんでね。あんたに特別喧嘩売ってるってわけじゃねーんですよ。ね、閣下？」
低い美声で明るく訊かれても、『閣下』は彼にちらと一瞥をやっただけで答えない。
ただ、もう一度アルのほうを見下ろしてから、唐突に告げた。
「少し、試させてもらいます」
「え？」
校長が額の汗をふきふき顔を上げたときには、『閣下』と呼ばれた客は身を翻して塔の小部屋から出て行くところだった。もうひとりも、軽く肩をすくめて後を追う。
狭い螺旋階段を下りながら、客はのんびりとした声を出した。
「まさかとは思いますけど、士官候補生相手にヘンなことしないでくださいよ。相手は恨む家族もいない天涯孤独みたいだけど、閣下に何かあったら俺が困る。何かあったとき、あなたをお守りするのはこの俺だ。俺の身が持つ範囲にしといてください」
「切っても焼いても滅多に死なない丈夫な男が何を言う。そもそも誰になんと言われようと、貴様がわたしを守る必要などない。今までに一体何度言っただろうな、フラム」
「ひでえなあ、これでも普通の人間ですよ。切ったり焼いたりしたら普通に死にますって！　あとまあ、必要なくたってお守りしますからね。だって俺、他にやることないですし？」

上官と部下、というには少々変わった会話と共に、ふたりの客は石の塔を降りきった。
そしてにぎやかなアルたちに向かい、軍人らしいきっぱりした歩調で近づいていく。
「そこの君。アルカイド・クレール」
客がよく伸びる声でアルの名を呼ぶ。
アルは反射的に足を止め、客のほうを振り向いた。
(誰だろ、あれ)
ひとめ見て、見知らぬ男だとはわかった。
だって、こんな相手は一度見たら忘れられない。
ふたりの軍人、その片方、アルを呼んだほうの男はいかにも非の打ち所のない細身の長身で、ひとめ見て特別仕様とわかる美しい軍服を身につけている。
明るい灰色の上着に、目の醒めるような鮮やかな青緑の襟飾りとタイ。すらりとした足下で長い裾が翻ると、銀の縁取りがちらちらと陽光を跳ね返す。いっそ派手すぎて芝居の衣装じみてしまいそうな軍装だったが、この男が着ると少しも浮ついた印象を与えない。
それはおそらく、全身からにじむ禁欲的な雰囲気とあいまっているからだろう。
彼の怖いくらい隙のない動きは、軍服の下に必要な筋肉がしっかりとついている証拠だし、暗い色の髪はいかにも軍人らしく整えられていて、遠くからでも彫りの深い端整な顔がよく見えた。高貴で、美しくて、それでいてどこからどう見ても軍人、というその姿。
一歩後ろに引き連れている燃えるような赤毛の男も、いかにも膂力のありそうな肩幅の広い

男前である。相当な長身なのに鈍重な気配は少しもなくて、しなやかに美しく動く。
まるで、理想の青年士官を絵に描いたようなふたり組だ。
「すごい……格好いい……！」
「はあ？　お前、何言ってんの」
呆気にとられた友人の声も耳に入らず、アルは段々と瞳を潤ませると、いきなり敬礼した。
（そっか、こういう感じもいいな。こういう感じになれたら、一番の理想かも！）
男の中の男を目指すアルにとって、自分の容姿はどうしたって引け目だけれど、頑張ればこういう方向は目指せるかもしれない。
一体どこの誰なんだろう、名前を聞きたい、所属を聞きたい、何よりとにかく喋りたい。
期待と希望でアルの胸は高鳴り、頬は勝手に上気して、我知らずますます美少女みたいな印象の顔になってしまった。
彼は将校が近づいてくるのを待って、できるだけ元気いっぱいに叫ぶ。
「初めまして。陸軍士官候補生、アルカイド・クレールです！」
「名は知っている。さっきの試験も見せてもらった」
淡々とした言い方と、低い美声があいまって、これまたぞくぞくするほど魅力的だ。
緑がかった琥珀の瞳がやけに冷たく鋭いのだけが多少気になったが、アルは嬉しさを惜しげもなく振りまきながら答えた。
「見てくださったんですか、光栄です。どうでしたか、俺？」

「――戦場で一番大事なことは、なんだと思う？」
急に話をそらされた気がして、アルはぱちりと瞬く。
しかしすぐに気を取り直して、敬礼した手を下ろしてにっこり笑う。
「おびえないことです。おびえたら体が動かなくなる。判断力がなくなる。戦場では心を置き去りにするくらいでちょうどいい、そう思ってます」
「なるほど、貴様はそういう男か」
将校は浅くうなずき、薄い唇に刃物みたいな印象の笑みを浮かべて、アルに片手をさしのべた。縫い目も美しい革手袋に包まれた手に、アルの胸はますます高鳴る。
（これは、期待してもいいってこと？　いい運命が回ってきてるってことなのかな）
思えばアルの今までの人生は、お世辞にも最高とは言い難かった。
生まれたのは治安の悪い下町で、両親は早くに死んだ。友達に恵まれたのは本当に幸福だったけれど、苦しいことは山ほどあった。表通りをがらがらと音を立てて行くきらびやかな貴族の馬車を見つめては、自分だってもう少し運が良ければ――と考えたことも一度ではない。
そんな自分に初めてやってきた、夢みたいな機会。
このひとは、自分の才能を見こんで引き抜きに来てくれた大物なんじゃないだろうか？
彼の手を取れば、その先にはきらびやかで苛烈で、使命感にあふれた日々が待っているんじゃないだろうか。士官倶楽部のシャンデリアに、高級な葉巻の匂いに、品のいい冗談。そして友情と信頼の世界――と、そんな妄想を繰り広げながら、アルは将校の手を力強く握った。



そのとき、不意に首筋にびりっと嫌な予感が走る。
（あれ？　これって）
はっとして手を放そうとしたときにはすでに遅く、アルの視界はぐるっと一回転した。
続いて、背中に響く鈍い衝撃。
「っ……!!」
視界がちらつき、混乱に襲われる。なんだろう？　何があった？
いや――今までの経験から、何が起こったのか理屈ではわかる。
……今、握手した将校に、そのまま手をとって軽々投げ飛ばされたのだ。
（でも、なんで？　どういう冗談なんだ？　大体、どうして俺、避けられなかったの？）
勘がいいあまり、場合によっては銃撃だって、銃を抜く相手の気配を感じ取って避けることができるアルだ。普通ならこんな無様に投げられたりしないはずなのに。
まだ自分が投げられたと信じられない間に、ぐい、と胸が圧迫され、冷たい声が降ってくる。
「――わたしの勝ちだ」
「は……はあ!?　一体、なんのっ……！」
口答えしようとした途端、胸に載った将校の足に力がこもった。
ぎしり、と肋骨が軋む音が聞こえた気がして、ひゅ、とアルの肺から空気が抜ける。
苦しい。どうしてこんなことになっているのか、わからない。わからないままに、将校の後ろで、赤毛の軍人がちょっと苦笑気味の声をあげた。

「閣下。ちょっとやりすぎじゃないですか？　相手はガキですよ」
「ガキだが、軍人だ。軍人ならばわかるはずだ。アルカイド・クレール、貴様の卒業試験の設定ではここは敵地。敵地で見知らぬ人間に気を許した結果、貴様はここで死亡だ」
いきなり告げられたあんまりにあんまりな台詞に、アルは一瞬ぽかんと口を開けてしまう。
次に猛烈な怒りが湧いてきて、飛び起きようとしながら叫んだ。
「失礼ですが、試験はもう終わっています。それに、俺は……っ!!」
「元気だな」
どことなく興味をそそられたような色をにじませたかと思うと、将校はアルの胸に載せた軍靴に思い切り力をこめた。
視界が一瞬かすんでちらつき、アルの喉が勝手に空気を求めてあえぐ。
ぼやけた視界の中で、将校の顔が近づいてくるのがわかる。彼はアルの顔をのぞきこみながら、冷えた殺気に近いものを漂わせて囁く。
「だが、元気なだけならただの獣だ。ひとになりたくばせめて、負けを認めて服従を覚えろ。負けないものは一生真の勝利を得ることはできん。今の貴様は狗以下の、豚だ。……教育に対して、『ありがとうございます』はどうした？」
――信じられない屈辱。
いきなり降ってきた台詞に、アルの頭は怒りでぐらぐらする。
自分は狗か？　豚か？　違う。人間だ。

こんなの、卒業試験を終えた人間にやることじゃない。士官学校の新入生いびりならともかく、自分はちゃんとした一人前の軍人になる資格と、実力を手に入れたはずなのに。

こんなことをする奴の所属はどこだ、と目をこらしても、星をあしらった部隊章に見覚えはなかった。ただし、階級章にやたらと大きな星がついているのは見てとれる。

（……？　いや、見間違いだよな。っていうか、こんなにじゃらじゃらいっぱいくっつけてるってことは、大貴族に決まってる。歳は、まだ二十四、五くらい？……お坊ちゃんか）

フィニステリア王国の貴族は、基本的には建国に関わった者たちの子孫だ。国王から領地を預かった彼らは生まれながらの特権階級で、家を継がない貴族の男は軍に入ることが多い。そしてなんの結果を出すこともなく、出世の階段を駆け上がるのだ。

確かに、昔はそれでよかったかもしれない。貴族は貴族というだけで偉かった。でも、今は国全体が豊かになって、庶民が力を持つ時代だ。

国民議会だってできた今、庶民は大抵貴族のことは悪く言う。

庶民代表みたいな下町出身のアルも例外ではないから、さっきまで感じていた憧れみたいなものはどこかへ吹き飛んでしまった。貴族にだって人格者はいるだろうけれど、ひたすらに権力を笠に着る類の輩は大っ嫌いだ。

あふれそうになる罵倒をどうにか抑えているアルに、将校は追い打ちをかける。

「返事はどうした、クレール。はらわたが煮えくりかえっていようが、心が折れていようが、上官にはまず『はい』と言え」

「っ、はい……っ。得難い教育、ありがとうございました！　上官に対する返事に関しては教官に入学時に教えていただきましたが、俺がぼうっとしてました……！」

苦しい呼吸の下で、どうにか絞り出すように言って、必死に相手を見上げる。

と、不意にやけに優しい目にぶちあたって、アルはぎょっとした。

今もアルを踏みつけにしている将校の目が、なんだか、見たことがないくらい優しいものに見えた。透明で、純粋で、何かを慈しむような――アルが呆気にとられて注視していると、将校の瞳からはすぐに奇妙な優しさは消え去ってしまう。

（見間違い、か？）

アルが違和感をもてあましているうちに、将校はやっと足をのけた。

解放されたアルは、すばやく石畳の上を転がって起き上がる。そのまま勢いよく踵を鳴らし、やけっぱちのように敬礼した。

将校はそんな彼を見ると、ごく淡々と告げた。

「よろしい。ここ二十五年ほどは、国王陛下の偉大なる融和政策によって比較的平和な日々が続いている。しかし、隣国リシェスとは常に緊張関係だ。多少長生きしたいなら気を抜くな」

「はい、心臓に刻んでおきます！」

わかりきったお説教に、それでもすかさず答える。

すると、将校はほんのかすかに目を細めてアルを見つめ、ちらと周囲へ目をやった。

「――校長によると、貴様は常に『ドレスが似合う士官学校生投票』で一番だったそうだが、

埃と土にまみれた今なら周囲も目が醒めるだろう。阿呆面の貴様の友人どもにも、よく言い聞かせておけ。軍人たるもの、常に戦場にいるのだと心得ろ、と」

将校は言い、後はあっさり身を翻す。

距離を置いて心配顔を並べていた士官候補生たちは、将校の言葉に鼻白み、もしくは唇を噛んだ。彼らはすぐにもアルに駆け寄りたそうな様子だったが、将校の置き土産の言葉に動きを封じられてしまって途方に暮れている。

やりばのない怒りと、無力感が漂う空気。

そんな中、アルは遠ざかっていこうとする将校の背中を、じっと見つめていた。

このまま、何事もなく彼を見送るのが正解。そうすれば全部やりすごせる。後で、くだらないこと言うお坊ちゃんだったな、なんて友人たちと笑いあえばいいんだ。わかってる。

……でも、なんだか今は、そうしてしまったら終わりだな、という気がした。

今は、屈してちゃ、駄目だ。

一度だけ目を閉じ、次にゆっくりと目を開けて。

アルは、いきなり動いた。腰に差していた模擬短刀を抜き、将校に向かって突き出す。

いくら模擬刀とはいえ、あまりに容赦ない速さだった。

もちろん誰も止められない。視認すらほとんどできない。

対する将校は、それでも嘘のようにすばやく反応する。

アルの短刀を持った腕を、わずかに身をよじって、肘で挟んで確保する。

口だけではない反応の速さ。アルの攻撃は失敗。
しかし。
（残念、こっちは囮だ！）
アルの自由な片手には、いつの間にか華美な銃が握られている。
彼は短刀での攻撃とほぼ同時に、将校が銃帯に差していた銃を抜き取っていたのだ。
軽くなった腰に気づいた将校が、わずかに、ほんのわずかに目を瞠る。
初めて見る、彼の動揺。
（俺の、勝ち）
どっと全身の血が熱くなる。アルは浮き立つ気持ちで将校の顔に銃口をつきつける。
勝利した。そう確信した瞬間――頭の中をつん、と針で刺されるような痛みが突き抜けた。
なんだろう、と思った直後に、誰かの笑い声で頭の中がいっぱいになる。
「――!?」
こんなときに、一体誰が笑っているんだろう？
一瞬そう考えてから、すぐに真実に気づいてぞっとする。違う。これは、今聞こえている声じゃない。これは幻だ。過去の嫌な思い出が引きずりだされているだけだ。
とっさとはいえ、銃を取ったのがまずかった。
銃を取ったら大抵こうなるのは、わかっていたことなのに――そんなふうに思っている間にも目の前の景色はちらつき、笑い声は大きくなる。華やかな幻の音楽が聞こえる。重なる笑い

声、笑い声、笑い声……あれは父さんと母さんの声だろうか。そう思うと勝手に心臓が高く鳴る。不安で胸がぎゅっと押しつぶされそうだ。

この後に来る幻を見たくない、聞きたくない、思い出したくない——と、そのとき、びりっと背筋に走った殺気に、アルは短い幻視から醒めた。

「くっ！」

こめかみ近くに衝撃が走る。

急所はぎりぎりで外したが、頭皮が切れて血がにじんだ感触があった。おそらく、銃把で殴られたのだ、そう気づいたときには、あっという間に地面にねじふせられていた。

「あーあー、血の気の多いガキだね、こりゃ。閣下、殺します？」

頭上から聞こえてくる声は、将校の後ろに控えていた赤毛の男のものだ。

軽やかな中に暗さを含んだ声に、思わず背筋が寒くなる。

しかし、将校が即座に否定した。

「許可しない。——クレール。さっきはずいぶんまぬけな顔をしていたな。あれがなければ、わたしを殺せていたのに、何があった？」

すっかり冷静さを取り戻した声に、アルはのろのろと視線を上げた。

気づけば周りは真昼の古城で、さっきまで見ていた幻なんかどこにもない。見上げた将校の琥珀の瞳は冷たく、いつか見た夜中の星のようだ。

アルは地面に這いつくばったまま口を開く。

「……殺したかったわけじゃありません。でも、おっしゃいましたよね。いかなるときもそこが戦場、って。さっきいただいた助言を実践してみただけです。まぬけ顔になってたのは……俺は銃が苦手なんで。発作みたいのが出ただけ――だと思います」

「助言の実践？　はー……お前、本物のばかだねー！　そんなんで俺の閣下に銃を向けるとか、マジで殺されるよ。つーか、殺すよ？　俺が殺さなくても軍法会議まっしぐらよ？　どんだけ大物に手ぇ出したかわかってんの、お前は」

あきれ果てた赤毛男の台詞に、背後の友人たちが明らかにざわめきだした。

このままじゃまずい、そう思っているのだろう。それはアルだってわかっているが、なんだか本人としては肝が据わってしまった。今さら、後悔する気もしない。

あそこで動かなかったら、それはそれで後悔していたに違いないのだ。

だって――

「友人をばかにされたのが、腹に据えかねたのか？」

将校の言葉に、アルはちょっと目を瞠った。

どきん、と鳴った心臓が、図星を指されたんだ、と告げている。

そう。女みたいだとか、ドレスが似合うとか、そういうからかいは本当に腹が立つけれど、本当に我慢しきれないほどじゃない。

アルが本当の本当に我慢できないのは、好きなひとたちをばかにされること、だ。

「……はい」

好きなひとたちの名誉を守って罰せられるなら、それでいいや。
覚悟を決めて答え、じっと将校の顔をねめつける。
将校も、じっとアルを見つめる。そして——急に、嬉しそうに微笑んだ。
「本当のばかだな。悪くない」
照れも、怒りも、何もない、ただ綺麗な顔。
今までとがらりと変わった印象に、アルの心臓が勝手に痺れる。息が詰まる。
なんだろう。なんだろう、これ。アルがほとんどぽかんとしている間に、将校は軽く顎で合図を出して、赤毛男にアルを解放させた。
そのまま身をかがめ、将校は地に転がっていた自分の銃を拾い上げる。
「あ……あの——当然ですが、罰は、受けます」
アルが戸惑いながらも立ち上がろうとすると、将校の手が軽く彼の頭に触れてくる。
くしゃ、となでるように優しく触れたかと思うと、将校の手はすぐに離れていってしまった。
「行くぞ、フラム」
すっかり何事もなかったかのように、将校が冷たい声を出す。
赤毛は大いに肩をすくめると、アルに向かってにやりと笑って投げキスをしてきた。
「命拾いしたな、ガキ」
「あ、あの……！」
まさか、これで無罪放免なんだろうか？

アルは信じられない気持ちで声を投げるが、将校はもはや振り返りもしない。
赤毛男も当然のようにぴったり彼にくっついて消えてしまい、後にはなんとも気持ちの整理しようのないアルと、仲間たちだけが残された。
これって一体、どういうことなんだろう。
許された？　慈悲をかけられた？　アルは自分なりに覚悟を決めて動いたのに、これじゃまるで子供扱いみたいにも思える。
今すぐ駆け寄って、もう一度相手を問いただしてみたい――そんな気持ちがわき上がるのを、アルはどうにか振り払おうと首を横に振った。
（駄目だ。きっと、あいつにはもう関わらないのが一番だ。あんなへんてこで、何考えてるかわからないひとに関わってたら、絶対変なことになる）
自分の目標は、立派な軍人になって、出世して、身を立てて。この国を守る、誰からも尊敬される男の中の男になること。そのためには、よそ見なんかしていられない。
集中しよう。先のことだけ考えよう。
（もう、二度とあいつと道が交わりませんように！）
アルはとりあえず猛然と星に祈って、今あったことを心の隅っこへ押しこめることにした。
――しかし、アルはこのとき失念していたのだ。
幼少時から、アルの祈りが星に届いたことは滅多にないのだ、と。

それから半月、アルは将校に逆らったことで校長にたっぷり絞られ、特別講習を課せられ、その合間に友人たちのお別れ会をさんざんはしごし、目もくらむような忙しい日々を過ごした。多忙の中で例の将校の記憶も薄れたころ。

ようやく、アルは正式な軍人として所属部隊に着任しようとしている。

「サントール砦、サントール砦……うん。間違いない。これだよな」

整った眉をひそめて見上げたのは、五角形の形をした石の塔だ。

ここは大陸一の規模を誇る大宮殿、フィニステリア王宮の庭園の一角。小さな集落なら余裕でひとつくらい入ってしまう広大な幾何学庭園の隅っこにあるサントール砦は、ちょっと不思議な形をしていた。

塔が建っている土地自体が五芒星の形にくりぬかれ、周りを堀が囲っているのだ。

（なんか可愛い砦だなあ。こんなところに、本当にあのエトワール隊の本拠地があるのか）

大いに首をひねりつつ、アルは先日の卒業式を思い返していた。

『アルカイド・クレール。君は本日付けで、王立陸軍エトワール隊に配属が決定した』

士官学校校長がアルの配属を発表した途端、それまではしゃいでいた卒業生たちの間には、実に微妙な空気が流れた。

『エトワール隊？　え、あの、よく昔話のネタとかに出てくる……なんだっけ。近衛？』
『だよな。昔の国王陛下が、政治の実権を握ろうとする大司教に対抗するために集めた、忠誠心の高い特別部隊。今はお飾りだぜ。名誉かもしれないけど、首席卒業で行くとこか？』
『大体国王陛下、最近ご病気で離宮にこもりきりじゃないか。陛下のご加護も期待できないんじゃあ、出世も危ういし……やっぱ、あの試験のときのごたごたが影響してんのかな』
生徒たちが不安がるのも、わからないでもない。
アルたちの生まれたフィニステリアは、軍事的に大陸の舵を握る強国で、国民もそのことに自覚的だ。自分たちは、戦えば勝つ、と思っている。
だってそうだろう。長い歴史の中でフィニステリアは大陸中のどの国とも一度は戦争をしたことがあるし、ほとんどの戦いには勝ってきた。
最近の華々しい勝利は二十五年前。当時権威ある古王国だったアルタリア王が狂ってひどい圧政を敷き始めたときも、フィニステリアは毅然として立ち向かった。強国の立場から、自ら先頭に立って大陸の諸国連合軍を組んでアルタリアを完全包囲。
すったもんだのあげくに大勝利をおさめ、戦後の交渉にも当時の若き国王が活躍し、結局旧アルタリア領のほとんどをフィニステリアが併合することになったのだ。
アルタリアは世界に信仰と魔法が満ちていたころからの由緒ある国だったから、その併合は多少のひずみをもたらしたけれど、それでも大陸中が文句を言えなかったのはフィニステリアの実力を見せつけられたからだろう。

伝統も文化も問答無用でねじ伏せられるフィニステリアの武力は、フィニステリア人の誇りだ。そんなフィニステリア王国軍の王立陸軍士官学校を首席卒業となれば庶民にだって——貴族がまだまだ幅を利かせるフィニステリアとしてはここが結構重要なのだが——華々しい出世の道が開けている、というのがこの国の常識。

（なのに俺が近衛に配属じゃ、そりゃ不安にもなるかもね。エトワール隊は名前は有名だけど、まだ存続してたなんて俺自身知らなかったし。最近大きな戦争はないけど、隣国リシェスとはずーっと緊張関係が続いてるし。俺だって、希望はもっと最前線だったけど）

とはいえ、近衛だって王家を直接守ることができる、名誉ある部署だ。

昔はばりばりの貴族しかなれなかったはずの近衛、しかもエトワール隊に、ばりばりの下町出身であるアルが入るのだとしたら……これはこれで大出世の一種じゃないだろうか？

国王陛下は最近病気で離宮にこもりがちだし、第一王子のカストルは芸術にばかりかまけているという噂だが、第二王子のソールは有能で気さく、かつ勇ましく、庶民人気もある。

（王宮に国王陛下はいらっしゃらないけど、ソール殿下を直接お守りできるんなら、近衛も全然悪くないと思う。人気からして次の王様ってソール殿下になるような気がするし、あの方に目をかけてもらったりしたら、みんな絶対手のひら返してうらやましがるぞ）

そう思うと細かい不安なんて吹き飛んでしまって、いい意味の緊張と期待でどきどきし始める。そうだ、見た目はきらびやかなばっかりに見えるかもしれないけれど、自分はきっとここでも男の中の男を目指していける。

そう思って、アルはほんわりと笑顔になりながら声を張り上げた。
「すみません。着任の件で来ました……あれ？」
声をはりあげた途端、扉の向こうから派手な笑い声が聞こえてきた。
どうやらこれは、女性の声らしい。
（お客がいるのかな。そうしたらちょっと間が悪いけど……まあ、任務が一番だし）
「すみません、開けます。本日着任いたしました、アルカイド・クレール准尉です」
本日この時刻に着任せよという指示があるかぎり、雨が降っていようが槍が降っていようが、ちょっときまりの悪い事態だろうがためらっているわけにはいかない。
アルは一応声をかけながら、星や蔦を象った古い金属でとめたアーチ状の扉を開け放つ。
すると、そこは——真昼の薔薇園だった。
「——へ？」
目に映ったものが信じられずにその場に突っ立っていると、いきなり砦の中からあがったすさまじい女の歓声が耳をつんざく。
「きゃーっ、素敵！　なんだかすごい可愛い子じゃない！」
「軍服着てるわあ、いいわあ、お人形さんみたいね！　頬とか指なんか薄紅色よ？」
「ちょっと、誰が声をかけますの？　抜け駆けはいけませんわ、駄目ですわ！」
「な……なんだ……この、酒場よりすごい超高音……」
予想外すぎる事態にアルの身体は反射的に逃げかけたが、そこを理性でぐっとこらえて目を

凝らす。ちかちか、きらきらする光の中に見える極彩色。

砦の中に広がる真昼の薔薇園――と見えたのは、それによく似た耽美世界、だった。

壁に貼られた、目の醒めるような緑色と金の花柄壁紙。

天井を振り仰げば、真っ青な空にむくむく白い雲が湧き、羽の生えた星使たちが飛び交う天井画。床には足首まで沈みそうな絨毯。山盛りのクッション、猫足の寝椅子、その上に盛大にふくらませたドレスをあふれさせた貴婦人たち。唯一広々とした空間である部屋の中央には巨大な東方の壺がでん、と置かれ、本物の花がこれでもか、とあふれだしている。

そんな色とりどりの光景を、天井の梁から下がったクリスタル製の明かりが、きらきら、きらきらと照らし出すものだから、土色の訓練施設とむさくるしい男どもばかり見て数年を過ごしてきたアルは、本気で目眩を覚えた。

「すみません、間違えました!!」

力一杯叫んで扉を閉め、すっかり青ざめて扉に背をつけ、懐を漁る。

「――落ち着け、落ち着こう、俺。えーっと、事態を整理しよう。まずは……うん、命令書を読み直そうか」

取り出した命令書には間違いなく自分の名前と、サントール砦とエトワール隊の名がある。

「……おかしい。だって今、中に男、いたっけ？　いたような気もするけど、なんか……思い出すのが怖いような……わっ!!」

真剣に命令書をにらみつけていると、もたれていた扉が急に開く。

動揺のあまりまともに反応できず、アルはそのまま後ろへひっくり返った。
「な……っ、な、なん……？」
ろくに意味のあることも言えない間に、目の前にずらっと顔が並ぶ。
どれもこれも、種類は全然違うが目に浸みるような綺麗な顔が五つ。誰もが華美な服を着ている。中でもひときわド派手な肩までの金髪男が、にっこり甘い笑みを浮かべて言った。
「フィニステリア王立陸軍おもてなし部隊、エトワール隊へようこそ、僕らの姫君！」

（姫、君）
明るい声が頭の中に反射して、よく意味がとれない。
とりあえずわかったのは『姫君』という単語だけだったので、アルはほとんど反射的に男の顔面に拳を見舞った。
「おうふっ！」
「ひとを勝手に姫君扱いすんな！　どこに目ぇつけてんだ、俺は正真正銘の男だ！」
見事命中の手応えに少々動揺しながら起き上がってみると、周囲からは貴婦人がたの悲しげな嘆きの声、もしくは無責任な笑い声がいっせいにわき上がる。
「あらあら、ずいぶん荒っぽい王子様ねえ！」
「わたくしのクロエ大尉、情けないですわ……でも、打ちのめされる殿方も麗しいものですわ

ね。ふふふ、面白いわ」

「えっ、た、大尉……!?」

その一言で頭が真っ白になり、どっと体温が下がって青ざめる。

言われてみれば、クロエと呼ばれた金髪男がまとっているのは、装飾やら色やらが一切実用的ではなくて見慣れないものではあるが、軍服なのだ。

「っ、大尉！　申し訳ありませんでした！　ご無事ですか？　俺、てっきりそのへんのちゃらちゃらした従僕か何かにからかわれたんだと思っちゃって！」

アルが大慌てで助け起こそうとすると、クロエはいきなり華麗な所作で起き上がり、片手で打撃を受けた鼻辺りを覆ったまま、派手な顔を真っ赤にしてアルをびしりと指さした。

「貴様！　このおもてなし部隊の王子にして詩人、クロエ様をちゃらちゃらした従僕扱いとは何事だ！　この美しい顔に傷をつける貴様は、甘美なる愛の旅路を邪魔する夜盗のごとき者。この際わたしが剣を持って、礼儀というものを教えてやろうではないかっ！」

「いや、夜盗じゃなくて、新任士官なんです、俺。ひょっとして大尉……頭、打ちました？」

ここは責任を持って治療しようか、と思い詰めてアルが訊くと、クロエは真っ赤になってぶるぶる震え始めた。まずい兆候かも、と、アルはますます真剣になる。

「やはり、ここは少し横になられていてください。俺、訓練で頭打って、寝言みたいなこと言い出した奴のこと知ってますから。すぐに医療班を呼んで――」

「このクロエ様の詩を、寝言だと!?　貴様、決闘だ！」

クロエは感極まったように叫び、腰に差していたサーベルに手をかける。
アルははっとして、自分も腰の後ろへ手を回した。
まだ、正式に着任していないのでサーベルを持っていない。でも、腰にはいつもの短剣を差していた。護身用と認められる、刃渡りの短いものを軍に申請して持ってきたのだ。
途端に空気が緊迫し、ご婦人がたの小さな悲鳴があがる。
そこへ、いきなり何かが飛んできた。
「うぐっ!?」
何か、はごきっ、という嫌な音と共にクロエの横顔に命中し、彼はそのまま真横にばったり倒れる。クロエの顔の横に、ごろん、と転がったのは、巨大な——猫のぬいぐるみだった。
……ぬいぐるみというのは、あんな音をたてるものだっただろうか。ぽかんとしてしまったアルの背後から、新しい人物の声がかかる。
「まったく、クロエったら。宮廷では、いくらエトワール隊だって言っても許可なしの抜剣、発砲は禁止だよ？　今さら素人じゃあるまいし」
「——助かりました。ありがとうございます。でも、抜剣、発砲は禁止って、本当ですか」
アルが戸惑いがちに言って振り向くと、ぬいぐるみを投げた人物はにっこり笑った。
「本当さ。昔みたいにエトワール隊が宮廷の別勢力と喧嘩したり、貴族同士が決闘したりしないように、って国民議会が作った決まり。それにしても、その反応速度に、その骨格。君、そんな見た目でも立派な男の子なんだあ。やだなあ、僕の地位が危うくなっちゃう」

やけに甘ったるい声で言い、ふわふわのストロベリーブロンドをこれ見よがしに指に巻きつける。彼はアルよりさらに数歳年下だろうか。やたら丈の短いズボンと、どう見ても特注の膝上まである軍靴が、少年でありながら妙に色っぽいというか、なんというか……。

「ええっと、その、あなたも、エトワール隊の方なんですか――っ、うわ、重っ！」

アルは問いを投げながら猫のぬいぐるみを拾って相手に返そうとしたが、予想外の重みが腕にかかってついついよろめきかけた。

対する美少年は、あっさりぬいぐるみを受け取りながら、なぜか涙ぐむ。

「うん。リシャールだよ。でも、君が来たら、僕はもう要らない子だ。捨てられるんだ。クロエは王子様だし詩も作れるし、他のひとたちもみんな特技があるけど、僕は可愛い以外に取り柄なんかないもんね……」

「捨てないわ！　わたくしたちが指名します！　リシャールはそれでいいのよ！」

「そうよ、可愛いだけなのがいいの！」

「ほんと……？　嘘だったら、泣いちゃうよ？」

リシャールが涙目で振り返ると、貴婦人たちは、またもきゃあきゃあ騒ぎ出す。

（なんだろう、これ。すっごく……殴りたい）

可愛いと言われるのを最大の侮辱と思ってきたアルとしては、正直身もだえしたいような展開だ。しかしリシャールの階級章を見ると、これまた少尉になっている。

士官学校出たてのアルは、尉官の中では一番下っ端の准尉扱い。

リシャールは上官だ。口答えなんかもってのほか、なのだが。見ているだけで猛烈に精神力を消費しそうな気になってきたので、アルは懸命に視線を逃がした。

せめてもうちょっと静かに話せる相手はいないのだろうか。

そうしてせわしなく動いた彼の視線が止まったのは、部屋の隅にたたずむ黒髪の男の上だ。階級章に目を走らせて、アルはすがるような思いで彼に言う。

「すみません、そこの方――少尉。俺は着任のために来たんですが、今、ここがどういう状況なのか、教えていただいていいでしょうか？」

「駄目」

「え？　あ、いや、でもですね」

「教えないよ。後ろのひとが、まだ、駄目だって言ってるし」

後ろの、ひと？

ついつい素直に振り返り、背後には扉しかないのを確認して黒髪の男に向き直る。

相手は波打つ髪で蒼白い顔の半分を隠した、どことなく色気のにじむ美形だ。普通にしていればもてそうだが、なんとなく雰囲気が暗い。喋りも暗い。というか、ぼそぼそしている。

彼はのっそりとアルを指さし、言う。

「寒気、するだろ。お前の後ろのひと、熱烈にお前を愛してるんだ。今も両手でぎゅっと、こう、こんな感じで、ぎゅーっと……」

「それって、ちょ、ひょっとして……幽霊とか、そういう!?」

「他に何があるんだよ。もっとくわしく知りたいんなら、教えてあげたっていいけど……後で、知らないほうがよかったって言われても、責任とれない……」

「……！　い、いいです、結構です！　そういうことでしたら沈黙を守っていただいて……」

「でもまあ、どうしてもっていうんだったら……」

「言ってません！　俺、見える敵ならともかく、それ系は駄目なんですってば！」

「――新入り、ラウル。そこまでいい。ご婦人がたも、少々静粛にしていただけますか」

アルが本気で寒気を覚えて後ずさりだしたところへ、痺れを切らしたように凛々しい声が響く。途端に辺りは嘘のようにぴたりと静かになって、静寂の中、ひとりの軍服姿の少年――青年、だろうか？　が、アルに近づいてきた。

長い枯れ草色の髪をきっちりひとつにまとめた細身の剣みたいな印象の彼は、アルの前に立つと品よくかすかに苦笑する。

「色々と失礼したが、許してやってほしい。みんな、悪気があるわけじゃないんだ。ただ、ここは隊長以下、個性の強い人間が多くてね。申し遅れた、わたしは、レア・ド・アンジュー中尉。エトワール隊の一員だ。君が来ることは、隊長に聞いて知っていた」

「あ、はい！　こちらこそ、取り乱して失礼いたしました。俺はこのたびエトワール隊に配属されました、アルカイド・クレール。准尉扱いです」

アルが慌てて踵を鳴らして敬礼すると、辺りは一瞬、しん、と静まり返る。

なんだろう、と思った次の瞬間、辺りを期待に満ちた黄色い歓声が貫いた。



「ひっ、なっ、なんなんですか！　この異様な雰囲気は何!?　アンジュー中尉、微妙に目線そらさないで！　何がどうなってるんです？　説明してください、説明！」

砦中に響きわたる貴婦人たちの悲鳴に対抗してアルが叫んだとき、背後で砦の扉が開いた。

続いて、冷徹な声が室内に響き渡る。

「軍人たるもの、いかなる場合にもうろたえるな、クレール。我々エトワール隊の崇高なる使命は、高貴なる方々をお守りすることだ。――体はもちろん、心もな」

よく伸びる声で言い、灰色の軍服の裾を翻して入ってきたのは忘れようもない男だ。

「あ……あなた、あの、卒業試験のときの！」

今度こそ零れ落ちそうに目を瞠って、アルは見覚えのある将校を指さす。

「エトワール隊隊長のシャリオ・シルヴェストル・エドモン近衛 中将だ。覚えておけ」

「はっ！　って、え……？」

ほとんど反射的に敬礼した後で、色々な情報がぐるぐると頭の中を巡って心にしみてくる。

やっと全部を理解した途端、アルは思いっきり派手に叫んだ。

「ちゅ、中将、ですか!?　近衛隊の隊長が!?」

「声が大きい。わたしは国王陛下の命令に従うのみ。命令があれば地獄の底にでも着任する。貴様は今までわたしの階級章が見えていなかったのか？」

見えてはいた。もちろん見えてはいたのだが、あまりにもとんでもない階級なのと、階級章の色が他の陸軍と違うからなんとなく信じていなかったのだ。

（だって中将っていったら、下手しなくても司令官とかやる階級……！）

そんなひとにあーんなことや、こーんなことをしてしまった。

真っ青になっているアルの後ろで、今までとは比べものにならない歓声がわきあがった。

「きゃあああ、閣下ーっ！　おかえりなさいませ！　待ってましたのよ！」

「わたくしのシャリオ様！　せめてその、冷たい視線をこの哀れなわたくしたちに!!」

耳をつんざく歓声にアルがよろけていると、将校は以前と変わらない冷えた瞳で華美な部屋をぐるりと見渡し、誰に視線を定めるでもなく、切れ味のいい軍隊式の礼をした。

「ごきげんよう、奥様がた。ご機嫌麗しいようで何よりです」

これまた素っ気ないほどの無感情な声に、貴婦人がたはいっせいに深いため息を吐き、あるいは目眩を覚えた様子で隣のご婦人の肩にすがっている。

将校の後ろでは、例の赤毛がにやりと笑って婦人たちに手を振った。

「今日も素敵な薔薇園だねえ、閣下のサントール砦は！　愛の下僕のフラムは、皆様のことを今日も変わらず愛してるぜ！」

続いて、またも響く貴婦人たちの悲鳴。

「私……私はフラム派ですわ……！　あの情熱的な赤い髪……」

「零れる言葉も、腕も、何もかも熱いに違いありませんわ……」

熱っぽい囁きで満ちる空気にあてられ、アルはほとんど真っ青になる。

（い、いかがわしい……信じられない、これが、軍務？）

どう考えたって違うと思う。ここに名誉とか国を守るとか、そういうものは一切ない。そもそも最近すっかり女性から離れていたアルには、とにかく刺激が強すぎる。

ぐらぐらしているアルを見下ろし、フラムが大きく笑顔を作って少し身をかがめた。

「薔薇の香りにあてられちまったか、お嬢ちゃん？　俺はフラム・デュジャルダン。少佐だ」

「――少佐。先日は、失礼をいたしました」

本当に、この隊は階級の平均値が高すぎる。まだ目眩を覚えながらも、アルは懸命に敬礼をする。そんな彼を見て、フラムは思わず、といった感じで吹き出した。

「ははは、堅い、堅い、堅いねえ！　いいねえ、この青臭さ。いかにも士官学校出のお嬢ちゃん！　だけどまー、ここではもうちょっとやわらかーくでいいんだぜ？　こう、ほら。女性に優しく、触れるみたいにな？　だろ？」

妙に色気のある声音で言い、フラムは思い切りアルの背中を叩く。

不意打ちにアルはうっかり咳きこみ、貴婦人がたはなおもきゃっきゃと騒ぎ立てる。

そんな間に、将校はまるで何も聞かなかったかのように奥の扉へと向かって行ってしまう。

気づいたアルは慌てて顔を上げ、どうにか彼に追いすがった。

「待ってください、閣下！　その……なんなんですか、このふざけた事態は。エトワール隊は、由緒ある国王陛下の直属部隊です。催しならともかく、これはやりすぎではないかと……！」

シャリオたちに続いて入りこんだ扉の向こうは、重厚なしつらえの執務室らしき場所だった。

質の良い家具の上に様々な美術品やら何やらが積み重ねられ、少々ものは多いが全体的に落

ち着いた色味だ。
　アルがひそかにほっとしていると、シャリオは重い木で作った執務机の前で足を止め、くるりと振り返ってアルを見下ろす。
「なるほど、貴様にはわたしがふざけているように見える、と」
「いえ、それは、全然……見えません。ただ、砦が……その、サロンみたいで」
　琥珀の瞳に射すくめられたみたいになってアルが言うと、シャリオは涼やかに答えた。
「エトワール隊が栄誉ある国王陛下の直属部隊だったのは百年前の話だ。貴様も知ってのとおり、現在国王陛下は体調を崩し、地方の離宮で療養中であらせられる。我々に直接命令を下すことはないし、一切の儀礼的業務は他の近衛が担当する。よって、我々の仕事は、ない」
「な、ない!?　それって、どういうことです？　その、殿下たちの護衛とかは……？」
　今度こそぽかんと口を開けたアルに、どっかりと隅の椅子に腰を下ろしたフラムが小さく声を立てて笑った。
「護衛はそれぞれ取り巻きがいるよ。俺たちは基本的に遊んでりゃいーの。エトワール隊っていう由緒ある名前を守るためのお飾りだからな。――だけどまあ、ほんとに遊んでるだけってのもあんまりだってんでシャリオ様が考えたのが、このおもてなし業務なわけよ」
「ちょうど顔のいいのは揃っているからな。ご婦人がたのお相手が一番適任だろう」
　しれっと言ってのけたシャリオを、アルはまじまじと見つめた。
　やることが、ない。

守るべき王族のそばにも、居場所がない。それで、暇つぶしみたいに、ご婦人方の相手をする。そんな、無駄の極地みたいな部隊。

……このひとたちは、それでいいのだろうか？

アルはぐるぐるする思考を抱えながら、それでもまだ礼儀正しく訊いた。

「俺が、その部隊に配属された理由は、なんなのでしょう？」

「わたしの推薦だ。他の隊員も皆そうだが」

「……俺は閣下に失礼をした覚えはあっても、よくしていただく理由はないと思うのですが」

「お前、はっきりものを言うねえ……」

フラムが呆れた声を出すが、ここはどうしてもはっきりさせておきたい。

何もせずに与えられるのが普通の貴族のご子息ならともかく、アルはまともに軍人を目指してやってきたのだ。こんなの嬉しくもなんともない。

するとシャリオは軍帽と手袋を取って机の上へ放り、意外と無造作な所作で机によりかかって内ポケットから銀の煙草入れを取り出す。そして、いきなり言った。

「わたしは可愛いものを愛する」

「は!?」

あんまりにもあっさり言われた台詞に、アルは愕然と凍りつく。

シャリオは表情ひとつ変えずに、冷たい目でアルを見つめながら薄い唇に煙草を挟んだ。

「耳が悪いとは聞いていないぞ、クレール」

「耳は、かなりいいほうと自負しておりますが、その、閣下は俺を、まさか、その、か、か」
「『可愛い』」
「かっ、可愛いと、お思いなのでしょうか!?」
うっかり声がひっくり返ってしまった。
シャリオはそんなアルに酷薄に目を細め、フラムのほうを見やる。
「可愛いだろう？」
「可愛いーですねえ。そこは否定しません」
深くうなずき、フラムは身を乗り出してシャリオの煙草に火をつけた。
どちらも慣れきった、ぞんざいなほどの所作だ。見た目だけなら完璧に格好いい。アルの理想と言ってもいいふたり。そのふたりに——よりによって、可愛い呼ばわりされてしまったアルは、何を言ったらいいのかわからなくなって、ひたすらに真っ赤になって立ち尽くす。
そんなアルを見つめ、シャリオはほんのかすかに笑みを含んで囁いた。
「意に染まぬ任務だと言って、着任を拒否してみるか？　アルカイド・クレール」
からかうような、試すような声音に、アルは一気に我に返る。
改めてシャリオを見ると、彼はじっとアルを見ていた。
そこには変な甘さとか、ねちっこさはなくて、冷徹で、値踏みするような、そして少しおもしろがるような色だけがある。獲物の抵抗を喜ぶような、その瞳。
兎を見る、狼みたいな目。

（負けて、やるもんか）

とっさにわき上がった反抗心にすがって、アルはぐっと拳を握った。

そうだ、ここで逃げてたまるか。

自分はもう、つらいからって逃げるしかできないような子供じゃない。

「いえ。……課せられた任務なら、まっとうしてみせます。どこでだってきちんと理想をもって戦える。それが、男の中の男だと思うので」

懸命に、挑むように言った。

そんな答えは予測していなかったのか、フラムが視界の端でちょっと目を瞠るのが見える。

アルはちょっと胸がすくのを感じながら、じっとシャリオを見つめ続けていた。

とにかく、このひとにあざ笑われるのは嫌だった。

強くて、綺麗で、何を考えているのかさっぱりで、ひとを試すような目をしたひと。このひとに二度と出会わなければそれでよかったけれど、再会してしまったのなら、もう逃げるわけにはいかない。嫌なことは自分の行動で跳ね返す。

相手が何も言えなくなるくらいまで、自分がいい男になるんだ。

（そうだ。そうやって、みんなの目も、俺が醒まさせる。こんなおもてなし業務なんて変だって、もっとやりようがあるんだって、そういうふうに思ってもらうんだ）

いくらだらけているとはいえ、ここは仮にも名誉あるエトワール隊。そしてシャリオやフラムだって、やる気はないのかもしれないが才能ある士官たちだ。

きっと、やればできる。
思っていたのと違うとわめくより、まずは自分で行動だ。
そう考えるとすとん、と心が落ち着いた。
アルはほっと息を吐き、けして少女には見えない凛々しい表情を浮かべて、敬礼をする。
「――アルカイド・クレール准尉。本日付で、エトワール隊に着任いたします！」
それを合図に、シャリオは背を正し、フラムは賑やかに椅子を蹴って立ち上がった。
ふたりはほれぼれするような敬礼を見せ、シャリオがよく通る美声で言う。
「アルカイド・クレール。貴様の着任を認める。励むように」
「はいっ！」
思わず背筋が伸びるアルを、シャリオは冷えた瞳でじっと見つめていた。
そして静かに敬礼の手を下ろすと、うっすらと微笑んで囁く。
「立派な狗になるために、お前はまずは真の恐怖を知れ。自分がおびえていることを認めなくては、恐怖には勝てない。――いいな？　お前が兎ではないことを期待している」

LA GARDE ETOILE ROYALE

2 エトワール隊の昼と夜

百年前、エトワール隊設立時を描いた子供向け冒険小説は、どれもきらきらした夢と、希望に満ちている。

輝かしい美貌と理想、そして何より敬愛する国王陛下をお守りする熱意に満ちた隊員たちは、鶏の声より前に残らず起き出して軍事教練に励み、ことあるごとに国王陛下の立場を脅かす憎き大司教の手下、教会親衛隊と派手な大喧嘩を繰り広げる……わけなのだが。

――現在、エトワール隊の朝はとっても遅い。

早朝を過ぎ、太陽がきらきらと輝き始め、お昼も近くなったころ。

ようやっと最初の客人である、派手な黒衣の貴婦人が扉を開ける。

「ご機嫌よう、みなさん。ちょっと早いけど、来ちゃったわあ。あらあらあら、こんな時間なのにみんな起きてるのね、珍しい！　ああーん、会いたかったわー、クロエー」

「おお、ベルクレール伯爵夫人！　こんなに早くからあなたに会えるなんて、光栄の極み！　今日も海に滴る金色の陽光のごとく甘い美貌で、わたしを誘惑しにいらしてくださるとは……霊感が湧いてきたぞ。あなたのためなら千の詩が書けそうだ」

孔雀めいた装いの貴婦人の前で、クロエが大げさに片膝を突く。
着飾った軍人に飾り編みで作った手袋に口づけをさせながら、貴婦人はきらきら光る目でサントール砦の中を見渡した。
「千の詩は眠くなっちゃうからいらないわあ。それより、昨日待望の新入りがきたって話じゃない。しかもすっごい可愛い子が！」
「なんとっ……！　奥様、お目当てはわたしではなく新入りですか？　恋の花は華やかに咲くからこそ寿命が短いものなのか。しかし許せん……あの生意気な小僧めが！」
拳を作って震えるクロエに、貴婦人は淡く微笑んで彼の額を突っつく。
「相変わらず芝居がかった子。好きよ、そういうの。うふふ、でもね、今日は新人さんの評判聞いて、夜会もないのに来ちゃったのー。どこどこ、新人さん！」
「最近ずいぶん通ってきていただいているのに申し訳ないが、彼はここにはいません」
部屋の隅から声を上げた青年に向かって、貴婦人は色っぽく小首を傾げる。
「あらあら、レアじゃないのー！　今日も相変わらず渋いわあ。また暇なとき、私のためにも占ってちょうだいねえ。で、新人さんは早速お休み？」
「いや。早朝から我々をたたき起こして、みんなで訓練するべきだのなんだのと寝言を言ったもので。隊長が外へ引きずり出したところです」
使いこんだ占い札をめくりながら難しい顔で言うレアに、貴婦人は軽く目を瞠った。
「え？　訓練って、おもてなしとか、行儀作法とかの？」

「いえ。これがなんというか……軍事教練のようで」
レアの言葉に、貴婦人は今度こそ呆気にとられて派手な扇を口元にあてる。
「エトワール隊の隊員さんが軍事教練!?　戦争でもするつもりなの!?」
貴婦人の叫びに、エトワール隊の面々はそれぞれの所作で肩をすくめ、声をあわせて言う。
「まさか！」

「さて、物語では教会親衛隊ときゃんきゃん子供の喧嘩ばかりしていたように描かれる我々エトワール隊だが、実際は国の実権を握ろうとした教会に乗りこんだり、陛下に不利な決定をしようとした元老院を取り囲んだりと、王家によってかなり政治的な使われ方をしてきたのだ」
古い歴史を数字の羅列みたいに淡々と読み上げるように語るシャリオは、今が盛りの秋薔薇の茂みの脇の四阿で古い書物を片手にしていた。
傍らの石の円卓上には芸術的なまでに優美なお茶の用意が載っており、いつもとはうってかわってかしこまったフラムがお茶を注ぐ。
『優雅な午後』とか題名がつきそうな景色の中で、シャリオはふと顔を上げた。
「――ときに、今、腕立て伏せは何回目だ？」
「ひゃく、にじゅっかい、です!!」

やけっぱちのように叫んだアルは、さっきから、青々とした芝生の上で腕立て伏せの最中だ。放っておけば砂糖菓子みたいな綺麗な額に汗をいっぱいに浮かべたアルを眺めて、シャリオは平然とうなずく。

「ならばあと百八十だな。貴様の腕立て伏せが終わるころに、ちょうどよくこの話も終わる。計算どおりに進むことというのは、常に気持ちがいい」

「閣下はそういうとこだけ几帳面ですよねえ。ほっとくと部屋は汚いのに。ご実家から送られてくる服とか家具とか嗜好品とか、もてあますんなら止めてもらったらどうですか？」

「ならば一番に貴様を送り返す。実家から送られてきた中で、もっとも面倒でかさばるものはお前だ」

一見平和なやりとりに、アルは頭を抱えたい気持ちをどうにか抑えて声を絞り出した。

「隊長！　エトワール隊の歴史について学ばせていただけるのはありがたいのですが、なんで、俺だけ基礎訓練をしてるんでしょうか!?」

「貴様が朝も早くから訓練したいと言ったから、つきあっているのだろう。もう忘れたのか」

「覚えてます！　けど、俺はむしろ、みんなに訓練が必要なんじゃないかな、って……」

「いらん」

そこはきっぱり切り捨てて、シャリオは続ける。

「言い忘れたが、エトワール隊ではわたしが規律そのものだ。士官学校で身につけた常識はいったん引っこめろ。この隊では、わたしは隊員ひとりひとりに指揮官であることを求める」

「ひとりひとりが、指揮官……？」

あまり聞かないことを言われて、アルは思わず口の中で繰り返す。

指揮官に求められるのは、状況を判断して的確な命令を出す能力だ。でも、エトワール隊には平の兵士はいない。妙に階級の高い、ほんの数人の士官たち。それがこの隊のすべて。

その全員が指揮官ってつまり、どういうことだろう？

（それで軍隊って成り立つか？　一度もまともな戦場に出たことのないお坊ちゃん軍人ならではの、ずれた考えなのかなあ）

いまいちぴんときていないアルに、シャリオは続ける。

「そうだ。誰もが己の指揮官となり、目標達成のために自分で判断し、自分で動く。それぞれが一部隊ぶんの働きをするように求められる。真の少数精鋭とはそういうことだ」

「なるほど。まあ、実現できればすごいですよね……」

「というわけで、軍事教練がやりたければひとりで勝手にやれ。その他も同様。他に強要するな。わたしも勝手にやるが、責任だけは取る。以上だ」

「……勉強になります！」

それで、あなたがやるのは優雅なお茶か！　とかなんとか、そんな叫びは必死に呑みこむ。

（やっぱりこのひと、素直に尊敬できない！）

大貴族の遊びにつきあわされてたまるか、とも思うが、上官の命令は絶対だ。色々の板挟みになったままやけっぱちのように腕立て伏せに精を出すアルを放って、シャリオはさっきから

めくっていた本を持ち上げた。
アルがちらっと視線をやると、それは歴史の本ではなく、いわゆる『星書』だ。
濃紺の布を張った上に、銀の箔押しでいくつもの星座を描くのがおきまりの装丁の本。
それは大陸のほとんどで信仰される神、『空』について、神使である星が語ったとされる物語を記した本である。
今度は宗教談義だろうか、と脱力気味にアルが待ち構えていると、シャリオは続けた。
「話をエトワール隊のことに戻そう。百年前、陛下には敵が多かった。しかし近年は世界が豊かになると同時に『空』信仰は下火となり、教会親衛隊は解散。貴族が作る元老院は存続しているが、貴族に対する庶民の不満を容れる形で国民議会が発足した。元老院と喧嘩をするのは国民議会の仕事となり、エトワール隊の昔の喧嘩相手は両方消えたわけだ」
時代は変わったのだ、とシャリオは言い、星書を卓へ置き直す。
言われるまでもないが、それはまあそうなのだろう、とアルも思う。
若い世代のアルは政治については国民議会派だし、宗教についてはぴんとこない。
空そのものが神様だとか、太陽と月は神のふたつの瞳、星は神に仕える神使だとか言われても、ふーん、それで？　といった感じ。
（このひとは、貴族だからだいぶ考えが違うんだろうな。宗教話にならなかったのはありがたいけど、こんなときにも星書読むくらいだし。そういえば、星石のお守りも持ってたっけ？）
気になってちらちら視線をやると、シャリオの胸でお守りの首飾りがかすかに光ったのが見

えた。軍服の上からかけられている首飾りは、多分小さな星石をはめこんであるのだろう。
星石。それは空から降ってきた石の中でも、磨くと美しい輝きを放つものを言う。
相性のいい人間が持つと少しばかり魔法じみた力を発することができるので、大きなものは昔から権力者が追い求め、小さなものは高価なお守りとして主に貴族の間に出回ってきた。
下町育ちのアルなんかではそもそも触れるようなものではないから、それがほんとうにお守りになるのか、一体どんな『不思議な力』があるのかも知らないけれど、それを軍装の上にまでつけておくなんて。
ちょっと古くさくて嫌味な感じだな、とこっそり思いながら、アルは声を張りあげる。
「それで、現在のエトワール隊に、腕立て伏せは必要なんでしょうか！」
「必要なはずがないだろう」
今までとまったく同じ調子で言われ、アルは今度こそ芝生に顔を突っこんだ。
「もう限界か、クレール」
いかにも素っ気ないシャリオの声に、アルは内心歯ぎしりしながら地面を睨んで叫んだ。
「まだです、けど！　エトワール隊に今戦うべき敵がいないとしても、軍隊なんですから。もうちょっと実践的な訓練がしたいんですが！」
「実践的な訓練。卒業試験の後のような？」
シャリオの声が、ほんの少しだけ笑った気がする。
（顔も、笑ってるのかな）

妙に気になってアルが顔を上げると、そこにはフラムの軍靴があった。
「わっ！」
いつの間に、そんなところに近寄られたのか。
わからないまま、アルはとっさに横へ転がって避ける。
フラムの足は空を切り、彼は彫りの深い顔にひとなつっこい笑みを浮かべた。
「あ、避けやがった！　お前、ほんとに獣並みにすばしっこいのなー」
言いようはほがらかだが、よりによって顔を狙ってくるなんて相当危ない。アルは彼から充分な距離をとって地面に膝を突き、青い瞳を鋭くしてフラムを睨む。
「ありがとうございます。あなた、容赦ないわりに殺気とか全然ないですね」
「殺気なんかないよー、だって、こんな可愛い子を殺す気なわけないじゃない？」
「だったらいきなり蹴らないでください！　心臓に悪いですよ！」
噛みつくようなアルの主張に、フラムはポケットに両手をつっこんだまま眉尻を下げた。
「しょうがないだろ。ここで俺が出なきゃ、どうせ隊長が出てくるんだぜ？　よりによって、お前のへっぽこな剣を受けるためにさ。それは許しちゃなんねーの。俺は閣下の犬だから」
それってどういうことだ、と一瞬頭が混乱する。
でも、それより何より、へっぽこ呼ばわりでかっと頭が熱くなった。アルは反射的に腰の短剣を探るが、それより先にフラムが手にしていた二本のサーベルを高く掲げる。
そのままくるっとシャリオのほうを振り返り、フラムは明るい笑顔で訊いた。

「ってことで、俺とアルとで実践的な訓練。やっちまってもよろしいでしょうか、閣下？」
「クレール。フラムはわたしより性根は真っ当な男だが、常にわたしを守ることが最優先の番犬だ。わたしに敵対するそぶりを見せると十中八九殺される。勝手に死ぬなよ」
本の上から視線をそらさず、シャリオがさらっと言い放つ。
「んー、閣下に話しかけてるのは俺なんですけどねえ？　まあいっか。番犬はわがまま言いません。なにせ人間じゃねえからな」
フラムは小さな笑い声を立て、アルに向かってサーベルを一本投げ渡してきた。
訊きたいことは山ほどあったが、アルはそれらすべてを胸の奥にぎゅっと押しこむ。
投げつけられたサーベルをつかむと同時に、革帯の背中側につけていた短剣を抜いた。
――剣を取ったら、戦いは始まったってことだ。
アルは相手が剣を抜いたかどうかも確かめずに、地を蹴った。
サーベルから、じゃりん、と音を立てて鞘が落ちる。
フラムの顔から笑みが消えるのがわかる。
ちょうど、そのとき。
「お前ら、ここで何をしている！」
知らないだみ声が響き、アルとフラムはとっさに動きを止めた。
（なんだ？）
行き場のない闘争心をもてあましてアルが振り返ると、迷路みたいな植えこみの間から、エ



トワール隊よりもだいぶ無骨な軍服じみた装いの男たちが姿を見せる。
先頭に立ったひとりは、これ見よがしな口ひげをなでながら、陰湿な瞳をアルへと向けた。
「ん？　答えられないのか。その手にあるのは、一体なんだ」
なんだ、と言って彼が見つめているのは、アルの手に握られたサーベルだ。
（やたら偉そうだけど、こいつら軍人じゃないよな）
相手の制服と階級章が見知ったそれではないことを確認し、アルは少しばかり眉根を寄せた。
「見たとおりの官給品です。というか、質問の前に名乗られては？」
「は！　なんと！　この宮廷警察隊のダントン・ランドールに名乗らせるのが最近の近衛の新人か！　ああ……しかし、その星の記章。そうか、エトワール隊は百年前に陛下が私的に作られた部隊。正確に言えば普通の近衛とも違うのでしたな」
いかにも嫌味な言いように、アルは反射的にむっとする。
「俺はエトワール隊の、アルカイド・クレール准尉です。宮廷警察ってことは、警察の一部署ですよね。王家の管轄のエトワール隊に命令する権限はないと思うんですけど、個人的に喧嘩を売りたい理由でもあるんですか？」
「ぶっ！」
背後でフラムが思い切り吹き出した気配がするが、アルとしては間違ったことを言ったつもりもない。一応礼儀正しく言っている、はず、でもあるし。
果たして宮廷警察のダントンは、口をぽかんとあけてしばらく沈黙した後、見る見る顔を真

っ赤にして烈火のごとくまくしたて始めた。
「喧嘩だと？　そのような低俗な行為に及ぶのは貴様等だけだ！　いいか、現在王宮の警備は我々宮廷警察に一任されている。宮廷の敷地内では国民議会の許可なく発砲、抜剣を行ってはならんと、前々から言ってあるはずだ！」
「でも、訓練ですよ？　訓練もできないなら、剣なんか提げてるほうが無駄じゃないですか」
憮然としてアルが言うと、背後からシャリオの声がかかる。
「クレール、少し黙っていろ。抜剣に関してはこのわたしが、訓練に限ってという条件で許可したことだ。何か問題でも？」
あくまで冷静な言いように、ダントンはことさらねちっこく答えた。
「問題は大ありです！　いけませんなあ、エドモン中将。エトワール隊があなたの道楽部隊なのはよくよくわかっているつもりでしたが、お飾りはお飾りらしくしていてくださいませんと。よりによって、大事なリシェスの王子をお迎えする前ではないですか？　あなたがそのような態度では、まるで結婚式を失敗させようとでもしているかのようだ」
（リシェスの、王子が結婚？　え、まさか……ここ、フィニステリアで？）
急に出てきた想像もしなかった言葉に、アルは思わず音が立ちそうな瞬きをする。
リシェスと言えば、フィニステリアと年中小競り合いの絶えない隣国だ。その王子がフィニステリアに来るなんて、それだけで大事件だし、さらに結婚だなんて――そんなこと、可能なんだろうか？　そもそも噂にも聞いたことがない。

疑問は山盛りだが、何か訊こうにも黙れと言われてしまった後だ。
アルが問う瞳で振り返ると、シャリオはちょうど立ち上がったところだった。
相変わらず一切の無駄のない動きでアルに歩み寄りながら、シャリオは言う。
「リシェスの王子とフィニステリアの姫君の結婚は、国王陛下の悲願だ。血縁関係さえ築かれれば、両国の長い争いに終止符を打つことができる。それにどうしてわたしが反対する？　陛下の意思はわたしの意思だし、わたしは戦争は好かん」
「そーそー。俺たちエトワール隊は平和大好きですから。結婚式の失敗を望んでる人間がいるってんなら、むしろリシェスと戦争したい血の気の多いおひとじゃねーの？　ほら、常時軍服着用のソール王子とか……」
思わせぶりにフラムが言うと、シャリオは不意に瞳を光らせた。
「フラム」
鋭くフラムの名を呼び、振り返りざまに思い切り彼の頬を張る。
かなり容赦のない打擲だったのだろう。宮殿の庭園に乾いた音が響き、長身のフラムが半歩よろめいた。
いきなりのことに、アルを始めとして宮廷警察の面々までびっくりして凍りつく。
そんな中、シャリオは周囲など一切気にしない様子で、恐ろしく冷たい声を出した。
「――我々は国王陛下のエトワール隊だ。何があろうと、王族への批判は一切ゆるさん」
「はっ。失礼いたしました！」

フラムがすぐさま真顔になって敬礼するのをじっと見つめてから、シャリオはアルに向き直った。まだ冷気の残るシャリオの顔に、アルも息を呑んで背筋を伸ばす。

しかし、シャリオは一転して淡々と言った。

「クレール。帰って昼食にしよう。ちょうどそんな時間だ」

「えっ!?　しょ、食事、ですか？」

この緊迫した場には、あまりに場違いな提案だ。

一体どう答えていいのやら。呆気にとられたアルの背後で、宮廷警察のダントンが勝ち誇ったような声を出す。

「……さすが、隠居のエドモン卿は処世術をご存じだ。あんなことがあってもこのような名誉職に就かれるのですから、さすがに陛下の覚えがよろしいのでしょうな。陛下が快癒なされて離宮から出てこられれば、卿もお忙しくなるでしょうに。たとえば、そう、夜などが」

品のない冗談に、宮廷警察の隊員たちからかすかな笑い声がわき上がる。

あまりにどうしようもない冗談だったせいで、アルがその意味を知るにはしばらく時間がかかった。少し考えこんで、シャリオが国王の愛人みたいに言われたんだと気づいたとき。

――ふつ、とアルの頭の中で何かが切れる音がした。

「……今の、何が面白いんです？」

自分でも、ちょっとびっくりするほど冷たい声が出た。

思いもかけないアルの声に、表情ひとつ変えずにきびすを返そうとしていた、シャリオとフ

ラムが振り返る。ダントンもまた、顔をしかめた。
「なんだね、君。いきなり失礼だろう。謝りたまえ」
「俺が謝る理由はありません。だって、失礼なことを言ったのはそっちでしょう？　どんなとき、どんな相手にだって、絶対に言っちゃいけないことっていうのがある。あなたが言ったのはそういう類だ。――今すぐ隊長に謝ってください」
「話にならんなあ。エドモン卿、あなたは部下の教育というものを――」
ダントンは薄ら笑いを浮かべてシャリオに話しかけようとしたが、アルは無視して彼に歩み寄った。不躾なくらいぎりぎりまで詰め寄って、アルはじっとダントンの顔を見つめる。
「あなたと喋っているのは、俺です。隊長じゃない。まずは、喋ってる俺をちゃんと見て、非を認めましょう。次に、隊長に謝ってください。そのふたつが出来ないなら、俺はあなたを人間扱いする気はありません」
アルの声は不気味なくらいに静かだった。
多分怒りが度を超してしまって、ぱっと外に出てこなかったせいだと思う。
アルにとって許せないこと。それは、友達を、仲間を、傷つけられ、ばかにされることだ。たとえ色々思うところがある隊長相手でも、こんな言い方をする奴は許せない。
「人間扱いしない……だと？　それで脅しているつもりか！」
ダントンはひきつった笑いを浮かべて声をあげたが、その声は見事にひっくり返っていた。
本人もそのことに気づき、さっと青くなって口元を押さえる。

やっぱりこんな奴、ただの意気地なしだ。
アルがさらに追い打ちをかけようと息を吸い込んだとき、ふと肩に誰かの手が載った。はっとして顔を上げると、そこには涼しげなシャリオの横顔がある。
「隊長」
呼びかけには答えず、一瞬だけアルの肩に置いた手に力をこめてから、シャリオはあっさりと身を翻した。
「いくぞ、ふたりとも」
「えっ、でも……」
戸惑うアルの背を、フラムが軽く叩いて一足先に歩き出す。
「ほれ、早く行くんだよ。隊長の命令だぞ」
「……はい」
なおも迷いは残ったものの、シャリオの命令と言われてしまったら逆らえない。
背後からは、残された宮廷警察の面々の不満げなざわめきと、くすくすという笑い声が追ってくる。それがなんとも心にひっかかり、アルはぐっと拳を作って、シャリオたちの背中だけを見つめて歩いた。一度でも振り返ったら、警察に大喧嘩を売りそうだったからだ。
そうして黙々と薔薇の茂みを抜けて、サントール砦が見えてきたころ。
いきなり横からフラムががっしとアルの頭をつかみ、巻き毛をくしゃくしゃにし始める。
「よくやったっ、アル！　いい子いい子！　今度酒と女おごっちゃる！」

「えっ、えっ？　よくやったって、どれのことです？」
「全部だよ全部！　俺、お前気に入ったわ！　ほんとに遊びに行こうぜ！」
「フラム、あまり甘やかすな。クレール、貴様は二度とあのゴミに喧嘩を売るなよ。さっきの対応は下策だ」
冷淡に言い捨てられて、アルの胸にはかっと熱いものがわき上がる。行き場のない思いを抱え、アルはどうにかフラムを押しのけて叫んだ。
「隊長！　でも、侮辱されてたのは王家と隊長と両方ですよ？　あんな下劣な奴らが宮廷警備してるなんておかしいです！　だったらいっそ、俺たちが頑張ったほうがよっぽど……」
「ばかか、貴様は。わたしがどうして、朝からエトワール隊の成り立ちを話していたと思う」
ばか、と言われればかちんと来るが、そのまま口に出すわけにもいかない。
むっと口をつぐんで考えこむアルの頭を、フラムがなおもつっつきながら続けた。
「つまりねー。ばかでお気楽なふりしてたほうが、自由に動けるでしょ、ってこと。エトワール隊はぶっちゃけ国王の私兵だからさ、国民議会には警戒されてんの。いざってときに議会を武力で囲まれたら困るだろ？　そのへんのからみで、俺たちににらみ利かせるために国民議会管轄の警察が宮廷にも入りこんでんのよ」
「……じゃあ、今のエトワール隊の敵は、宮廷警察ってことですか？」
少々複雑な気持ちでアルが訊くと、フラムは笑顔でうなずく。
そしてさらに、アルの耳元に小声で続けた。

「あいつら、責任のおっつけあいばっかで全然役にたたねーの。そのうえ宮廷警察ん中でもさ、やばい一派っていうかなんていうかがあるのよ。そもそも、あのソール王子の取り巻きってのが宮廷警察でさ――」

「もう一回殴られたいのか、フラム」

前からシャリオの凍えた声がかかり、アルは背筋にびりっとするものを感じて背を伸ばした。反射的に視線を上げると、立ち止まって振り返ったシャリオの姿が見える。

いつも通り静かに見えて、なんだか心臓がぐっと押しつぶされるような圧迫感のある姿だ。冷えているのに熱い、そんな鋭い視線を受けて、フラムもまた背を伸ばす。

「いえ。失礼いたしました」

戯れ言のひとつもなしに敬礼するあたり、フラムもこの雰囲気を感じ取っているのだろう。

シャリオはしばしじっとフラムを見つめてから、アルに視線を移して言った。

「クレール。間違うな。我々の敵は、王宮の平和を乱すものすべてだ。相手が何者であろうと容赦してはならないが、おかしな思いこみは持つな。それと、ソール殿下にはなるべく関わらないことだ。殿下のことで何かあったら、すぐにわたしに言え」

「はい。ええっと……殿下と、お知り合い、なんですか？」

なんだか含みのある言いようだな、と思い、アルはおそるおそる訊いてみる。

憧れのソール王子の名前が、なんだか不穏な会話に出てくるのがどうにも気になる。

病気で離宮に籠もっている国王や、サロンに籠もっている第一王子とは対照的に、年中勇ま

しい軍服姿で国民の前に姿を見せてくれるソールは、アルたち庶民の心の支えだ。
アルは彼が居ればフィニステリアはずっと強い国のままで居られる気がしていたし、その気さくさに救われてもいた。あんな王様なら、上に頂いてもいいと思っていた。
そんなソールと直接の面識があるであろう、大貴族のシャリオがこんな態度というのは、正直不安だ。
（ひょっとして、あれかな？　宮廷の、派閥とかそういうやつがあるのか？）
シャリオがソール派でなかったらどうしよう、そんな気分でアルは彼を見上げる。
気まずい数秒の後、シャリオはふっと色の薄い睫毛を伏せて言った。
「――ソール殿下はありとあらゆる場所に太い人脈がある。もちろん、国民議会にもな」
「それって、庶民派の王子ってことですよね。あ、だから宮廷警察がソール殿下の取り巻きなんですか。でも、そのことに何か、問題でも……」
「クレール。貴様はおもてなし業務以外の任務が欲しいか？」
自分の言葉をさえぎるようなシャリオの言い方に、アルは一瞬むっとする。しかし、言葉の内容を理解するとすぐにそんな気分は吹き飛んだ。
「はい！　やっぱり、あるんですね、任務！」
声を明るくするアルを真っ向から見つめ、シャリオはほんのかすかにうなずいて言う。
「あるが、あくまで表向きのものではない。実際に貴様がこの任務に関わるかどうかは、貴様の自由意思で決めろ。――半月後に迫った、リシェスの王子とフィニステリア王族の血を引く

姫君の結婚を、何があっても成功させること。それが、わたしが貴様に与えられる任務だ。この結婚はリシェスとの恒久的和平を望む国王陛下のご意思。無事成功すれば少なく見積もって二十年以上の平和が訪れるはずだが、失敗すれば即戦争となる」

「――即、戦争、ですか」

いきなりの重大事に、アルは思わず口の中で繰り返した。

いつ戦争になったっていい、むしろ早く戦場に出たいくらいの思いで士官学校を出たアルだが、自分がそのきっかけになる事件に関わるとなると、肌がひりつくような緊張を覚える。

とっさにどう答えたらいいかわからずにシャリオを見つめると、彼はアルが今まで見たこともないような、真剣な目をしていた。

何か、どこか遠くの、とんでもないものに挑むような目。

魅入られたみたいに突っ立つアルに、シャリオはなおも続ける。

「この結婚はぎりぎりまで一般市民には知らされない。理由はいくつかあるが、一番大きいのは警備上の理由だ。リシェスの王子をあくまで敵国の王子と見なす者は多く、宮廷警察はあてにならん。いざとなったら己の命に代えてでも、王子と姫を守る任務――遂行できるか？」

いきなりそんなことを言われて、アルの頭の中はとっさにぐしゃぐしゃになった。

（遂行できるかって言われても……そもそも、結婚自体がいきなりすぎるよな。今のフィニステリア王家の直系に姫っていたっけ？　いないよな？　だったら傍系だろうけど――とにかく王族同士の結婚だ。それが国民に内緒って、なんかもやもやする）

庶民出身のアルとしては、もう少し国民にも事情を明かしてほしいし、わけのわからないまま『命を賭けられるか』なんて言われても戸惑ってしまう。

宮廷警察がソール王子の取り巻きなら、彼らを出し抜くのはソール王子と敵対することになるかもしれないのも心配だ。とはいえ、さっきの様子を見ていたら宮廷警察があてにならないのも、確かのように思えてしまって。

「……このエトワール隊の任務は、非公式、なんですよね？」

悩んだ果てにおそるおそる訊いてみると、シャリオは無表情のまま浅くうなずいた。

「そのとおり。我々は結婚式には、お飾りとして列席する予定になっているだけだ」

「そもそも、みんな俺たちに何かできるとは思ってないしねー。そのための、色々ですよ」

ぱちん、と派手にフラムが片眼をつむったので、アルはびっくりして大きく瞬いた。

「そのための、色々って。じゃあひょっとして、おもてなし業務とかも全部、無能ぶるためのものですか？」

「どうだ、フラム？」

なぜかシャリオがフラムに訊ねると、フラムは笑って肩をすくめる。

「おもてなし業務に関しては、半分以上は隊員の純粋な趣味じゃねーですか？」

「一体どんな趣味の隊員を集めてるんですか、それっ！　いや、でも……」

「でも？」

口ごもったアルに、シャリオがしれっとして聞き返す。

その様子は完璧に冷静で、感情の揺らぎなんかちっとも見えなかった。
彼の冷静さは、アルには頼もしいようにも見えるし、得体が知れないようにも見える。さっき宮廷警察にばかにされたのも、全部がエトワール隊を無能に見せて、いざというときに反則みたいに動くためのものだとしたら……よくも大貴族がそんなことを我慢できるものだ。
どうしたらそんなことができるのか。
……シャリオにはよほど結婚式を成功させたい理由がある、ということなのか。
（ソール殿下に対しての態度もあるし、このひとについていくのが、正解かどうかは、まだよくわからないけど……ここで任務を拒否しても核心に近づけないのは、確かだろうな）
ぐるぐる考えた後に出た結論は、そんなことだった。
自分には、わからないことが多すぎる。ならばいっそ、飛びこんでしまうほうが得策だ。
アルは様々な懸念をえいっと頭の端へ追いやって、真剣な顔をシャリオに向ける。
「……隊長、さっき、エトワール隊は隊員の自主性を重んじるっておっしゃいましたよね」
「その通りだ」
「だったら俺はこれから、結婚式の警備に備えて王宮の下見をしたいです。俺たち、ぎりぎりまで抜剣とか発砲もできないみたいだし、数も数人しかいないし。戦闘が得意そうなのも、隊長とフラム少佐と、俺くらいですし。本当に王子と姫をお守りするなら、できるかぎり下準備するしかないですよ。俺、結構罠をかけたり、戦略的なことも得意です。充分な準備ができるなら、その任務。……お受けいたします」

シャリオの反応を探るように言い切ったアルに、シャリオはわずかに目を細めて答えた。
「いいだろう。ただし、わたしも同行する」
「本当ですか？――ありがとうございます！」
意外なほどにあっさり引き受けたシャリオに、アルは思わず背を正した。
宮廷警察との調整が大変だろうに、こんなにこともなげに言い切るなんて、結構このひとも頼りがいがあるのかもしれない。
様子を見ながらだけれど、しばらくは素直についていってもいいかも、なんてアルが考えていたところへ、シャリオが冷たい声を出す。
「ただし、下見は夜だ。それまでは、通常任務が待っている」
通常任務って――とアルが聞き返す前に、シャリオがサントール砦の扉を開ける。
途端に、貴婦人たちのきゃーっという歓喜の悲鳴が、辺りに大音量で響きわたった。

その後のシャリオが一体どんな立ち回りをしたのか、はたまた全然しなかったのかは、アルにとっては定かではない。
確かなのはその夜、アルがシャリオとフラムと共に宮廷の一角にたたずんでいたことだ。
「うわー……すっごい……何、これ……！」

アルは昼間の貴婦人たちにもみくちゃにされた疲労も忘れ、しばし警備の下見という任務も忘れ、ぽかーん、と口を開けて辺りを見渡していた。

ここは夜会や重要な謁見など、王族がからむ『はったりをきかせなくてはならない場面』では必ず使われる大広間だ。当然、アルたちが警備に当たる結婚式の会場にもなる。

明かりが消され、月光のみが大理石の床を照らす夜でさえ、目に入るものすべてが美しすぎ、きらびやかすぎて、アルはなんだかくらくらしてきた。

「おーい、感動すんのはいいけど、うかつに動いて何かひとつでも壊すんじゃねーぞー。ここの鏡一枚だって、お前の年収じゃ買えねーんだからさ」

ふざけたフラムの声に、アルはむっとして視線を引きずりおろした。

「了解してます。俺は汚い裏路地育ち、隊長と少佐は色々桁の違う大貴族。こんなものくらい、見慣れてるんですよね」

「おっ、言うねえ。隊長が生まれついての高貴なお方なのは確かだけど、俺は貴族は貴族でも買われた貴族だぜ。フィニステリアの古い植民地で売りに出てたのよ」

「売りに？　え、それって……奴隷階級出身って、いうことです、か？」

言ってしまってから、しまった、とアルは思う。買われていようがなんだろうが、相手は今は貴族だ。こんなことをはっきり言われて、気持ちよくはないだろう。

口ごもったアルの様子に、フラムはたまらない様子でくすくすと笑う。

「ほんと、お前はお嬢さんだねえ。いいじゃないの、俺はそれでもちゃーんと閣下の親戚の目

に留まって護衛用に買われて、よりによって養子にまでなったんだもん。故郷はまあ、色々大変よ？　見よ、俺の強運！　ってとこだな」

軽やかに言い放ち、フラムは気楽な歩調でシャリオの後に続いた。

（護衛用に、ひとひとり買う、か。ほんと、貴族って……わかんないなあ）

鏡のようにすべてを映しこむ大理石を踏んで行くシャリオの後ろ姿は相変わらず完璧に美しく、それに添うフラムだって、奴隷出身だなんて少しも思えない優雅さだ。

自分は本当に、一体どうしてこんな隊に呼ばれたんだろう。家柄ではけしてあり得ない。やっぱり顔、なんだろうか。……どうも、それだけは考えたくないのだが。

一瞬真剣に考えこんだ後にアルがぶんぶん首を横に振って我に返ると、きらびやかでだだっ広い広間にシャリオとフラムの姿が見当たらない。

「あれ？　隊長、どちらです？」

「ここだ。貴様はここへ見物に来たのか？」

少しくぐもった声のするほうに、角灯片手に慌てて歩み寄る。そこには扉なんかひとつもなくて、壁にびっしりと鏡がかかっているだけだった。鏡は光を反射させるところが星を思わせるから、王宮にはよくある装飾なのだ。

「えーっと、このへん……かな？」

野生の勘と空気の流れで見当をつけ、ほんの少しだけ塗料の剝げかけている鏡の縁を強く押しこんでみると、自分の背の丈ほどもある巨大な鏡がそのまま向こう側へ開いた。

「……すごい、ほんとに開いた！　隠し通路だ！」

感動の声をあげ、鏡の向こうへ頭を突っこんできょろつく。

そこは部屋と部屋を繋ぐ小さな部屋で、一応ちょっと可愛い寝椅子なんかも置いてある。

シャリオとフラムはその椅子の前にたたずんでいたが、アルが入ってきたのを確認するとすぐに先に立って歩き出した。

シャリオは勝手知ったる様子で、部屋から部屋へと移動しつつ言う。

「隠し通路、というのは完全な正解とは言い難いな。ここは王宮の『裏』だ。外からの客に『見せる』部分が多ければ、『見せない』部分も自然に生まれる。裏と表、どちらもなくては王宮としての機能を果たさないが、裏の全貌を把握する者は少ない」

「そういえば、王宮じゃ風呂も食事も見物人が来るんですっけ。いざってときに逃げこむところがなくちゃ、王族の方々でも疲れちゃいますよね。でも……こんな広大な裏があったら、守るのは難しそうだ。俺が賊だったら、こっちを使って忍びこむかも」

「堅い上官ならその場で怒り狂う発言だな。――考えたことを言ってみろ」

シャリオはどこまでも偉そうだが、けして怒るそぶりは見せないで先を行く。

アルはほっとして周囲を見やり、不意に気づいた。

（ひょっとしたら、これが俺の役目なのかな。隊長たちみたいな貴族出身のひとは、生まれつきこういうとこに慣れてる。俺にはそれがないぶん、新しい視点でものが見られる）

下町育ちの人間ならではの視点というのも、役に立つかもしれない。

そう考えるとほんのりと身体が温まってきて、周囲の観察にも熱が入る。

さて、自分が泥棒なら、どんなふうにここを攻略しようとするだろう？

「――外壁には彫像とかで色々でこぼこがあるから、壁登りは意外と簡単そうです。でも、昼じゃ警備があるし、窓をばーんと割ったら目立ちすぎる。俺ならどうにかして使用人か元使用人を引きこんで、通用口を攻略して、裏のどこかに潜んで機を見るかな。単なる物取りなら、裏の川の辺りから攻めるのもありです。盗品を輸送するのにも、川があれば楽ですし」

「川から侵入してこられるとすれば、ちょうどこの辺りだな」

シャリオが言い、狭い階段を通って綺麗に塗られた扉を開く。すると、そこは宮殿の表側からも通じているであろう、こぢんまりとした部屋だった。

「ここ、いい感じの部屋ですね。俺、家族と一緒に住んでたの、これくらいの部屋でした。今でもこういうとこなら、ぎりぎり住めるかなあ。広くて綺麗すぎると、落ち着かなくって」

寝台と最低限の調度のみが置かれた適度な広さの部屋に、アルはなんとなく親しみを覚えて安堵のため息を吐く。が、シャリオの返事は容赦がなかった。

「そうか。ちなみに、ここは夜会の途中で退席した男女が個人的な営みをする部屋で――」

「あー、ほんとだあ、窓の外、川ですねえ！」

これ以上言わせてたまるか、とアルは真っ赤になって窓にかけられた垂れ布を引き開けた。

夜会がない今夜は、王宮も外もしん、としたものだ。

高い鉄柵で囲われた裏庭の向こうには、王都を代表する川が暗い水を湛えて沈黙している。

周囲の様子を眺めているとすぐに恥ずかしさなどふっとんで、もやもやと不安が湧いてきた。
「……やっぱり、あの川、危ない気がする。結婚式のときって、このへんの警備はどうなってます？　警備してるはずの宮廷警察にも、全然会いませんでしたよね」
アルが言うと、シャリオも彼の隣にやってきた。
シャリオは冷たい横顔をさらして、川面を見下ろしながら言う。
「さっき言ったとおりだ。この裏の宮廷については、多くの人間に知られないことこそが最大の警備だ。我々貴族は断片的に裏の知識を持っているが、全貌を知るのは王族の方々のみ」
「うーん……危なっかしく思えますけど、それはそれでいいのかな。こっちを使えば宮廷警察は出し抜いて警備ができるかもしれませんね。とにかく人数がいないのが辛いけど……」
考えこんでいたアルの視線が、川面のあるところでぴたりと止まる。
「隊長。あれ、変じゃないですか」
「――あの小舟か」
シャリオも気づいてはいたのだろう。すぐに低い声が返ってくる。
眼下の川に浮かぶ一隻の小舟。アルはそれを夜目のきく目で注意深く観察し、鋭く言う。
「形はよくある荷運び用の船ですけど、この時間に一隻ぽーんとあるのは変だ。喫水も浅い。空船ですよ、あれ。目立たないようにかな、黒い布がかけてある」
「ふーん、お前ってほんとに目、いいな。閣下、どうします」
フラムが薄闇の中で赤茶の瞳を光らせ、シャリオに視線を流した。

「忍びこむにも、何か輸送するにも、川は大事――そう言ったな」
シャリオは窓の外から視線を外さず、アルに訊く。
アルはうなずきかけたが、不意に決定的なものを見つけて目を瞠った。
「隊長！　あれ……！」
シャリオは答えず、視線だけをアルが指さしたほうへ向ける。
細長い裏庭が延びていく先、高い柵で区切られた向こうは宮殿正面の広大な庭園だ。
その、正面の庭園へ続く柵を乗り越えようとする不審な人影が、確かに見えた。
「ひとり、ふたり……あら、十人くらい居るじゃねーの。そのうえ妙に手慣れた奴らだな」
フラムの声は、こんなときでもどこかのんびりとしている。
アルはそこまで落ち着いていられず、懸命にシャリオの顔を見上げた。
「とにかく、誰かに知らせないとですよね？　どうなんでしょう、あてにならないって言っても、やっぱりあの人数だし、宮廷警察に知らせたほうがいいんじゃないでしょうか」
シャリオはすぐには答えず、不意に身を翻した。
そのままっすぐに小部屋の扉へ向かいながら、彼はアルに声をかける。
「クレール、来い」
「はい！」
返事をしたときには、シャリオはおそろしく俊敏な所作で背の低い扉をくぐって走り出していた。フラムもまた、気楽な歩調でしっかり彼についていく。

（っ、うわ、いきなり、足速い！）

アルもついていこうとして、思わずぎょっとした。本当に予想外の速度だったのだ。まるで平地みたいに宮殿の裏を駆け抜けて行くシャリオたちに対して、王宮に不慣れなアルは相手を見失わずについていくのがやっとといったところ。

目の前に次々現れる扉に、階段。埃っぽいところと目の醒めるようなきらびやかなところが交互に視界を流れていき、段々現実感さえ危うくなってくる。

ここは一体どこなのか、本当に王宮なのか、それとも変な異世界にまぎれこんでしまったのか——そんなことを考えだしたころに、アルはやっとシャリオに追いついた。

ほっと息を吐いてみると、鉄さびと水の匂いが肺に入りこんでくる。

「ここ……ここも、宮殿ですか？」

少々息を切らせながらのアルの声が、ぎりぎりという無数の機械音と入り混じる。

「正確に言えば、宮殿正面の庭園地下だ。入れ」

シャリオは懐から取り出した鍵で、目の前の小さな鉄の扉を開けた。

途端にさっきから聞こえていた機械音が、耳に痛いくらい大きくなる。アルは片耳を押さえてシャリオの脇から扉の向こうに顔をつっこんだ。すると、その顔に水滴が飛んでくる。

目を細めて見たところ、そこは暗い隧道のような場所だった。

闇の中、フラムの手にした角灯でうすぼんやり照らされた巨大な歯車が、いくつもいくつも複雑にかみ合い、ぐるぐると回り続けているのが見える。

「ここから先は、庭園にある仕掛け噴水の機構を整備するための通路になっている。お前は、ここをまっすぐ抜けていけ。途中の鍵は全部これで開く。突き当たりのはしごを登ると、ちょうどサントール砦の中……わたしの執務室に出る」

こんなときでも淡々と言い、シャリオは手の中の鍵をアルに押しつける。古い鍵が妙に重く感じられて、アルは胸の不安がむくむくとふくれあがるのを感じた。

「待ってください、隊長！　砦に行っても、なんにもなりません。まずは通報でしょう」

真剣な瞳で見つめて言うと、シャリオの冷たい声が返ってくる。

「わからん奴だ。逃げろ、と言っている。今の貴様では役に立たん。行け、クレール」

低く囁き、シャリオは踵を返して走り出した。

フラムもまったく迷いなく後に続く。彼らが向かうのは、アルに示したのとは逆方向だ。

「っ、そんな、隊長！　隊長はどうするんですか!?」

必死に叫んでみるものの、もうシャリオの返事はない。

代わりに乾いた足音が響き、あっという間に遠くなっていく。このままでは、すぐに後を追えなくなるだろう。そう思うと焦りで思考が圧迫される。

頭の中で、ふたつの声がする。

軍人なら命令に従え、という声と、危険なときには絶対に仲間を放っておくな、という声。

どっちだ。どっちを選べばいい？　シャリオは何を考えている？

――今の貴様では役に立たん。

不意にシャリオの言葉が頭の中で大きく響き、アルは整った顔をゆがめた。
「……っ、くそ！」
思い切り舌打ちをし、ぶつかるように鉄の扉を開ける。
薄暗い王宮の裏に戻ると、シャリオの足音が木霊のようにかすかに鼓膜を揺らした。
あとちょっとで消えてしまうであろうそれを追って、アルはとにかく走り出す。
ばかなことをしているのはわかっている。でも、どうしても、役立たずでいるのは嫌だった。
自分はもう子供じゃない。逃げろ、と言われて誰かを見捨てなきゃいけない子供じゃない。
（追いついてやる。役に立ってみせる。もう、誰にもばかになんかさせない！）
負けん気と、心臓を圧迫する切迫感みたいな気持ちに押されたままの追跡は、実際にはどれだけ続いたのだろう。ずいぶん長く感じられたが、そのぶん終わるときは唐突だった。
最後の小さな隠し扉を内側から押し開けた瞬間、蒼白い月光がアルの瞳を打つ。
豪奢なしつらえの六角形の部屋。壁のほとんどが巨大な硝子でできていて、その向こうには立派な幾何学庭園が見える。日光浴用の部屋だ。
（隊長とフラムは？……外か……？）
素早く室内を見渡すと、窓の向こうにちらりと銀の光が躍った。
すかさず窓の脇へまとめられた垂れ布の陰に隠れ、アルは庭の様子をうかがう。
毎日庭師を入れて整えている庭園は、大体アルの胸くらいの高さで切りそろえられた灌木で巨大な迷路を形作っている。

その灌木の端で、何かが光った気がする。でも、それが何かがわからない。
わずかに迷った後、アルは素早く身を翻した。
（多分、このへんから出ると、さっきの部屋の真上あたり……当たった！）
入り組んだ下町で育てた方向感覚をめいっぱい活用して、アルは裏の宮廷の狭い螺旋階段を抜け、二階の小部屋に出た。そのままこっそり窓の横に貼りつき、外をうかがう。
そこから見える月下の幾何学庭園は、一見いつもどおり平和に見えた。
だが、目を凝らすと——迷路の一角に、フラムが身を隠しているのがわかる。シャリオの姿は、ぱっと見つけることはできない。
（何する気だ？　まさか……）
一番悪い予想が当たってしまったような気がして、腹の辺りがすうっと冷える。
ほとんど同時に、びりっと首筋が痺れるような感覚があった。
続いて、闇からにじみだすように、迷路のあちこちに黒衣の影が出現する。
——賊だ。
アルは改めて唾を呑みこみ、身体を緊張させる。敵はざっと十人ほどだろうか。迷路の中を、離れすぎず、くっつきすぎず、するすると音もなく走って行く。
なんだかやけに玄人くさいというか、見慣れた感じの動きだ。
そう思った途端、心臓がぐぐっと重くなって、アルは思わず顔をしかめた。
（なんだ、これ？　気持ち悪い）

謎の不調を抑えこもうと強く、強く爪が食いこむほどに拳を握り、アルは夜の庭園に目をこらした。そのとき、不意に庭園の一角で銀色の光が走る。

「……え？」

何があったのか、自分で見たものが信じられずに目を瞠っていると、黒服がひとり声もなく倒れて、ずるりと灌木の下に引きずりこまれる。

他の黒服はまだ気づいていない様子だったが、アルは気づいた。

さっきひらめいたのは、月光を跳ね返したサーベルの光だ。

（フラム少佐だ。迷路に潜んで、ひとりずつ片づける気なんだ）

――まさかとは思ったが、やっぱりシャリオとフラムは自分たちだけで敵を倒す気だ。

信じられない思いで頭が一瞬くらっとする。

いくら地の利があろうとも、ふたりの腕がとんでもなかろうとも、二対十なんてふざけすぎだ。アルだって卒業試験ではそれ以上のことをやってのけたが、あのときは模擬刀と塩の弾が武器だった。実戦では、一回撃たれたら死ぬかもしれない。

（せめて俺が、加勢しないと。隊長は、どこだ？）

目を凝らした直後、鋭い叫びが耳を打った。

ぎょっとしてのぞきこむと、フラムがもうひとり、黒服を倒したところだ。

しかし今度は『音もなく』とはいかなかったらしい。

もう猶予はないと見て、アルは少々乱暴に窓の鍵を外し、勢いよくテラスに飛び出した。

「賊ども、そこで何をやっている！　覚悟しろ!!」

冷えた夜の大気を吸いこみ、思い切って派手に叫ぶ。

そのまま石の手すりに手をかけ、空中へ体を振り出した。ここは二階だ。地上の芝生までは少々距離があったが、このくらいの高さなら慣れている。

着地すると同時に転がって受け身を取り、あとは一目散に、整った砂利を蹴って迷宮庭園へ向かった。視界の悪い庭園のあちこちから、敵意のこもった視線がこちらを向く。

首の後ろはさっきからぴりぴりしっぱなしだ。

あと数歩で迷宮庭園に飛びこむ、というところで、生け垣の向こうから勢いよく黒服が姿を見せた。屈強な身体で、相手は俊敏に短剣を抜こうとする。

アルはとっさに加速し、力一杯彼に体当たりした。

「ぐっ……！」

まさか突っこんでくるとは思わなかったのだろう、敵は短い叫びと共に倒れこむ。

アルは彼の上に素早く飛び乗り、短剣を持った腕をひねり上げた。

敵の短剣が砂利の上に落ちるのを確認して、アルは叫ぶ。

「もうすぐ宮廷警察が駆けつける！　お前らに勝ち目はない!!　諦めておとなしくしろ！」

なんの根拠もない言葉だったが、牽制くらいにはなるはずだ。

――しかし。

（何……!?　これ、全然効いてない？）

周囲の殺気がまったく緩まなかったことに気づき、アルは軽く目を見開いた。
首筋のびりっとする感じがことさら酷くなる。
視界の端で、ちらと不吉な光がきらめく。あれは、銃口だ。
アルは直感し、とっさに腰の銃を抜いた。火打ち石式の銃に、弾は一発。
個人的な理由でできるだけ銃は使いたくない。しかしこうも敵が多くては、牽制が必要だ。
当たっても当たらなくてもいい、それくらいの気持ちで、アルは本能が知らせる方向、強い殺気が向かってくる方向へ向かって銃を構える。
そして、容赦なく引き金を絞った。
――が、辺りには殺気に満ちた静寂が満ちたまま。しん、と静まりかえっている。
（えっ、嘘。不発!?　こんなときに?）
嫌な汗がどっと噴き出す。
確認しようと自分の手を見やると、そこにはすっかり白くなって震えている手があった。
……引き金を絞ったつもりが、少しも絞れていない。完璧に固まっている。
（なんだ、ぶっ壊れてんのは、俺の銃じゃなくて――俺か）
愕然として目を瞠ると、不意に視界が灰色になった。
目の前がざらっとした質感になり、ひどい目眩を感じる。まるで頭をつかんで振り回されているみたいだ。吐き気がする。苦しい。まずい。この感じは、まずい。
過去に何度かなった覚えがある、この感じ。

遠い過去、思い出したくない思い出。頭の隅にしまいこんで蓋をしていたそれが、ゆっくりと鎌首をもたげてうっすら笑う。かってないほど濃厚に、過去が鼻先で匂い立つ。

耳の奥で響く、このうえなく下劣な笑い声。

『なんだよ、ガキ。お前、それで戦う気なのか？　いいぜ……撃ってみろよ』

これは今聞こえている声ではない。昔聞いた声だ。思い出しているだけだ。

わかっているのに引きずられる。血の匂いがする。そして、泣き声が聞こえる。

幼い自分の、泣きわめく声が。

「ち……く、しょ……っ!!」

悔しさと苦しさのあまり歯を食いしばり、アルは低くうめいた。

そのとき、乾いた銃声が数発、辺りに鳴り響く。

「っ！」

激しい音に頭をはたかれたような気分になって、アルは目を見開いた。

灰色になっていた世界に、ぱっと色がつく。呼吸が少しだけ楽になる。

これなら動ける。動け。考えろ。観察しろ。今撃ったのは誰だ？　撃たれたのは？

汗のにじむ顔を上げると、視線の先で、アルに向かって銃を構えていた男がゆっくりと横に倒れこむところだった。彼の足から勢いよく血が噴き出したのが見える。

血が芝生を濡らしている。まるで黒い噴水みたいだ。

旅芸人が来ていたあの日も、町中でこんなふうに血が流れていた——目眩の中でそんなこと

を考えていたアルの襟首が、いきなり後ろからつかまれる。
「なっ、何して……！」
「死にたくなければ、黙れ」
シャリオの低い囁き。彼の声を訊くと、冷水を浴びたみたいに視界がはっきりする。それをありがたいと思う前に、アルは強い力で芝生の上へ引き倒された。
シャリオは引き倒したアルの前に、少しも身を隠すことなしにたたずむ。
冷たい月光が、華美な銃を手にしたシャリオを白々と照らし出した。
敵は、凍りついたように動かない。
迷路のあちこちで固まっている彼らは、いつの間にかあと五人に減っていた。
（他は――隊長が倒したのか？　一回の銃撃で？）
そうとしか思えない。でも、だとしたら異常な腕じゃないだろうか。
そもそも、どうしてあんなに連発できたんだろう。銃は、一発撃ったら次を撃つにはかなりの時間がかかるはず。そこもアルが銃が苦手な理由のひとつだ。
「貴様……っ！　さっき、何を……？　な、なんだ？　どうなってる」
驚いたのは敵も同じなのだろう。ひとりが叫んでシャリオに銃を向けるが、なぜか何度か引き金を引こうとしては顔をゆがめている。
そこへ、氷よりも冷たい声でシャリオが告げる。
「銃の部品を撃った。その銃はもう使い物にはならん」

彼の言葉を理解した瞬間、場の空気ががらりと変わった。
——勝てない。勝てるわけがない。
そんな声が聞こえてくるかのようだ。
シャリオが言ったことが本当なら、あまりにも技量が違う。
人数では圧倒的に有利なはずの黒服たちが、残らず戦意を失って一歩後ろへ下がる。
その隙に、砂利を踏むかすかな音を立てて、灌木の間からフラムが姿を現した。シャリオの脇に添った彼の華美な軍服はすっかり返り血で汚れ、瞳はいつもとは打って変わって冷淡だ。
シャリオはフラムを一瞥もせず、優美なほどの所作で銃を構えて囁いた。
「帰って主人に言え。庭園には番犬が放されていて、自分たちでは無理でした——と」
そうでなければ、殺す。
そんな声が聞こえた気がして、アルは我知らず小さく震えた。
敵も同じ気持ちだったのだろう、じりじりと下がって負傷者を担ぎ上げたかと思うと、元来たほうへと一目散に逃げ始めた。置き去りになったのは、完全に気絶したひとりと、歩けないひとりだけだ。
シャリオは逃げていく賊どもを見据えつつも、結局引き金を絞ることはしなかった。
敵が庭園の柵を越えて姿を消すまで待って、静かに銃を下ろす。
「あっ、あんた……俺のこと、殺さないよな？　こそ泥なんだ、頼まれただけなんだよ……」
置き去りになってしまった負傷者はうろたえてシャリオの足にすがったが、すぐに、ひっ、



と息を呑んで固まった。
シャリオの整った顔は、壮絶な殺気に満ちたままだったのだ。
琥珀の瞳が冷たく輝き、どこか遠く――目の前の負傷者ではなく、そのさらに向こうをねめつけている。何かを憎んでいるというには清冽すぎる。
ただひたすらに、戦う意思を宿して燃え上がる瞳。
傍らで見ていたアルでさえも気圧される。息が詰まる。苦しい。
それと同時に、ふっと妙な感覚がアルを襲う。
（あれ、俺、昔こういう目をしたひと、見たことあった……？）
記憶もおぼろげなほど昔、同じような思いをしたことがある気がした。
一体どこでだろう、と考え始めたとき、フラムがひょい、とシャリオの肩に手をかける。
「あとは俺がやりましょう」
穏やかな、なだめるような声音に、シャリオはじろりとフラムをにらんだ。
素っ気なく彼の手をはたき落とし、シャリオはアルを見下ろす。
「無事か」
ひどく淡々とした声に、アルは芝生の上に座りこんだまま、とにかくうなずいた。
「はい。……ありがとう、ございい……!?」
礼を言いかけた途端に、襟をつかんで引きずり立たされる。
よろめきながらもどうにか立った直後、顔を思い切り殴り飛ばされた。

あまりの衝撃に目の前で火花が散り、ふたたび芝生にへたりこむはめになる。いきなりのことにわけがわからず、アルはひどい目眩に耐えて手のひらで片眼を覆った。
「っ、あ……」
「なぜ、わたしの命令に従わなかった」
今まで聞いたこともないような冷酷な声が降ってきて、思わず言葉を呑む。
見上げると、さっきより明確な怒りを宿してじりじりと燃える瞳と視線があった。
――怖い。
「申し訳ありません。でも……隊長があんな人数の敵に突っこんでいこうとしたから、俺は」
「話にならん」
さもつまらなさそうに吐き捨て、シャリオは身を翻した。
その背中が冷たい。絶対的な拒絶を宿しているように見える。
見捨てられた、なんて言葉が浮かんできそうになって、体中から力が抜けそうになった。
苦しい。悲しい。そんな思いがちょっと理不尽なくらい膨らんでくる。
（くそ、ばかばかしい！　叱られるようなことしたのは俺だし、無茶したのは隊長たちだし、みんな生きてたんだし……いいじゃないか。後悔することなんか、ないはずだ）
どうにか自分に言い聞かせ、アルはどうにか立ち上がった。
それでも勝手に視線はシャリオを追ってしまう。彼は負傷した捕虜のひとりを捕虜自身の靴紐で縛り上げて放置し、もうひとりをフラムが荷物みたいに肩に担いで歩き出していた。

まっすぐに向かう先は、おそらくはサントール砦なのだろう。
（この、さも当然、って感じで放置されてるひとりは……俺が運んでけ、ってことなのか？）
別に命令されていないのだから、運んでいく必要はないような気もしたが、放置するのもあんまりだ。アルはしばらく顔をしかめて考えた後、縛り上げられた捕虜を引きずってシャリオの後に続いた。
汗だくになってサントール砦の前あたりまで来ると、石垣の向こうから不意に声がかかる。
「ご無事だったようですね」
「レアか」
シャリオの呼びかけに反応して、すっとレアが姿を現す。
「はい。……銃声に気がついたので、ここで様子をみていました。ぎりぎりまで待ったのですが、ご無事で何よりです」
「ああ。君もな」
珍しく気遣いじみた台詞を吐くシャリオに、アルは違和感を覚えてその後頭部を見つめる。すると、気づいたのだろうか。
レアがひょこりとシャリオの陰から顔を出し、目を細めて柔らかに微笑んだ。
「新入りさんも、大丈夫そうだね。よかった。隊長、強いだろう？」
「えっ？　あ、ま、まあ……はい。ものすごく……」
今夜のレアの顔には妙な色気みたいなものが漂っているように思え、アルは慌てて目をそら

した。

（ばか、こんなときに何、どきっ、とかしてんだ、俺！　そもそも相手は男だぞ）

今までさんざん可愛い可愛い言われてきて、そのたびにぞっとしてきたのに。一体どうしてしまったというのだろう？　自分があんな奴らの同類になるなんて、とんでもない。

そんな余計なことが頭をよぎったところで、サントール砦の扉が開いた。

「ご無事でしたか、隊長！」

「霊のうるさい夜だったね……」

「心配したよ～、三人とも！　やっぱり、結婚式に反対してる過激なひとたち？」

いつもの調子で声をかけつつ出てきたのは、エトワール隊の隊員たちだ。

誰もがきちんと軍服を身に着けているのを見て、アルは少々面食らう。

ひょっとしてまだおもてなし業務の時間だったのかな、と思うが、今日のサントール砦は静かなものだ。それだけではなく、隊員たちはあっという間にシャリオとフラムを取り囲むと、手慣れた様子で捕虜を受け取る。

いつもは見せない真面目な顔で、クロエがシャリオに問いを投げた。

「捕虜を連れて帰られたということは、当然、尋問はなさるのでしょうね？」

「ああ。この時期だ、結婚式がらみの敵かもしれん。宮廷警察が勘づく前に、どの勢力の人間か調べたい。貴様と、ラウル。ふたりで可能な限り情報を吐かせろ。妙に訓練されていたからな、相手は軍人だと思ってやれ。期限は朝まで。殺すなよ」

「了解（りょうかい）、隊長」

やたらと物騒（ぶっそう）な会話をしながら隊員たちはシャリオと共に砦の中に消えてしまう。

アルはというと、気絶した捕虜と一緒（いっしょ）にぽつんとひとり、残された。

「さらっと尋問とかなんとか、出てくるんだ。……っていうか、みんな起きてるんだったら、こっちの捕虜も運ぶの手伝ってくれたりとか……」

ついついつぶやいてみるものの、砦は沈黙（ちんもく）したままである。

そのころ、シャリオとフラムは砦の執務室で、抑えた声を交わしている。

「いやあ、久しぶりに見たなー、閣下の銃の腕！　うっかりぞくぞくしちまいましたが、お疲れじゃないですか？　今日はもう休まれたほうがいいですよ」

「これくらいでへばるものか。貴様こそ、とっとと身体でも洗ってこい。まるで獣だ」

「はいはい、血の匂いをぷんぷんさせてちゃあ、エトワール隊っぽくないですもんねえ。でも……その前に、ひとつ。――どうですか、クレールは。あれ、わざわざこの時期に隊に入れるような人材でした？」

「わたしの決定に不満があるのか？」

「いーえ、ありません。あいつはあいつで、成績もいいわけですし。ただ、庶民生まれはソール派が多いしね。正直言えば、銃を構えたときの固まりっぷりも気になるな。自分を守れない奴は、他にも迷惑かけるから。俺はあいつじゃなくて、あなたが心配なんです」

「貴様の心配性は犬にでも食わせてしまえ。いくら殿下とはいえ、クレールをただの庶民の子

供と思っているかぎり手は出さない。――クレールのことはわたしがどうにかする。それよりも、今日の侵入者の正体を突き止めるのが先だ」

「まあ、そうですね。この時期だから、結婚式の延期を望んで騒ぎを起こしてるか、『あれ』を盗るのが目的じゃないですか？　ただの賊が、半月後の式の目的がただの結婚じゃないってことを知ってるわけはないし、やっぱり俺たちの敵は――」

「黙れ、フラム。ここも、必ずしも安全ではない」

「……はい」

後に残るのは、緊張をはらんだ沈黙。シャリオが首から提げた星石のお守りを握りしめる、かすかな音がした。

LA GARDE ETOILE ROYALE

3 友達と行く暗い夜

星の向こうの楽園にいる、父さん、母さん。

そんなこんなで、俺の着任したエトワール隊は一見お飾り部隊なんですが、内情は結構特殊な技能持ちの集団のようです。ところが、そんな彼らの腕を持ってしても、昨晩の賊どもからは有効な情報は引き出せなかったとか。

『わたしの尋問で攻略できないとは、明らかに特殊な訓練を受けているに違いない！　なのに奴らは、自分たちはこそ泥だと主張し続けた。これはすなわち！　すさまじい理想や意思の力を持っているか、脅されているかのどちらかだ！』

『脅しは僕の担当だけれど……足りなかった、かな。結婚式に反対してるんなら、リシェスとどうしても戦争したい過激派の一味だとは思うんだけど。もうちょっと、頑張る』

派手に憤慨していたのは、元詩人でエトワール隊員のクロエ。

陰鬱に脅しについて語っていたのはラウル。

このふたりが説得、尋問担当なら、他のひとたちの特殊技能はなんなんでしょうか。

『どうしても戦争したい』ひとたちを過激派と呼ぶエトワール隊員は、おそらく平和を愛する

ひとたちなんでしょうが、その割りにはどうしてこうも物騒なんでしょうか。
わからないことは山ほどありますが、とにかく世の中のひとは見かけによらないなあ、ちゃらちゃらしているように見えても侮っちゃ駄目だなあ――俺はそんなふうに考えていました。
ついさっきまでは。
「何をぶつぶつ言ってるんだ？　お腹が空いたなら干した果物入りの菓子を焼いたぞ、アル」
「――うっかり楽園にいる両親に、人生相談をしかけてました」
虚ろな独白をレアの穏やかな声にさえぎられ、アルはしぶしぶ我に返って言う。
そして、あらためて目の前の現実を見つめた。
サロンのごときサントール砦一階。華麗な軍服に身を包んで居並んだエトワール隊員たちと、その周囲を取り囲む貴婦人たち。
みっしりと部屋を埋めた彼女たちは残らず目をきらきらさせており、レアは少し苦笑した。
「色々悩みのある年頃だものな。なんならわたしが聞いてもいいが――」
「悩みは今、ここにあります！　この服！　おもてなし任務はともかく、どうして俺だけこんな格好なんですか！」
力一杯叫んで胸を叩く彼は、本日はどこからどう見ても完璧な美少女と化していた。
品よくふくらんだ、十代の少女が着るドレスに、金の巻き毛を垂らした鬘。顔は化粧のひとつもしていないのに、違和感があるどころかそんじょそこらの女では勝てない美しさだ。
きゃーっと耳をつんざくご婦人がたの歓声を押しのけるようにして、アルは懸命に主張する。

「確かに着替えが欲しいとは言いましたけど、あれは軍服の替えが欲しいって意味ですよ！　それがまさかこうなるだなんて、誰が思うんですか！」

「そういうものか？　これもおもてなし業務の際に着る服としては悪くないと思ったのだが。そもそも君、これに着替えて、って渡したらそっぽを向いて普通に受け取ったじゃないか。それで着替え終わる前にはしたない格好でここへ出てきたから、私が手伝って着せつけてあげたんだ。てっきり合意だと思ったよ」

不思議そうにふんわり笑われると、アルはまたもぐっとつまってしまう。

（それは――服を渡してくるときのあなたが、妙にいい匂いでくらくらっときちゃったから、で……って、俺、本当にどうしちゃったんだ！　相手は、男だってば！）

昨日シャリオと一緒にいるところを見て以来、アルはどうもレアを意識してぎくしゃくしてしまう。そんなことはアルにとってもまったく不本意で、彼は真っ赤になって顔を背けた。

「いくら中尉のご厚意でも、俺は見た目はどうあれ男です！　男の中の男を目指してるんです。大体、今はこんなおもてなし業務とかいってちゃらついてる場合じゃないでしょう？　昨日の賊のことだって、まだ――」

そこまで言ったところで、ぴたり、と口元にレアの手が重なった。

手袋をしているのに例のいい匂いがふわっと香り、アルは頭の芯がふにゃりと溶けるような、なんとも言えない気持ちになってしまった。

（駄目だって！　ほんと、駄目だって、俺！）

無意味にじたばたしたくなっているアルの耳元に、レアがそっと話しかけてくる。
「落ち着け、アル。余計なことは喋らないこと。それに、その格好で男の中の男なんて言っても、逆にはしたなく見えるぞ。いっそ私が男になれるおまじないでも教えてやろうか。紙に百回『男が大好き』と書いてだな、牛酪たっぷりの赤葡萄酒のソースで食べると……」
「そのまじないは趣旨が違いませんか!?　明らかに腹壊すし、むしろ呪いじゃないですか！」
アルがレアの手の下でもごもごと叫ぶと、レアは珍しくむっとした顔になる。
彼はアルの口から手をのけると、胸ポケットから怪しい文字の対照表を出してアルの眼前につきつけた。
「呪いじゃない。私の占いは古王国アルタリアから伝わった、由緒あるものだ。得意なのは虫下しとか、腹痛の解消とか、催吐とか、他にも色々ある」
「わ、わかった、わかりました。基本的に腹をこわす系だってのはわかりました！」
アルは突き出された対照表を奪ってくるくる丸めつつ、素早くレアから距離を取る。
レアは少しきょとんとしていたが、周りからはご婦人がたの落胆の声が上がった。
「もったいないわ、倒錯していて素敵な世界でしたのに……」
「いやいや、倒錯って、そんなの期待されても！　皆さんも、もうちょっと有意義な午後の過ごし方を考えましょう。おかしいでしょ、こんなところできゃっきゃうふふって」
俺たちにはこんなおもてなし以外にも立派な任務があるんだ——とは言えないので、アルはため息まじりに肩を落とす。すると、色とりどりに着飾った貴婦人たちは互いに顔を見合わせ、

扇子の陰でくすくす笑った。しばらく視線を交わした後に、真っ黒なドレスの未亡人がぐっと身体を乗り出してくる。

「おかしくなんかありませんわ。あなたはあまり宮廷事情におくわしくないようですから教えて差し上げます、夜会が始まるまでの時間や、お仕事の合間。第一王子のサロンに夫がかかりきりになっている間。退屈な夜会から抜け出したとき。そんなときに私たちの行き場所がここだとわかっていれば、夫たちもたいそう安心するのでしてよ」

「ベルクレール伯爵夫人、でしたっけ？　安心って、こんないかがわしいところなのに？」

アルがクロエから教わった常連の名前をどうにか思い出して言うと、ベルクレール伯爵夫人はにっこり笑って長いつけまつげをした片眼を閉じる。

「意中の殿方とふたりきりで、どこかの部屋に潜むよりはよっぽど健全よ」

「っく！」

裏の宮殿で見た小部屋が脳裏をよぎり、アルは思わず何度かむせた。その姿を見て、貴婦人たちは「初々しいわ！」「妹にしたいわ！」と頬を紅潮させて盛り上がる。

（わからない……！　貴婦人って生き物が、わからない！）

アルはすっかり混乱して、髪をかぶった頭を抱える。そういう男女の色々は遊びみたいにするものじゃなくて、もっと、こう、心の奥底から零れてくる気持ちが大事だと思うのだ。

ベルクレール伯爵夫人はしばらくそんな彼を見つめていたが、すぐに慈悲深いような微笑みを浮かべて歩み寄ってきた。

「シャリオはあなたに、あまりくわしいことを教えてくださらないようね。あの方は素敵な方よ。容姿端麗、文武に優れた、リシリュー辺境伯の息子さん」

たおやかな手をアルの肩に載せ、ベルクレール伯爵夫人は扇の陰からそっと囁く。

告げられた貴族の名を聞いて、アルはふと我に返って聞き返した。

「リシリュー辺境伯、ですか？」

「そう。北部辺境ではかなり広い領地を持っているお家よ。王族の血も、古いところまでたどれば入っているはず」

「北部辺境……そうなんですね」

返事は適当に濁して、アルは内心首をひねる。

貴族の知識はとことん乏しいアルだが、もっとも有名な五家くらいの家名なら知っている。てっきり、シャリオはそのどれかの出身だと思っていたのだ。

（でも、辺境伯とかだったら、そこまでの有名どころじゃないな。意外だ）

だったらシャリオは、ソール王子なんかとはあまり面識はないんだろうか。

シャリオとフラムが見せたソール王子への微妙な態度は、彼らがやたらと平和主義者で、ソールの勇ましさ――いざとなったら戦争も辞さないみたいなところが、嫌いなだけなのか？

考えこむアルに、ベルクレール伯爵夫人はどことなく身体をすりつけるようにして続ける。

「シャリオは氷の貴公子よ。あの手に抱かれることができるのなら、死んでもいいというご婦人は山ほどいます。でも、あの方は誰にもなびかない。ここでつん、と澄ましておられるだけ。

彼は幻の氷の薔薇。だからみんな安心なのよ。ここより健全な遊び場はないわ」

「男性を薔薇と言うのもすごいと思うんですが……その、俺はどうして壁に追い詰められてるんでしょうか……？」

「なんでしょう？　可愛いからかしらね」

じりじり逃げるアルを容赦なく壁際に追い詰めて、ベルクレール伯爵夫人はにっこり笑う。

……顔が近い。むせかえるような香水の香りに咳きこみたくなったが、こんな近くで咳きこむのも無礼な気がして、アルは必死に耐えた。

首筋がちょっとびりびりしているのは、相手の目が獲物を狙う目だから、かもしれない。

「――伯爵夫人。アルは新人です。あなたを愛するクロエが嘆いているし、彼ではからかいがいがないとおっしゃるのなら、この私でどうでしょう？」

途方に暮れていたところに、レアの少し困ったような澄んだ声がかかる。

ベルクレール伯爵夫人はアルの前に陣取ったまま、肩越しにレアを振り返って微笑んだ。

「あら、レア。いつも向かい合って占いをしてくれるだけで、私の隣には座ってくださらなかったのに。彼のためになら、って騎士道精神かしら？」

「確かに少し兄のような気持ちですね。どうか、私の気持ちを踏みつけにしないでください」

レアは囁き、折り目正しい所作で伯爵夫人の前にひざまずく。

すると夫人は当然のように、彼に白い手をさしのべた。レアはほんの少しためらった後、手袋をした自分の手で夫人の手をすくい、軽く唇を触れさせる。

ベルクレール伯爵夫人はそれを少し目を細めて見ていたが、不意に指をレアの顎にすべらせてあおむかせた。予想外だったのか、レアは、はっとしたようにわずかに身を引く。
「あらあら、警戒しちゃって。別に取って食いやしないわ。可愛い子」
伯爵夫人はさも楽しげにくすくす笑うが、アルは一連の流れになんだか複雑な気分になってしまった。貴婦人の手に口づけるのは、宮廷作法としては当然のことだ。
なのに、ちょっとレアの反応は失礼にも思える。
（レアって実は女嫌いとかなのかな。だとしたら、誰が好きなんだろう）
なぜか勝手にそっちに思考が傾き、シャリオの冷たい横顔とか、さっき自分の口を覆って顔を近づけてきたレアの顔だとかが、ぽぽぽん、と頭に浮かんでくる。
シャリオとフラムだと普通に主従か、遠い親戚同士にしか見えないのに、シャリオとレアだと、なんとなく、変な雰囲気のような……いやいや、待て待て待て。
「別に、変な意味で『隊長のことが好き』とか、そういうのと違うだろ……！」
うっかり考えを口に出してアルが頭を抱えると、辺りがしん、と静まりかえった。
次の瞬間、すさまじい黄色い声で砦が揺れる。
「なっ、何これ……！　えっ、あ、何か誤解されてます!?」
「アル……君ってひとは……狙ってやっているのか？」
レアがため息まじりに顔を覆い、焦ったアルが反論しようとしたとき、派手な音を立てて砦の扉が蹴り開けられる。

「薔薇園の薔薇の方々！　ちょっとお静かにしていただいてよろしいですかね」

のっそりと入ってきたフラムが声を張り上げ、悪戯っぽく片眼をつむる。その表情にはいつになく緊張感みたいなものが漂っていて、ご婦人方はすぐにすうっと静かになった。

続いて入ってきたシャリオが、丁寧に一礼して言う。

「今日もご機嫌麗しゅう、奥様方。もう少し皆様と時間を過ごしたいのは山々なのですが、警備のため、本日の我々のおもてなしはここまでとさせていただかなくてはなりません」

「――警備のため？」

一体どういうことなのか。とにかくアルが緊張して身構えていると、ベルクレール伯爵夫人がやっとアルを解放して、シャリオのほうへ歩み寄りながら訊ねる。

「ひょっとして、誰かいらっしゃいますの？　まさか、お忍びの国王陛下とかかしら？」

「いえ、高貴な方ではありますが、忍んではいらっしゃいません。これからいらっしゃるのは、第二王子、ソール殿下です」

意外すぎる名に、辺りはますます静まりかえり、アルは思わず緊張で背筋を伸ばした。

国王が留守のこの王宮で、ある意味一番の権力者。アルの、庶民の憧れのひと。

そして、最近何かと名前が出る人物。ソール王子が、どうしてここへ？

「突然訪れてすみませんでした。驚いたでしょ？」

サントール砦の執務室で、特別あつらえの真っ黒な軍服に身を包んだ男が笑う。

彼の笑いはいかにもやんわりとした、ひとの良さそうなものだ。緊張感も威厳もない。いつも軍服を着ている割りに体つきもほっそりとしていて、顔もしなやかな指も白く、圧迫感を感じさせないところはシャリオやフラムとは正反対だった。

軍人というよりは、気のいい学者か何かに見える二十代後半の男。

フィニステリア王国第二王子、ソール。

シャリオとフラムは、執務室の机に腰掛けた彼に相対していた。

背を正して立ったまま、シャリオはあくまで恭しく告げる。

「軍人たるもの、常に備えあって当然です。殿下自らの視察、たいへん光栄に思っております」

「視察。そうですね、視察ならよかったんですが、今回は違うんです。俺はあなたと、あなたの部下に文句をつけにきました」

部下、と言いながら、ソールはにぎりに貴石がついた指揮杖を扉のほうに向ける。

これはもちろん、アルのことを言っているのだろう。

だが、シャリオとしてはそんなことを認めるわけにはいかない。なぜならシャリオはソールの力を知っているからだ。彼は王の居ない王宮の支配者。

その気になれば、彼の小指ひとつでアルなど抹殺されてしまう。

シャリオは相手の所作のひとつ、表情の変化ひとつも見逃さないように集中しながら、いつ

も通り物静かな声を出した。
「文句と言いますと、何についてでしょう？」
「昨晩のことですよ。あなた、部下を引き連れて夜の宮廷で武器を持ちだして大暴れしたそうじゃないですか。聞いたときはびっくりしたなあ。『彼は宮廷での武器使用が禁じられていることくらい知っている。あの男前のことだ、ご婦人相手に大暴れしたんじゃないんですか？』と訊いてみたんだけど、どうもそうでもなかったみたいですね？」
軽やかに答えるソールの声は笑っている。
――ソール殿下が怒ったのを、見たことがない。
そんな噂は、シャリオの耳にも年中入ってきていた。
だが、そのすべてはソール自身の計算ずくだ。ソールが大声を出さないのは隙を見せないため。平静であるのは思考を止めないため。この格好だって彼の思考の結果だ。
元から勉学に優れたソールは、外国留学の後にフィニステリアに帰ってからは、常に軍服をまとい始めた。昔、士官学校を出たばかりのとき、ソールの護衛として同行したことのあるシャリオは知っている。ソールはどちらかというと武術は得意ではない。
でも、だからこそ軍服を着る。
格好いい軍服で得意な勇ましい演説をして、国民に笑ってみせる。するといつしか、国民はソールの武術音痴のことなどすっかり忘れて囁き合い始めた。『あの方こそ、強いフィニステリアの象徴だ』『しかも庶民の話がわかる方らしい』――ソールは、自分で計算してそういう

ことを成し遂げる男だ。

まるで頭を使う盤上遊戯をやっているような気分で、シャリオは口を開く。

「昨晩のことなら、自分はエトワール隊の本領を守ったまでと思っております。今は結婚式を控えた大事な時期。賊を追い払うことができて、幸いでした。……とはいえ、殿下はご友人が多い。誰かから、昨夜のことについて文句でも言われましたか？」

とっとと真意を言え、と言外に囁いてやる。

ソールは当然気づいているのだろう、それでも、どことなく情けなく微笑んだ。

「あはは、実はそうなんですよ。昨晩は遅くまで議会の連中と今後のフィニステリアについて議論を戦わせていたのに、眠ったと思ったら宮廷警察の友人が駆けこんできましてね。『宮廷の警備は宮廷警察が任されているはずなのに、部外者が大暴れした、これではメンツが立たない』と始めました。正直眠くてたまりません」

「そんなことで殿下の眠りを妨げるとは、あまりいい友人とも思えませんが。殿下の眠りを守る任務につけとのご命令でしたら、いつでも準備はできています」

淡々とシャリオが返すと、ソールは驚いたように肩をすくめ、軽やかに声を立てて笑った。

「それには及びません。男前に変な噂が立っても困るしね。……それで、昨日の賊ですよ。エトワール隊が捕虜を連れ帰ってしまったんですって？　あなたの隊にそんな権限があったとは思いませんが……どうです。何か有益な情報でも吐きました？」

どことなく悪戯っぽい、試すような声音。笑ったままの瞳が、じっとシャリオを見ている。

（――このひとは、どこまで知っている？　全部知っているふりで、情報を取ろうとしているのか。それとも、本当にある程度知っていて内心笑っているのか）

シャリオはほとんど無意識に少し目を細めて言う。

「いいえ。驚くほど口の堅い奴らです」

「そうですか、それは残念。では、後は宮廷警察が調べて明らかにするでしょう。捕虜は俺が連れ帰って、宮廷警察に引き渡します。彼らはそれで痛み分けということにしてくれますよ。冷血な貴族とは違って、気さくな奴らですから」

笑いながら言うソールは、王子だというのにほとんど国民議会側の人間のような態度だ。

この態度こそが、ソールが急激に力を伸ばした理由でもある。

（彼はこれからは国民議会が力を持つ時代だと読んで、まずは国民議会に取り入り、その人脈を当てにしてくる貴族を呑みこんだ。彼にとっては人脈が命だ。ここに来たのも、本当に宮廷警察のご機嫌取りのためならいいが――今さらそこまで警察に餌はやるまい。宮廷警察はとっくに彼の取り巻きだ）

こうなったら、少し危険でもこちらも相手の真意を探ってみるしかない。

シャリオはわずかにためらった後、不意に問いを投げた。

「殿下。殿下は、今回の結婚式にご不満でもおありなのでしょうか？」

いきなりの問いに、ソールの動きが一瞬止まる。

貼りついたような笑みのまま、彼はシャリオを見つめ、ひらりと指揮杖をひるがえした。そ

の先をシャリオの胸元に突きつけると、なめらかな口調でソールは言う。
「俺は、自分の王族という立場があまり好きではない。けれどそれは、もっと国民ひとりひとりと友達になりたいからです。陛下がご病気になる前に必死に進められていた外交政策に、王子たる俺がどうして逆らうでしょう？……ただ、そうですね。今回の結婚には少し、不思議な点も多いとは思っていますよ――お相手の姫君の居場所が、俺にすら隠されているとか、ね」
（なるほど。姫君のことに関しては、疑念を持っている、と知らせてきたか）
思わせぶりなソールの台詞に、シャリオはあくまで冷静に目礼する。
「失礼いたしました。わたしも、陛下のご意思が一番です。姫君の居場所の件は、警備上の理由で陛下が直接ご指示を出されたとか。どこか安全な場所で花嫁修業をなさっているはず。わたしも結婚式を成功させるために、微力ながらお手伝いをさせていただく所存です」
いつもの調子で言ったシャリオを見つめたまま、ソールは机から降りた。
そして、シャリオとの距離を縮め、軽やかに言う。
「そつのない返事ですねえ。そんなもので、俺が喜ぶと思いました？」
「もしもお気に障ったようであれば――」
「シャリオ。もっと、きちんと役立たずでいなさい」
シャリオの言葉を遮って、ソールが彼の耳元に囁いてくる。薄い刃で斬りこまれたように、ちくり、と悪意が心臓に刺さった気がした。
古傷にそっと指先で触れられるような痛みに、シャリオはわずかに目を細めて囁く。

「エトワール隊は、いかなるときにも陛下に命を捧げるのが使命です」
「そのとおり。でも、陛下はあなたに死んで欲しくはないんだ。覚えてるでしょう？　七年前を」
ちくり、と、また古傷が痛む。
一歩後ろでフラムがわずかに緊張したのがわかった。彼もまた、ソールが何を言おうとしているかに気づいたのだろう。
この番犬はすべてを知っている。シャリオが噛みつけ、と命じたら、たとえソール相手でも命令に従うであろうフラムに、シャリオは後ろに回した手で『待て』と合図を出す。
その間にも、ソールは一種独特の、節回しみたいなものがある語り口で続ける。
「あなたが士官学校を出てすぐ、俺の護衛で辺境の調査に行ったとき。運悪くリシェス兵が襲ってきたことがあったではないですか。俺はどうにか逃げ切り、あなたも生きた。あなたの部下は全員死んだけれど、陛下は喜んでおられましたよ。『他の人間は何人死んでもいい、シャリオが生きていてよかった』と。……俺は確かに、この耳で聞いた」
――部下が全員、死んだ？
――つまり君は、部下を犠牲にして逃げ延びたのか。
――戦わなかったのかね？　民を守るために、剣を持って戦いの先頭に立つべき貴族が。
ソールの言う事件の後、軍に復帰したときの上官たちの顔を、シャリオはけして忘れない。明らかな侮蔑の瞳で見つめられた、あのときをけして忘れない。
そして、背中にかかる、部下の身体の重み。ばらばらと死んでいった忠義な兵士たち。最後

のひとり、自分よりもさらに若い、少年みたいな男の身体を引きずって、森を抜けた夜。
あるときから、ずっしりと重くなった、その身体。
命には重さがあるのだ、と知った夜。
「――光栄なことです」
ソールに答えた声は、我ながらどことなく虚ろだった。
ソールはにこにこと笑って、指揮杖でシャリオが胸から提げている首飾りを引っかける。
「忘れないでください。あなたがその地位にいるのは、あなたがけして実戦に出ないように、という陛下のお心遣いでしかありません。陛下はあなたを溺愛している。エトワール隊はあなたの檻だ――しかし、悲しいことですね。陛下の命もまた、永遠ではない」
さも残念そうに言ったあげく、ソールはシャリオの耳元で声を潜めた。
「息を潜めることです、狩られる兎みたいに。じっと穴に潜んでいれば、悪いようにはしない。大丈夫、陛下が星の彼方に旅立たれても、俺があなたを生かしてあげます。国民のしあわせこそが俺のしあわせ。あなたもまた、俺の愛しい国民なんですから。……だから、ね。あなたの平穏をおびやかすような面倒な部下は、解任なさい」
面倒な部下、と言われた途端、アルの顔を思い出した。
美少年、というより、しばしば子供みたいな負けん気にあふれた元気な顔。
負けが決まっていても、けして諦めずに背を伸ばしている彼。
彼を思い出すと自然と闘志に似たものがわき上がり、シャリオは自分より少し低いソールの

目をじっと見つめた。

「殿下。クレールは自分の頭で己がなすべきことを考え、エトワール隊の隊員として動いたまでです。彼の意思を無視することは、わたしの本意ではありません。もしも責任を取る必要があるなら、隊長であるこのわたしが取ります」

ソールは一瞬だけ笑みを消して眉根を寄せたが、すぐにため息を吐いて笑った。

「部下思いですねえ。せっかく色々忠告してあげているというのに。あなたは本当に、愚かだ」

ほがらかに言い、シャリオの首飾りを引っかけた指揮杖を力一杯引く。鎖の留め金が外れる固い音が辺りに響くと、首飾りがすとん、とソールの手の中に落ちた。

心臓がつかまれたような緊張に襲われ、シャリオはわずかに青ざめる。

「殿下」

それでも、なるべく動揺を見せないように囁いた。後ろに回した手がかすかに震える。

ソールは軽やかに彼から離れ、窓際に立った。分厚い板硝子をはめた窓を手ずからわずかに開けて振り返り、首飾りに軽く口づけてにっこり笑った。

「星石のお守り。古風ですよね。でも、あなたにはよく似合っている。せっかく信仰篤いんだから、この星石も、もっと明るくあなたの行くべき道を教えてあげればいいのにね」

含みのある口調で言い、ソールはいきなり首飾りを窓の外に放り投げた。

とっさに、シャリオは外に何があったか考える。灌木の茂みで留まってくれればいいが、そのまま滑り落ちたら堀の中だ。どうする。どうなる。背筋が緊張で凍った、そのとき。



「痛っ！」

「……？　誰です」

窓の外から響いた声に、ソールが軽く目を瞠って振り返る。

シャリオもぎょっとして視線を投げた。この声、彼にとっては聞き間違いようのないものだ。そのうえ、なんだろう？　砦の影が落ちているはずの窓の外が、妙に明るい。

（太陽の光ではない。この、青いような光は――）

「はい！　エトワール隊員、アルカイド・クレールです。――申し訳ありません、その……外で見はりをしていましたところ、ちょうどよくこいつが降って来まして」

慌てた様子で言って窓の外で立ち上がったのは、美しい金髪を乱したアルだ。

美少女みたいな顔をわずかにゆがめた彼の手には、しっかりとシャリオの首飾りが握られている。アルはそれをシャリオのほうに突きだして、少々途方に暮れた顔をした。

「この首飾り……その、隊長の、ですよね？」

「そうだが……貴様、それはどうした」

「どうしちゃったのかは、俺もわかりません……俺はとにかく、飛んできたのをつかまえただけなんですけど、気づいたらこんなでして、その……」

アルはますます困り顔になって言い、熱いものでも持つみたいに古風で重い首飾りを手のひらの中で転がした。そうして動くたび、ぷっくりと厚みのある楕円形の飾りの表面についた星石が蒼白い光を帯びる。

「これって、こういう仕掛けなんですか？　妙にびりびりするんですけど……すみません、隊長。早めに受け取っていただけると、ありがたいんですが」
「――ああ」
恐縮した様子のアルに、シャリオはとにかくうなずいた。
ソールに一礼して窓際に歩み寄り、アルの手から首飾りを受け取る。その重みに心からほっとして、シャリオは少し険しい表情を取り戻してアルに告げた。
「クレール、貴様は他の隊員のところへ行け。後で話がある」
「はい！」
「ああ、そこの君。ちょっと待ってください」
敬礼して身を翻そうとしたアルの背に、ソールの声がかかる。
シャリオはわずかに緊張してソールに視線を投げた。アルはというと、見るからにびくりとして振り返り、ソールに向かって敬礼し直す。
「何かご用でしょうか、殿下！」
「君、昨日活躍した新人さんですよね。もう一度名前を聞かせてもらえますか？」
ソールは緊張した面持ちのアルに、例の優しい笑顔を向けて言った。
「はい。名前はアルカイド・クレール。准尉です」
何か追及されるのかと思ったのだろう。アルは警戒気味の敬礼をする。
しかしソールは、意外なほど屈託なくうなずいた。

「そうですか。アルカイド、唐突かもしれませんが、俺は個人的に君が気に入りました。友達になりませんか？」

「と、友達？　殿下とですか？」

あまりにも突飛な話に、アルは思い切りソールの顔をまじまじ見つめてしまう。

ソールはその視線を受け止めて笑みを深め、さらに言う。

「そう、友達です。俺はひとと友達になるのが好きなんです。もっと君のことを知りたい。君のことが好きになれるような気がするし……君の力も、きっと使いこなせると思うんです」

ソールお得意の誘いの文句だ。アルは戸惑った様子で、整った眉を寄せている。

「俺の、力……？」

「ああ、返事は急ぎませんよ。決心がついたら、いつでも俺のところに来てくださいね。姿が見えなかったら、宮廷警察のダントンに言ってくだされば結構。――さて、それでは、今日はこれで失礼しますよ。お手数ですが、エドモン中将には捕虜引き渡しの準備をお願いします」

最後まで王子とは思えない丁寧さで言うと、ソールは扉のほうへと向かう。

「了解いたしました。――殿下のお帰りだ！　捕虜の引き渡しの用意を」

シャリオが軍人としての声を出すと、今まで沈黙を守っていたフラムが大股で扉に歩み寄る。彼がうやうやしく扉を開けると、サロンじみた部屋に居並ぶエトワール隊隊員の姿が見えた。きちんと敬礼した隊員たちの間を、ソールは誰にも視線をやらずに通り過ぎていく。

そうして、ソールが出て行った後、すぐにレアが開いたままの執務室の扉を叩いた。

「隊長……」
「入れ」
シャリオの即答に、レアは明らかに青ざめた顔で歩み寄ってくる。
細い顎をあおむけて見上げてくるレアに、シャリオは静かに笑って見せた。他の隊員たち、特にアルなんかには滅多に見せない、毒のない笑顔だ。
レアはそれを見ると、わずかに目を潤ませて言葉に詰まる。
「――大丈夫ですか、閣下？」
続いて投げられたのは、低く穏やかなフラムの声だ。
シャリオが視線をやると、扉の横で壁によりかかっている彼の姿が見える。
なるべくシャリオの気を逆立てないよう、余計な感情を含めないように気遣った、声と表情だな、と思った。それでも、シャリオは彼にはことさら冷淡に言う。
「何も問題はない。殿下が結婚式に反対されておられるのは本当だろうが、陛下がご存命のうちは、押し切れる」
「そうだといいですけど。さすがの俺も、どきどきもんでしたよ。それ」
フラムは言い、自分の胸元を叩いて見せた。シャリオの同じ位置には、さっきアルから受け取った首飾りがかかっている。
シャリオは反射的に首飾りに触れ、ちらと視線を扉の向こうにやった。
「……大丈夫だ。これを取ったのは、いつものからかいだろう。逆にあれだけ探りを入れてき

たのだ、殿下もまだ、すべてに気づいているわけではない。もしこの間の賊にあの方の意思が関わっているとしても、賊は王宮を目指していた」

自分に言い聞かせるようにシャリオは言い、フラムとレアは互いに視線を交わした。

さて、ちょうどそのとき。

アルはというと、砦の周りを回って表の入り口にたどりついたところだった。

「……はー。にしても、ソール王子。なんか評判よりちっちゃくて、変な圧迫感あるひとだったなあ……」

ソール王子への憧れのあまり、見はりついでにお顔を見られれば——と思っていたアルだったが、実際見たソール王子はずいぶん評判とは印象が違った。

シャリオにやたらとねちねち何かを言い連ねていたし、アルにいきなり『友達になろう』と言ってきたのもびっくりだ。庶民派という評判にはあっているけれど、なんだか目が怖いというか、真意が見えないというか、あのやりようはどうにもこうにも落ち着かない。

(大体、王族と俺が友達とか、なれるわけないじゃん……)

アルがため息混じりに砦に入っていくと、待っていたかのように横から頭をこづかれる。

「勝手なことをしてくれたものだな、新入り」

「クロエ大尉。でも、あなただって止めなかったじゃないですか」

アルが言い返すと、妙にご機嫌なリシャールが、兎のぬいぐるみを抱えてくすくす笑う。

「だって、ねえ。面白かったしー。ここからじゃよくわかんなかったけど、うっすら扉から光

が漏れてたよ。あれ、星石の光だよね。君って、ひょっとしたらあれなんだよね、あれ」
「あれって、どれです？　星石は確かに変な反応してましたね。光ってただけだけど。あと、痛かったです……地味に」
星石は魔法的な力を発するということだったけれど、あんなに痛いとは聞いていない。
もう二度と触りたいものじゃないな、ぐったりするアルの横から、ラウルが暗い顔を出した。
「……無駄話より、捕虜。連れて来ないと」
「あ、そういえばそんな話してらしたっけ。隊長……顔色悪かったけど」
平気かな、とちょっと気になって執務室のほうを見ると――いきなり、シャリオが女性と抱き合っているのが目に飛びこんできた。
「……っ……!?　あ、いや、違う、違う、違う、あれはレアだって！」
「む？　何が違うというのだ？」
怪訝そうに振り返ったクロエに、アルは必死で首を横に振った。
「いやいやいや、なんでもないから！」
まさか、シャリオと抱き合っているレアが女に見えた、とは言えない。
……しかし、ちょっと待て。
シャリオとレアが抱き合っているという時点で、自分は動揺してもいいような気はする。
だって、それって、つまり、えーっと……？
（え、やっぱり、隊長とレアって、確定なの？　そう、なの？　うわあ……っていうか、俺は

一体なんでこんなに衝撃受けてるの……？）

わけがわからないままその場に凍りついたアルに、クロエはいつもの調子でばっさ、と派手に前髪をかきあげて眉根を寄せた。

「いつまでも品位のない、変な奴だな。この薔薇園にはふさわしくない。お前にはもっと鉄の臭いのする仕事を覚えてもらわなくては。行くぞ」

いつもの調子で妙なことを言いつつ砦の二階へ向かうクロエに、アルが何か言い返そうとしたとき、背後から不意にシャリオの声がかかった。

「クレール」

「は、はい!?　な、なん、なんでしょう？」

「何を慌てている。貴様、今日は任務の後、暇か？」

今度はこのひと、いきなり何を言い始めたんだろう。慌てて振り返って見ればシャリオはまだレアの肩に手を置いたままだし、アルは視線のやりばに困り果てつつ、引きつった笑いを浮かべて答える。

「はい、まあ、いつもどおり寝るだけですけど」

「なら、飲みに出るか」

あまりに予想外なことをあっさり言われ、アルはとっさに意味がとれずに大きく瞬く。

飲む。まあ、間違っても水を飲むわけではなく、酒だろう。

「酒を……隊長と、ですか？」

「そうだ。嫌か」
シャリオの問いはいつもながらあっさりしたものだ。
そう言われてしまうと、アルも嫌ではない、と思う。
ただ、目の前の上官が酒を飲んでいる姿と、自分が酒を飲んでいる姿が隣り合うというのが、ものすごい違和感なだけだ。
（このひと、そもそも酒場とか行くのか？　何飲むんだ？　俺、貴族の行くような店とか、着ていく服がないんだけど……）
軍服でいいんだろうか、とかなんとかぐるぐる考えた末、アルはなるべくレアを視界に入れないようにして訊いた。
「飲みに行くこと自体は、問題はないんですが……その、どこで、でしょう？」
「そうだな。わたしの館でもいいが――せっかくだ。貴様の生まれた辺りが見たい。色々と、訊きたいこともあるしな」

「勇ましいソール王子に乾杯！」
「とっととリシェスをぶちのめして、この不景気が改善されますように！」
男たちが口々に叫び、酒のしぶきが飛ぶ。久しぶりに来た下町は、以前よりもどことなく煤

けて、ソール王子人気が激しくなっているように思えた。

（こんな雰囲気だったっけなあ、このへんって。なんか、昔より不景気なような……）

なんだか士官学校にいた数年ですっかりお客さんになってしまった気分で、アルは後ろを振り返る。熱気に満ちた細長い店内は、紫煙と獣脂の煙でぼんやり煙っていた。

「隊長、大丈夫ですか？」

「――生きてはいる」

シャリオは至極淡々と言い、丁寧に酔っ払いどもをかき分けてアルの居る勘定台のところまでやってくる。その姿がまた、びっくりするほど周囲に馴染まなくて、アルはほとんど半笑いになってしまった。

（フラムならまだ馴染みそうだけど、このひとはほんと……なんだろ。掃きだめの薔薇っていうか、なんていうか……うーん。とにかく、すっごい違和感）

「いらっしゃい、旦那！　綺麗なかっこですね、身ぐるみ剝がされないように気をつけて！」

すかさず勘定台の向こうから、赤い顔の主人がシャリオの洒落た姿に粗野な声をかける。途端に周囲から爆笑がわき上がり、シャリオは何かを言おうと唇を開きかけ、そのまま何も言わずに閉じた。何を言っても無駄な雰囲気だというのがわかったのだろう。

ここは場末も場末の大衆酒場だ。王都の下町にも貴族がお忍びでくるような店はあるが、ここはそんなことは起こりようがない別世界である。

身ぐるみ剝がれることはないだろうが、シャリオが怒って誰かをたたきのめす未来は簡単に

想像がついたので、アルは率先して背伸びをし、周囲に手を振った。
「みんな、このひと、俺の上官だからな！　変なことしたらぶっ飛ばすぞー、覚えとけ！」
「おおおお、アルの隊長さんか！　だったらごちそうしねえとな！」
「っていうかアル、見違えたぜ！　何年ぶりだよ、なおさら美人になりやがって、てめえ！」
「アル、おねーさんのこと覚えてる？　ご飯食べてる？　林檎のパイはどう？」
「いやいや、そんなに食べられないって！」
周り中から手が出てきてアルの頭をくしゃくしゃにし、酒杯と料理の皿が押しつけられる。
シャリオはそんな彼を横目に、勘定台へもたれかかった。
「貴様はもう少し食っておけ。背が伸びるかもしれん」
「ほんとにそう思います？　隊長って、俺くらいのときは何食べてました？」
「まったく覚えていない」
「……だと思いました」
そもそもあなた、嗜好品にしか興味なさそうだし……という本音は言わずに、アルは香草たっぷりの塩漬け肉煮込みを抱えこむ。
ここ数日サントール砦で暮らしてみたかぎりでの話だが、アルはシャリオがまともな食事をしているのを見たことがない。彼が口にするものと言ったら、ちょっとした酒か茶か珈琲か煙草か、せいぜいレアの焼いた焼き菓子の切れ端、という印象だ。それでどうしたらこの身体を保てるのか、正直教えてほしい。

（俺、このひとの五、六倍は食べてる気がするんだけどなあ。一体どこに消えちゃうのかなあ……食べたぶん、全部筋肉になればいいのに）

アルが煮込みにナイフを刺してしみじみ考えている間に、赤ら顔の店主がにやにや笑いながらシャリオに声をかける。

「で、何を飲まれます？　上品な酒はないですぜ」

シャリオはちらと彼の目を見ると、無言のまま懐に手を入れた。

アルは大慌てでナイフを放り出し、シャリオの腕を押さえた。

「隊長、銃はダメです！　下町の奴殺したら、仲間から一生追われますからね！」

「……わたしはそんなに物騒か？」

シャリオは淡々と訊き、勘定台に銀色のものを投げ出した。

店主はアルの台詞を聞いてびっくりしていたのだろう、ひっ、と声を呑んだが、すぐに勘定台に転がったのが一枚の銀貨だと気づく。

大金を前に瞬く店主に、シャリオはいつもの低い美声で告げた。

「これで、クレールの友人たちに一杯出してやれ」

「へ……？　あ……ああー！　いやー、わかってんじゃないですか！　ありがたくいただきますよ！　どうもどうも！」

「これから空気を悪くする詫びだ。わたしは生まれつき、こういうところで気の利いた冗談を言う才能がない」

シャリオは言い、周りの客にばんばん背中を叩かれて、ずれかけた帽子をこともなげに直して見せた。そんな様子がおかしくて、アルは思わずちょっと吹き出してしまう。
「冗談なんか言えなくても、面白いですけどね、割りと。隊長、何飲みます？　男らしいのがいいですよね？　とにかく強くて辛いやつ！」
「いいのかよ、アル。お貴族さまってのは、葡萄酒しか飲まないんじゃないのかい？　せっかくの出世街道だってのに、上官の方には気を遣わなきゃならねえよ？」
気を利かせて口を挟んだ主人に、シャリオは無造作に煙草の火をつけながら言う。
「こいつの言うようなやつでいい。どんな酒でも酔えれば同じだ」
「へえ、わかってらっしゃるじゃないですか、旦那。そんじゃいいっちょ、いいやつを！」
主人がうきうきと小さな硝子杯ふたつに酒を満たしてくれたので、アルはにこにことシャリオのほうに杯をつきだす。
しかしシャリオは、杯をあわせることはせずに、さっさと強い酒を喉に放りこんだ。別にわざとそうしたというより、そうするのが当然、といった所作なので、止めようもない。
（このひと……貴族だってことより、この、我が道を行きすぎるところのほうが問題のような気がしてきた……）
笑顔で固まったアルのほうは見もせずに、シャリオは新たな酒を杯に注いで言う。
「貴様の生まれた家は、この近くなのか？」
「あ、はい。区画整理されちゃって家はなくなっちゃったし、家族はみんな死んだんで。ここ

にいるような腐れ縁のみんなが家族なんですよ」

「王都下町の区画整理。七年前か」

「それです、それ。さすがによくご存じですね！　あれでずいぶん小さい家がつぶされて、聖堂とか、学校とかが建って。確かに多少治安はよくなったけど、思い出は消えちゃいました。貴族の元老院が決めたことだったらしいですね、あれ」

語っているうちに昔のことを思い出して、アルは少し苦笑する。

「まあ、それこそ貴族さんとかから見たら、いくら整理しても足りないくらいに汚いとこなんだろうな、って思いますよ。実際酷いことはいっぱいあるんです。俺の友達だって、孤児院で飢え死にしかけて逃げてきたのもいるし、奉公先で死にかけたとかも普通だし。警察は金持ちと貴族の事件しか見てくれないから、何かあっても自力解決できなきゃ泣き寝入りだし」

話しているうちに、この街で得た色々な思い出が蘇ってくる。

色々な人間がやってきては去っていき、住み着くのは日々生きていくのがやっと、といった人間ばかり。人間というより、虫やら動物やらの間で起こるような食い合いが年中だった。

アルだってその争いに無縁だったわけではない。小さいころはいつだって警戒していたし、それが習い性になって今でもやけに悪意や殺気には過敏なくらい反応する。

（でも、俺、やっぱりここが嫌いじゃない）

様々な記憶がどことなく愛しいのを確認し、アルはしっかりとした口調で言った。

「でも、だからこそ、ここでは人間のほんとの本音が表に出てきます。そのうえで友達になれ

る、って思った奴は、本当に信頼できる」

アルのゆずれない『友達』。それはつまり、こういうことだ。

別に、仲良く飲めるのが友達じゃない。うわべでお喋りするようなのも違う。

本当のぎりぎり、命も危ういようなところを一緒に経験していて、それでも一緒に飲める、それがアルの友達だ。

ついつい熱く語ってしまってから、アルはじっと見下ろしてくるシャリオの視線に気づいてはっとした。

「……すみません、なんか、変なこと喋ってますね、俺」

「いや、面白い。もっと続けろ」

「そう言われるとかえって難しいですよ！　大体、その、なんで俺たち飲みに来たんでしたっけ。何か、訊きたいことがあるとか、なんとか……」

「ああ」

思い出したように酒にちらと口をつけ、シャリオは身をよじってアルと正面から向き合った。真っ向から見ると、彼の琥珀の瞳は澄みすぎていて少し怖いみたいだ。

アルが視線のやりばに困って決まり悪くしていると、シャリオの声がふと真剣になる。

「先日夜間警備をしたとき、貴様は銃を撃とうとしておかしくなったな。士官学校の校長からも『銃が苦手』とは聞いてはいたが、あれは苦手という域を超えていた。百年前ならともかく、銃を持つたびああなられては軍人としては使えん。何か理由があるのか？」

（あ、そこからか）

訊かれる順番は意外だったが、当たり前の問いだとも思う。

自分だってびっくりしたことだし、そのせいで死にかけたのだ。

アルは少し黙りこんでから、ぽつりと言った。

「銃自体が苦手ってわけじゃないんです。ただ、たまにああなるし、その理由は、あります。……ありますけど、くわしい理由は、話せません。昔、嫌なことがあったんだ、としか」

「なぜ話せない」

「……聞いて面白い話じゃないですから。よほどの友達にしか話さないって決めてるんです」

「そのせいで、仲間を危険な目に遭わせることになるとしても？」

シャリオの言葉に、思わずぎくりとする。

それを言われると、確かにつらい。士官候補生のときは、銃なんて撃てなくてもどうにでもなると思っていたけれど、今回シャリオたちを巻きこみかけたのも本当のことだ。

（やっぱり、これは、言うべきなのかな。このひとに――言っても大丈夫か？）

この話は、言ってみればアルの一番の弱みだ。だからこそ、友達にしかさらしたくない。もしくは、とことん信頼しようと決めた相手にしか。

どうだろう。自分はこのひとを、信用できるのか。

強いけれど平和をよしとして、ひとりひとりに指揮官になれという、不思議なひと。

見た目以外は、アルの理想とはだいぶ違う。

と、そこまで考えたとき、不意に昼間聞いたシャリオの台詞が耳の奥で蘇った。
――クレールは自分の頭で己がなすべきことを考え、エトワール隊の隊員として動いたまでです。彼の意思を無視することは、わたしの本意ではありません。
――もしも責任を取る必要があるなら、隊長であるこのわたしが取ります。
……それは、窓辺で断片的に聞いた、ソール王子とシャリオの会話。
そう、よりによって、そこがはっきり聞こえてしまったのだ。
毅然として、アルをかばってくれたあの台詞。
（少なくとも、王子に向かってあんなこと言ってくれるのは、半端な気持ちじゃない、よな。このひとは俺を守ってくれた）
だったら、応えるのは当たり前のように思う。
いつもくっついてくるフラムさえ置いて、たったふたりで喋れる場を作ってくれたのも、シャリオの誠意の表れみたいに思えるし。
（――よし。ここは、賭けるか）
裏切られて、後で後悔するかもしれないけれど、今だけは、このひとを信じよう。
そんな風に決めて、アルは真剣にシャリオの顔を見上げ、言葉を重ねた。
「……わかりました。お話しします。でも――その代わり。ひとつだけ、俺の質問にも答えてもらって、いいですか？」
気楽に言おうと思ったが、どうしても声と顔はこわばった。

シャリオはそんなアルをしばらく眺めていたが、不意に勘定台を押し離して歩き出す。
「構わん。――だが、もうここは出よう。充分酔った」

酒場を出て真っ暗な路地をしばらく行くと、再開発地区に出る。
ごちゃついた下町の中では多少見た目のいい類の、安い建築物の固まり。味も素っ気もないそれを見上げて、アルは少し乱暴に頭を掻いた。
「ほんとに、綺麗さっぱりなくなっちゃったな。……隊長、ここが俺の家だったとこです。このへんに入り口があって。縦に細長くて、一応三階まであったんですが、俺たちが使ってたのは二階と三階だけで。今思うと、ほんとに狭かったですね。おかげで軍隊生活は楽ですけど。親はすごくいいひとたちで。俺は奉公にも出ないで、平和な小銭稼ぎだけで生きてました」
「奉公に出さないのが、いい親なのか」
いかにも育ちのよさそうなシャリオの問いが飛んできて、アルは小さく笑ってうなずく。
「はい。奉公先によっては、奉公っていうより身売りだから。怪我とか病気とか年中で、ほとんどは普通に成人できないです」
「なるほど」
静かに、けれど少し考えこむように、数歩後ろにたたずむシャリオが言う。

このひとは、こういうときに少しも相手をばかにしないのがすごい、とアルは思う。

酒場ではくわしい話はできない、というシャリオの言葉に従って、アルとシャリオはアルの生家跡に来ていた。感慨と心のうずきみたいなものが交互に訪れるせいで、アルはやたらと喋っているか、妙に黙りこむかのどちらかになってしまっている。

（なるべく、普通に。平気そうにしないと）

アルは考え考え自分の生家があった場所から離れ、少し開けた広場に出る。

そのときちょうど雲間から月が出て、噴水を配した円形広場の姿があらわになった。

――嫌だ、ここには来たくない。

ほとんど自動的に叫び出す心をどうにかなだめ、アルは慎重に広場の真ん中に歩いて行く。

そして、両手を広げてシャリオを振り返った。

「そう――それで、ここ。七年前、このへんに旅芸人が来ました。派手だったですよ、火を吹く大男とか、身体がやたらと柔らかい女とか。曲芸をやる馬とか、獅子だっていた。色とりどりの馬車でやってきて、つぎはぎの天幕を張りました。わくわくしたなあ。聴いたことがない音楽と、惜しげもなく撒かれる色のついた紙。ただの紙だったけど一生懸命拾ったもんです」

そのときのことを喋ると、アルの心はかすかに震える。

まさにこの場所だと思うと、闇の中に過去の幻が見えるような錯覚があった。

暗い広場がみるみるうちに薄明るくなり、耳の奥でにぎやかなざわめきが響き始める。

人々の怒鳴り合う声。笑いあう声。馬のいななき。馬車の車輪の音。そして、旅芸人の声。

――いらっしゃい！　今宵はあなたに、素敵な夢をおみせしましょう！

「旅芸人が来たときは、両親がどうにか仕事を休んでくれて、公演に連れてってくれました」

過去の幻に対抗するように、アルはぐっと拳を作って言った。

いくら抑えても、抑えきれない。この思い出の蓋を開けると、アルはいつだってくらくらして、吐き気がして、わけがわからなくなって、下手をしたら泣きじゃくりたくなる。

いつまでも乾かない傷みたいな、悪い思い出。

（だけど、俺はもう大人だ。崩れないで、最後まで話さなきゃ）

シャリオにばかにされたくない、その一心で眼前の幻影をにらみ、アルは強く囁く。

「それで、よりによって、俺たちが公演に行った日。ちょうど、会場に賊が出て。理由もわからないうちに、客がいっぱい死にました。……うちの親もです」

少しの、間。

沈黙の中で幻の笑い声が大きくなり始める。笑っているのは誰だろう。両親？　自分？　旅芸人の一座？　それとも、武器を手にした賊どもだっただろうか。

「どんな賊だった？」

落ち着いて響くシャリオの美声にはっとして、アルは幻影を振り払おうと目を閉じた。

でも、幻は消えない。当たり前だ。実際に見えているものではないんだから。

「……覚えてません。黒っぽい服を着てたような気はするけど、ほんとは青や緑だったかもしれないし。血で黒っぽくなってただけかもしれない。覚えてるのは、鼻がばかになりそうな血

の匂い。あと、父さんと母さんが……俺のこと、守ってくれたこと」

両親のことは無理に力をこめて言い放ち、喧嘩するときみたいに険しい顔で目を開けた。

そのままゆっくりと広場を歩く。目の前をちらつく幻影の中では、天幕内の舞台に、椅子もない客席に、荷物みたいにごろごろひとが倒れている。

自分は両親の身体の下にいた。

大きな目をいっぱいに開いて震えて、ひたすらにひとつのことだけを考えていた。

――父さんと母さんを、守らなきゃ。

「俺はそのまま小さくなってりゃよかったのに、なんか、頑張っちゃって。そこらに落ちてた銃を拾ったんです。見よう見まねで、こうやって、寄ってくる敵に向かって銃を構えた。父さんと母さんを守ろうと思って」

アルは立ち止まって振り返り、指で銃の形を作ってシャリオに向ける。

シャリオは石畳を踏んで立ち止まって、煙草に火をつけながら無造作に言う。

「それで、撃てたか？」

あんまりに遠慮のない台詞に、かえってちょっと胸が空いた。

アルはそっと睫毛を伏せて言う。

「撃てませんでした。怖くて、がちがちになってて、俺はそのまま死ぬはずだった。……でも、助けてくれたひとがいたんです。しばらく前から路地裏に住み着いてたひとで、もうぼろぼろで、生きる気が全然なさそうな奴で。みんなに『死人』って呼ばれてたけど、そのときはいき

なり生き返ったみたいに走り出てきて、俺の銃をとって。賊を、ぶちのめしてくれました」

そこまで話すと、胸のつかえが少し軽くなるのを感じる。

一発の銃声ですべてを終わらせてくれた、恩人のこと。そこまで思い出が進むと、いつも多少は気持ちが楽になる。悪夢もいつかは終わるんだと思えるようになる。

(だけどあのひと、結局どうなったんだっけ。ちゃんと、生きてここを出てったのかなあ)

下町に溜まっていた人間は、いつだって知らない間にいなくなる。思い入れがあるひとだろうと、ないひとだろうと。恩人だろうと、敵だろうと。

最後の最後で曖昧になる記憶をまさぐっていると、シャリオがゆっくり近づいてきた。

「それ以来、銃を持つと、昔のことを思い出すのか？」

「恥ずかしいけど、そういうことですね。うわっと血の匂いが蘇って、ちっちゃいころ、何も力がなかったころに戻ったみたいな気がして、怖くなるんです」

この歳になって、格好悪い話だ、と思いながらアルは言う。

あれからずいぶん時間が経って、もうあのころのままの景色も、ひとも、ここには少しも残っては居ないのに。自分だけがまだここに半分踏みとどまっている。

今だってこうしていると世界がちらちらと血の幻影に侵されてきて、目が痛くて。アルはついついその痛みに負けて、わずかに顔をゆがめて目を閉じた。

「目を開けろ、クレール」

すかさず鋭い声が飛んで、腕をつかまれる。

ぎょっとして目を開くと、乱暴に引き寄せられた。思ってもみなかった反応。

（怖い）

幻影のせいで弱っていた心が叫ぶ。視界がちらつく。目がよく見えない。

自分を引き寄せたひとの顔が、よくわからない。ぼやけている。これは誰の顔だ？　たまに自分を叱った父親？　親が死んだ後に面倒をみてくれた酒場の主人？　それとも、自分に銃を向けて笑った賊？　わからない。混乱と恐怖で歯が鳴りそうになる。

そのとき、清冽な声が闇を裂いた。

「わたしが見えるな？」

途端に、ぱっとアルの視界が鮮明になる。

今までもやもやと目の前に漂っていた過去の幻影が、かつてなく綺麗さっぱりと消えてしまって、後に残ったのはシャリオの真剣な琥珀の瞳だけだった。

唯一無二の、星みたいな瞳が自分を見ている。

今までもシャリオの声で意識がはっきりしたことはあったが、ここまであからさまなのは初めてで、アルはびっくりしてうなずいた。

「……はい」

シャリオはしばらく、アルの瞳の奥の過去をにらむようにじっと見つめていた。

やがてほんの少しだけ気配を緩めると、彼は静かに言う。

「――それでいい。恐怖を感じたら目を閉じるな。恐怖から目をそらすと、恐怖は自分の中で

ひっそりと増幅される。心の中の闇になった部分、常には表に出てこない部分で、ゆるやかに大きくなる。そしていずれ、己の制御の手をはねのけて表に出てくるものだ」

しっかりと目をあわせて告げられる台詞は妙に真摯で、聞いていると心が落ち着く。

アルはゆっくりと一度瞬いてから、彼に訊いた。

「……あなたが、恐怖を認めろって最初に言ったのは、そういうことですか」

「覚えていたのか」

「忘れられません。初対面からぶん投げられましたし」

「そういうこともあったな、そういえば」

しれっと言うシャリオの目はいつも通り冷たくて、真意を見せないままにするすると逃げていってしまいそうだ。アルは徐々に自分がいつもの調子に戻ってきているのを感じながら、訊いてみる。

「……隊長。俺は、銃を撃てない理由を話しました。代わりの質問、いいですか？」

「言ってみろ」

ためらいなく返されると、それはそれで戸惑った。

正直なところ、知りたいことはいくらでもある。エトワール隊のこと。レアとシャリオのこと。ソールの話していたもろもろについて。

（どれを訊いたら、このひとの本当の心にたどりつけるのかな）

アルが聞きたいのはシャリオの秘密というより、シャリオの本音なのだ。

悩んだ末、アルはシャリオを見上げて訊ねる。
「隊長が、一番大事にしてるものって、なんですか？」
言ってから、かなり曖昧な問いだな、と思う。どういう主旨だ、と聞き返されるかもしれないと思ったが、答えは案外すぐに返ってきた。
「正義だ」
「――正義？」
あまりなじみのない言葉に、アルはきょとんとして聞き返す。
見上げたシャリオの目は揺らぎない。相変わらずアルを見ているようで、他のもっと大きいものを見ているようでもある。彼は言う。
「ひとは誰しも死にゆく。その運命は変えることができない。死に添えられる、もっとも美しい供物は正義だ。『正義のための死』。志を持って生きた誰かの墓石に刻まれるべきその一行のために、わたしは戦う」
普段あまり感情の見えない声が、不意に深く、重くなる。
なんでこのひとがこんなことを言うのかはよくわからなかったが、このひとが嘘を吐いていないことだけは、よくわかった。
このひとが大事に思っているもの。正義。そして、『誰か』の人生と、その最後。
（よくわからないけど、とにかく自分のため、じゃないんだな）
このひとが見ているものは多分、アルが見ているものよりだいぶ大きい。自分の命もあっさ

り主君に捧げてしまう、昔話の騎士に少し似ている——と思った。
でもその正義って、具体的には誰を守るための正義なんだろう。
アルは少し考えてから、もう一度問いを投げる。
「……死は、ともかく。隊長の『正義』についていったら、昔の俺みたいな人間を助けたりとか、できるようになりますか？」
その問いを聞くと、シャリオの瞳は不意に優しくなった。
（あ、これ、あのときの）
初対面のときに自分を見下ろしていたシャリオの目を思い出して、アルは目を見開く。あのときと同じ、ちょっとびっくりするくらい慈悲深い瞳。
ソールの表面だけ笑っている瞳とは違う。ほとんど無防備なくらいの瞳で、彼は強く言う。
「約束しよう。殺させない。わたしは、正義を執行する」
心臓が静かに熱くなる。確実に、熱い血を吐き出し始める。
一瞬心が子供のころに戻りそうになって、アルはかすかに震えた。
今のシャリオの台詞は、昔の自分が欲しかった言葉、そのままだ。
強くて、綺麗で、ちょっと理解しがたいくらい高潔な存在が現れて、目の前にあるどうしようもない現実をぶちこわしてほしい。そんなふうに望んでいた、あのころ。
あのころにはもらえなかった言葉だけれど、今、この場所でもらえたのが運命みたいな気がする。本当は、単なる偶然なのだろうけれど、それでもよかった。

今、この自分の気持ちが大切だった。
（大丈夫、かもしれない。俺、このひとを信じられる）
自然に心がそんなふうに傾く。万が一全部が嘘で、いつか手ひどい裏切られ方をするのだとしても。それでもいいや、と思えるくらい、今が嬉しい。
アルは自然に笑みがこぼれてしまった顔をどうにか引き締め、少しだけ冗談めかして問う。
「――正義を執行するために隊長の自由になる部隊って、エトワール隊だけなんですよね？」
「そうだな」
あっさりとうなずくシャリオ。気負っていない態度が好ましく思え、アルはうなずいた。
「じゃ、俺ひとりだってよろよろしてるわけにはいかないですね。がんばります。銃も撃てるようになります。ちょっと、時間がかかるかもしれないですけど、いつまでも悪い思い出にとっつかまってるわけにはいきませんから」
「期待しておこう。時間があればわたしが教えてもかまわん。基本的にエトワール隊員の行動は自由だ。ただし――貴様はこれからは、星石に気軽に触るな」
シャリオは言い、今日も首から提げているお守りの鎖をつまんで見せる。
その表面にはまった石は、こうして夜の月光を浴びると、ことさら美しく輝いた。しかしアルはその光で昼間に受けた痺れるような痛みを思いだしてしまい、ちょっと顔をしかめる。
「はい。あんなことになるんじゃ、頼まれても触りたくはないです。星石って不思議な力があるっていいますけど、俺、星石から呪いでも受けたとか、そういうのはないですよね……？」

おそるおそるアルが訊くと、シャリオはお守りを手のひらの中に握りこみながら意外なことを言った。

「いや、逆だ。貴様は星石に好かれすぎている。下手に触れると、星石の力を増幅しかねん。人々の文明が発達した今となってはさして重要視されない星石だが、かつては星石が悪用されないよう、星石を管理するためだけの護星官という職業があったほど、扱いには注意が必要なものなのだ。彼らを派遣していたアルタリアが滅びてからは、護星官は消滅したがな」

「好かれすぎ、ですか。あんまり嬉しくないなあ……」

そういえばアルタリアの護星官については歴史の教科書で読んだな、と思いながらアルが言う。

古王国アルタリアは、すでに二十五年前に戦争でフィニステリアの一部になった国だ。主立った王族は戦時や戦後すぐに皆死に、若いアルにとってはすっかり過去の国である。

「表に出ていることがすべて真実ではない。とにかく星石には触れるな。そして、自分が星石と過剰反応を起こすことはひとには言わないことだ」

「はい」

必要以上に素っ気ないシャリオの言いようが少し気にはなったが、アルはとにかくうなずいた。と、そのひょうしに、アルはふと、ソールの顔を思い出す。

――友達になりましょう。

いきなりそんなことを言ってきた、彼。

「そういえば、ソール殿下が俺に『友達になりましょう』って言ってたの、あれもひょっとして、星石との過剰反応がらみだったりします？」

なるべく軽い調子で訊いてみると、急に雰囲気がぴりっと緊張したのがわかった。

何やらまずいことを訊いたのだろうか、とアルが小さくなっていると、不意に、かん、かん、かん……と遠くで鐘が鳴るのが聞こえてくる。

「……！」

その音に反応し、アルとシャリオはほとんど同時に振り返った。

広場の向こう、整備された下町の建物の間から小さく見えるのは、王宮の敷地内にある警備用の塔だ。この音はあそこから響く、警鐘なのである。

「戻るぞ」

シャリオの声が完全に冷たくなっているのを聞いて、アルもうなずく。

「――はい！」

と、そこへ、がらがらとけたたましい音をたてて一台の馬車が通りかかる。アルはすぐに横へ避けたが、馬車はアルとシャリオの真ん前で停まった。なんだろう、とアルが少し警戒して見ていると、扉が開いて燃えるような赤毛の男が飛び出してくる。

「閣下、遅くなりました。王宮でいいですね？」

「ああ」

「フラム少佐!?　間がよすぎです、っていうか、ひょっとして、ずっと見られてた……？」

アルが叫ぶと、フラムは軽く片眼を閉じた。
「大丈夫、お前の話は聞こえないとこにいたぜ。男と男の話だもんな？」
「あなたってひとは……!!」
ひょっとしなくても、自分のあんなところや、こんなところを見られてしまった。なんともいたたまれない気持ちで震えるアルの横を、シャリオが通り過ぎる。
御者の置いた足台を踏んで馬車に入りこみながら、シャリオはちらとアルを振り返った。
「急げ、アルカイド」
「はい！」
とっさにどきりとして、慌ててシャリオの後に続く。
（そういや、名前で呼ばれるの、初めてか）
そんなことでほんのりしあわせになってしまいそうな自分の頬を、アルは慌ててはたいた。

フラムが手綱を取り、できるかぎり馬車を飛ばして帰ってきた王宮は、夜中だというのに騒がしかった。あちこちに明かりが灯り、角灯の明かりらしきものが右往左往しているのが外からでも見て取れる。
「どうなっている。状況を報告しろ」

シャリオが王宮の正門前へ足早に歩み寄りながら鋭い声を出すと、さっと見覚えのある数人が歩み寄ってきた。真剣な面持ちでシャリオに耳打ちしたのは、クロエだ。
「賊が、侍従長の部屋に侵入したとのことです」
「みすみす侵入を許したのか。被害は」
「特になし。侍従長がちょっと怪我したくらいです。宮廷警察が踏みこんできたら、賊はその場で自害したとか」
クロエの報告に、横で聞いていたアルのほうが軽く目を瞠る。
「え、自害って。宮廷警察の奴ら、どれだけ脅しつけたんですか、そいつのこと」
「脅しつけた、もしくは――」
シャリオは考えこむ風情で言い、ふと言葉を切った。
そして、夜の王宮を、あの目でにらむ。何か、遠くを見つめるような、苛烈な目で。
「賊どもには死んででも守らねばならない秘密があるのかもしれん」
シャリオの言葉に、誰もが緊張して口をつぐむ。
死んででも守らねばならない秘密――それは一体何なのか。
シャリオはそれを知っているのか。山ほど訊きたいことはあったが、シャリオは何も語ろうとしなかった。ただ、アルは彼の手が胸に提げた星石のお守りを握りしめているのに気づく。
シャリオは近づいてくる結婚式の成功を、空に祈ってでもいるのだろうか。
それとも、その首飾り自体が、そんなに大事なものなのだろうか？

LA GARDE ETOILE ROYALE

4 仮面が踊る結婚式

それからの数日間は、エトワール隊のやることがやたらと増えた。

周囲の目をくらますためにおもてなし任務は続けなくてはならなかったし、その間にご婦人方から情報収集、警備のための下準備などをこなすので毎日が精一杯だ。

しかし実際こうなってみると、おもてなし任務は情報収集に結構便利だった。ご婦人方の噂話は真偽はともかくおそろしい速度のうえ、とんでもないところから仕入れられてくるのだ。

そうしてどたばたしているうちに瞬く間に過ぎていき、あっという間に結婚式当日である。

――王宮は秘密めいた、不思議な興奮に満ちている。

「国民議会との調整は出来てるって話だけど、国民に結婚式のことが知らされたのはついさっき。段取りは大体聞いてましたけど、あんまりにも突然すぎませんか？　きっと今頃、下町とか大騒ぎですよ」

いつにも増してきらびやかな近衛の正装をまとったアルが少し不安げに言うと、エトワール隊隊員たちの間には緊張感のない笑いがおこる。

現在、エトワール隊は結婚式に参列するために待機中である。

本来なら待機のための控え室が宮殿内に用意されるはずなのだが、はみ出し者部隊にそんなものはない——というのが妙に邪険な侍従たちの言い分だった。

ともあれ、そんなことを気にしていそうな人間は、ここには誰ひとりとしていない。

クロエはさりげなく自分の髪を直しながら言う。

「ま、騒ぎは騒ぎになるだろうな。しかし、その騒ぎを起こしてまでこの段取りにしたのには、国王陛下の深遠なご配慮があるに違いない。ご健康なときの国王陛下の采配は穏やか、かつ毅然とした素晴らしいものだった。何より、詩を愛しておられたし！」

「だとしても、陛下は今日も離宮からこちらへは来られないんでしょう？　無事、反対勢力を抑えられるかな。敵は王宮にあんな賊を二回も入りこませる奴なんだから、相当大物だと思うんですけど。そのうえこっちは今日も宮廷内に銃は持ち込み自体不可、剣も使うな、なんて。いくら決まりだって言ったって、あんな泥棒が何度も入ってる状態で……非常識ですよ」

アルが言い、剣帯に吊したサーベルを見下ろす。その柄と鞘には、飾り紐でもって簡単ではあるが剣が抜けないような封印が施してあった。

同じ出で立ちのラウルが、じっとりと誰もいない部屋の隅を眺めながら言う。

「……まあ、ね。戦争を望んでる人間は、宮廷の内にも外にもやまほどいる。陛下が離宮に引きこもり始めてから、不景気だし。陛下の平和主義がたたって、フィニステリア自体があっちこっちに狙われてるし。戦争して領地を取れば景気がよくなるんじゃないの、っていうソール王子派は増える一方だ……だけどね、戦争はよくないよ。怖い幽霊が増えるから」

「はーい、ラウルはそこまで～。危ないなー、宮廷警察に聞かれたらどつかれるよっ。それに、お客様のいるところで銃をぶっぱなせないのは当たり前！　百年前とは違うんだからさ、武器がダメなら、みんなが身体張ってお客を守ればいいじゃない？　やりようは色々あるよ」

ひときわ背の低いリシャールが、満面の笑顔でばんばんラウルの背中をはたく。

あくまで自分が身体を張る、と言わないあたりがリシャールのリシャールらしいところなのだろうが、アルはその前のラウルの話のほうが気になった。

ラウルはまさか、今回の事件でソール王子を疑っているのだろうか。

（フラムも似たようなことを前に言ってた。確かにソール王子は平和より戦争を望む方だけど、さすがに今回の結婚に反対ってことはないよな？　そんなことがあったら、陛下に直接進言とかするはずだし、反対だからって物騒な手段に出るわけがない。あのひとはちょっと変わってるけど、聡明な方のはずだし――）

大体、もしものもしもの話だが、王族に首謀者なんかがいたら、誰にも手なんか出せないではないか。そもそも、エトワール隊の任務は王族を警護することなのだ。

敵を守ることになるなんて、まったくぞっとしない。アルがそんな嫌な考えをせっせと頭の隅っこに追いやってサントール砦のサロンを見渡すと、やけに緊張したレアの様子が目に入った。いつも落ち着いている彼にしては珍しいな、と思い、アルが声をかけようとしたとき。

不意に執務室の扉が開き、シャリオとフラムが一点の曇りもない正装姿で現れる。

（……やっぱりこのひとたち、反則）

こんなときなのにうっとりしかけ、アルは慌てて首を横に振る。
シャリオは部屋の真ん中まで歩み出ると、まっすぐにアルを見つめて言う。
「今さら悩み顔だな、クレール。今は何が大事だ？　何が貴様の任務で、何がはっきりしていることだ。言ってみろ」
「はい。俺の任務は、結婚式を無事成功させるため、王族の方々を警護すること。そして、はっきりしてることは――宮廷警察は役に立たない、ってことです」
アルが思い切ってきっぱり言ってしまうと、周囲の雰囲気が緩むのがわかった。
シャリオも薄い唇にちらと笑みをよぎらせてから、冷たい無表情になってうなずく。
「そうだ。宮廷警察は当てにならん。となれば、我々が警備の指揮権を取るぞ」
きっぱりとした宣言に、アルは思わず目を瞠る。
「本当ですか？　できるんですか、そんなこと」
「少々変則的な方法を使うが、可能だ。これから基本的な警護計画を発表する。その後は任務達成のために、各自判断して動くように。いちいちわたしに許可を取る必要はない。ただし、発砲と抜剣は最後の最後までしないこと」
シャリオはことさらなげに言い切ったが、言っている内容はかなりとんでもないことだ。
何しろこれから始まるのは、王族ぞろぞろ、貴族もぞろぞろ、少しでも下手をうったら不敬罪で罰せられ、さらには国際問題まで引き起こしそうな場面なのだ。
いくら各自判断と言われても、限界が目に見えているような……と思ってまじまじシャリオ

の顔を見上げると、彼はうっすらと微笑んでいた。
シャリオは少しも揺らぐことなく、深い美声で言う。
「安心しろ。責任はすべてわたしがとる。こんなときのための生まれと階級だ。半端な圧力なら握りつぶす。――国王陛下のもとに太陽が輝く限り、誰にも貴様らに手は出させん」
彼のとんでもない宣言に、ふわっと隊員たちの間の温度が上がる。
アルも、ふと気づくと勝手に顔が輝いているのを感じた。
自分の生まれと階級を自慢するような人間が格好よく見えたのなんて、生まれて初めてかもしれない。そう思いながら、アルはとびきりの敬礼をして叫んだ。
「了解です、隊長！」

「警備許可証？」
「そうだ。警備許可証と身分証がなければ、武器を携帯してこの先へ入ることはゆるさん」
大量の鏡がある大広間へ続く控え室の、さらに控え室の、そのまた前にある控え室で、アルたちは宮廷警察の男と対峙していた。
エトワール隊が警備をするのは最初からわかっていたはずなのに、いきなりの言いがかりだ。
一体なんのつもりだ、とアルが怪訝な顔で見つめると、宮廷警察の男たちは敵意と高慢さ丸出

しでにらみ返してくる。
（これは、あからさまに喧嘩売ってきてるな。あの賊の捕虜を取った一件を根に持ってるのか……どっちにしろ、そんなこと言ってる場合じゃないだろうに）
今にも突っかかりそうになったアルだが、一足早く、クロエが穏やかに笑って前に出る。
「ご安心ください、我々の警備許可証と身分証は人数分用意してあります。それより、そちらは『警備許可証を検める許可証』はお持ちですか？」
「何を言っている。そんなものが必要だなどと、聞いたことがない」
いかにもばかにしたように鼻を鳴らす宮廷警察に向かって、クロエは不意に真剣な表情になって身を乗り出した。
「なんですって！　知らないんですか？　それは大事になりますよ。いいですか？　同じ組織内、もしくは一般客に対しては警察は各種許可証を見せるよう要求できますが、軍組織に対して許可証の呈示を求める際には七日間以上の講習を受けて『許可証を検める資格』を取る必要があります。この資格を持った者が最低使用の三日前に警察署長の署名つきの許可証を申請し、それを呈示できないかぎり、こちらからも警備許可証をお見せすることはできません！」
（うわあ、ひどい言い訳）
横で聞いているアルのほうが、ちょっと遠い目になってしまう無茶な理由だ。
シャリオの計画表によると、ここは『クロエの話術で言いくるめる』と、簡単に書いてあったのだが、それにしたって内容が酷くないだろうか？

アルは必死にクロエに目で合図を送ってみるものの、彼はちっとも動じなかった。
そのうえ、宮廷警察の男はクロエの言い分に真っ青になって身を乗り出す。
「おい……冗談だろう。冗談だよな？……まさか、それ、本当のこと……なのか！」
「本当ですよ。今すぐ上司におうかがいを立てるべきです。その間は、わたしたちがここを見ていますから」
クロエが重々しくうなずくと、宮廷警察の男は浮き足だって何度もうなずいた。
「ありがとう、親切だな、あんた！」
真顔で礼まで言い、彼は大急ぎで仲間を連れて控え室を出て行ってしまった。
アルはすっかりあきれ果てて相手を見送り、あらためてクロエを振り返る。
「なんだ、ありゃ。あんなので納得させるとか、変な魔法でも使ったんですか？」
アルが訊くと、クロエは尊大に腕を組んで答える。
「奴らはあれが普通だ。警察では紙切れ一枚がなかっただけで出世の道が閉ざされたりするから、誰もがくだらんことに必死というわけだ。あ、ちなみに『許可証を検める許可証』がいるのは本当だからな」
「ば、ばかばかしい……！　って、あれ、そもそも、俺たちの警備許可証ってあるんですか？」
「うむ。わたしが持っている。しかし、少々時間が足りなくて雑な作りなので、あまりはっきり呈示はできん。こういう場合はなるべくごまかすほうがいいな！」
雑な作り。それって、偽造したってこと……なのだろう、多分。

色々ギリギリのような気はするが、確かにクロエはある種の専門家ではあるようだ。
すなわち、話術と偽造。悪い言い方をすれば、やり手の詐欺師の技能だ。
（正義の執行の方法が詐欺……いいのかな、それで？）
アルがまだちょっと呆気にとられている間に、リシャールが声をかけてくる。
「クロエ、アル。お話はいいんだけど、今のうちに、配置についちゃいたいんだ。いいかな？」
「あ、了解です。ばらばらに警備の要所を見張って式の開始ぎりぎりに控え室へ集合、ですよね。フラムは裏宮殿担当で……隊長とレアは計画表にも入ってなかったんですが、いつごろこっちに来るんですか？　聞いてます？」
アルが問うと、リシャールは少し困ったように首を傾げた。
「そこは僕も聞かせてもらえなかった。でも、隊長にはいつだって隊長の考えがあるから大丈夫だよ。知らせてもらえなかったことは、僕らが知らないほうが上手くいくところなんだ」
「そういうもの、ですか」
まあ、確かに秘密を守るには味方から、という話もある。
シャリオにはよほど秘密に動きたい何かがあるのかな――などと考えながらも、アルは頭の中にシャリオとレアの抱き合った姿が浮かんでくるのをぶんぶん首を横に振って阻止した。
……どうも、未だにあのふたりを思うと妙な気分になるのが止められない。
（俺、こんなときなのに元気だなっていうか、能天気だなっていうか……！）
ぐったりするアルに気づいた様子もなく、クロエは髪を整えながら前に出て叫んだ。

「ようし、では、全員配置につくぞ！　裏の宮廷へ通じる扉と、外部からの侵入可能経路から、絶対に目を離すな！」

一方そのころ、噂のシャリオとレアはサントール砦に居る。

宮殿から響き始める管弦楽を遠く聴きながら、シャリオは胸に提げた首飾りの位置を確かめ、帽子を完璧にまっすぐにする。腰には、サーベルと愛用の銃。

表から行ったら一発で止められるが、彼はそもそも表から王宮へ行くつもりがない。

「そろそろ時間です。大丈夫ですか？――顔色が少し悪い」

寝椅子に腰掛けたレアを振り返って訊くと、彼はびくりとして背を伸ばした。

そしてすぐに立ち上がり、蒼白い顔に穏やかな笑みを浮かべてシャリオを見つめる。

「少し緊張しているだけです。大丈夫。――今まで、本当にありがとうございました」

今までとは打って変わって物静かな言いように、シャリオは胸に手をあてて一礼した。

こちらもまた、少し不自然なくらいに紳士的な所作だ。続く声も、どこかうやうやしい。

「あえて礼を言われるようなことはありません。これが、わたしの任務ですから」

「……はい。でも、星石についてもずいぶん講義してくださって。私、ここに来たときくらいの知識でフィニステリアとリシェスの平和を守ろうなんて、無茶でした」

少しの自嘲と、限りない感謝を含んだ声音に、シャリオは相手に言うべき言葉を探す。
レアが何を言いたいのか、シャリオには大体わかっていた。
わかっていたが、わからないふりをしなくてはならないのも、わかっていた。
だから平然と姿勢を正し、レアの顔を真っ向から見つめる。
いつもは凛とした少年か青年じみて見えるその顔が、今日はエトワール隊の軍服を着ていてもずいぶん大人びた少女の……いや、女のものに見えるのは、気のせいではない。
「いいえ、姫君。あなたはもっと自分の身の上をはかなんでもよかった。あなたはフィニステリア貴族であると同時に遠く古王国アルタリアの血を受け継ぎ、星石を操る力があるがゆえに、事実上の敵国に嫁ぐのですから」
シャリオは深い自戒をこめて、静かに告げる。
――そう。冗談ごとでもなんでもない。
『エトワール隊のレア』こそが、今回リシェスの王子と結婚する姫君なのだ。
しかし、なぜ？　その理由は、国内でもほんの数人しか知らない。
レアは、本物のフィニステリア王家の血を引く姫君は、シャリオの台詞を聞くと、なんともいえない切ない顔で笑った。
「それは逆です。ただ単に、人質みたいにしてリシェスに嫁ぐよう命じられたのだとしたら、私、もっといじけていました。でも、そうじゃなかった。自分にはなんの取り柄もないと思ってひねくれて、引きこもって占いばかりやっていた私のところに、あなたが来た。――私の力

で、この国と、リシェスを救ってくれるように、と。私にはその力がある、と。……あの言葉、私のことも、救ったんです」

最後は大事に囁くように言って、レアはそっと自分の両の指先をあわせ、目を伏せる。

そうして彼女が思い出しているのは、レアとシャリオが最初に出会った日のことだ。

強い雨の日だった。

急ぎの馬車を走らせてやってきたシャリオに、レアの父の館は騒然となったものだ。

――急の客なんぞ、断れ。……何？　エドモン中将？

その名を聞いた途端、レアの父親は真っ青になって開門を命じた。

――あの男には、あの方には、逆らってはいかん。

そんな父の態度が珍しくて、レアは大事な占いの途中だというのに、好奇心から螺旋階段を下りていった。そのとき、彼女は見たのだ。

美しい軍服から雨水を滴らせながら玄関広間に立つ、夢のような青年の姿。

彼はこのうえなく真剣な顔で、レアに星石の首飾りを差し出した。それに触れると辺りはうっすらとした光に包まれ、父はますます青ざめ、シャリオは告げた。

――突然で驚くでしょうが、あなたにはフィニステリア王家の血の他に、古王国アルタリアの血が混じっている。あなたの血を、その血が持つ特別な力をわたしにください。

――この大陸の平和のために。古王国アルタリアの、星石の力を制御する者。《護星官》になって、この国の平和を守ってください。わたしと、共に。

レアは一度目を閉じて過去の記憶を振り払い、今のシャリオを見つめてほんのかすかに笑う。
「私、社交界に出ていない、ひねくれものの姫君でよかった。おかげで周囲に顔を知られずに、あなたのそばに居られました。あなたの下で結婚式を反対するひとたちの目をくらますのと同時に、護星官として学ぶことができた。……あとは、私の任務を果たすだけ。古くからリシェスが持っていた『絶望』の星石を、正しい持ち主に返還して、一生石の力が暴走しないよう守っていくこと。……私の運命の石、渡していただいていいですか？」
問われたシャリオはすぐに小さく首を横に振った。
「これは危険な星石です。今のあなたはこの力も制御できるでしょうが、それでも負担には変わりない。最後の最後に渡します。……行きましょう。地下通路を通っていけば、宮殿の裏に出ます。そこで直前に何も知らせず派遣した侍女が待っていますから、着替えを。武器はぎりぎりまで持っていてください」
「わかりました……では、最後にひとつだけ、いいですか？」
レアがゆるやかに近づいてきて、シャリオの顔を見上げる。真剣みを帯びた彼女の瞳が近い。その瞳が真摯であればあるほど、シャリオは意識して声を冷淡にする。
「それは、今言わねばならないことですか。結婚式まで、もうあまり時間はありません」
「わかっています。でも、今しか、言えないことです。私……」
途中まで言って、何かが喉につまったかのようにレアの声は途切れた。
最初に出会ったころより、ずいぶん美しくなった顔がかすかにゆがむ。瞳と唇が震えている

のがわかる。そこにあるのは、苦しみ。
結果はわかっているだろうに、それでも言わずにはいられない悲しみ。
「本当は、あなたと」
どうにかはき出された言葉。
――抱きしめればいいのかもしれない、と思った。
腕を伸べて彼女を抱きしめ、すぐに手を放すのは簡単なことだ。
だが、そのわずかなぬくもりが、どれほど彼女を傷つけることだろう。シャリオは彼女を認めている。その能力と心根に驚嘆している。けれど、この気持ちはおそらく敬愛というもので、彼女の求める心ではない。
そのくらいは、わかるようになった。
ここまでくるのに、ずいぶん長くはかかったけれど。
自分が取るべき態度は、冷たく、近寄りがたく、何を考えているのかわからない、いかにも貴族的なそれだ。他にはない。
シャリオはレアに触れようともせず、平静で自信に満ちた声で念を押した。
「わたしたちは同志だ。志は常に、共にある。星石を護り、この世界を護ること。この石は、けして政治的な取引に使われてはならない。――そうですね？」
あなたとわたしは対等である。しかし、けして手は取り合わない。
言外に告げられたそのことに、レアは気づいたのだろうか。必死だった顔が一瞬だけ泣きそ

うにゆるんでから、すぐににっこりと少女じみた笑顔に変わる。
「はい。……私、行きます」
「行きましょう。警備にはわたしの信頼できる者たちをおきました。あとは……手を出せる人間はいないはずです。結婚式に列席している人間たち以外には」
平静に言ったつもりが、最後だけわずかに声が鋭くなったのが自分でわかった。
列席している人間、と言ったときに、どうしてもソールの姿が脳裏をよぎったのだ。
レアは自分の感じた不安に気づいただろうか、と見ると、彼女は少し目を伏せて顔をしかめている。おそらくは、自分の心の痛みに耐えているのだろう。
「――結婚式に列席するのは、王族と大臣と神官たちだけでしょう？　このうえなく安全です。ソール王子も結婚式には反対かもしれませんが、絶望の石がここにあるとは知らないはずだし。まさか、結婚式の最中に無茶はしません」
シャリオが何かを言う前に、レアは妙に明るくくすくすと笑って顔を上げた。
まるで大事なものを吹っ切ろうとするように。
シャリオはそれ以上何も言わず、丁寧な仕草でレアを導きながらサントール砦の奥へと向かう。執務机の後ろの本棚の一部を押すと、それはくるりと回転して扉になった。
さらにその向こうにあるのは、薄暗い踊り場。
そこには、いつもどおりの武装をしたフラムが、角灯を片手にたたずんでいる。
「時間ぴったりですね、閣下？」

「貴婦人の前だ。無駄口はいらん」
素っ気なく言って真ん中にある階段をのぞきこむと、ぽつ、ぽつと明かりの灯された地下通路が見える。軽やかな歩調で階段を下りていくフラムの背を横目に、シャリオは告げる。
「前にもお教えしたように、ここを抜けていくと庭園管理のための地下通路に。さらに行くと宮殿の裏に繋がります」
「はい、了解です。――短い間だったけど、エトワール隊、楽しかった。窮屈なドレスを着ることもないし、周りは美男子と気楽なご婦人方ばっかりだし。そういえば、アルだけはちょっと毛色が違いましたね。あの子は、まだ、何も知らないんでしょう？」
レアの問いに、シャリオは地下通路を歩きながらアルのことを思い出した。
かすかな笑みが浮かびそうになるのを、そっと唇を引き結んで消し去る。
「基本的なことは話しましたが――あれは、知らないままでいるのが一番幸福かもしれませんので。さあ、こちらへ」
長い通路を抜けて、ぎりぎりと音を立てる歯車の横をすり抜ける。
ふたりはやがて、アルとシャリオが夜間警備を行った、宮殿の裏へと入りこんだ。
「相変わらず埃っぽいところですね」
レアの正直な感想に、シャリオは丁寧に答える。
「埃っぽいのは埃っぽいので、便利なところもあるのです」
「便利？　それってどういうことですか」

答えが意外だったのか、レアはびっくりしたように訊いてきた。
いくら軍事教練も形だけは受けてもらったとはいえ、このあたりは姫君だ。つまり、普段から埃が積もっていれば、埃を踏んで乱した侵入者がいればすぐにわかるということです――そう言おうとして、シャリオは立ち止まる。
そこは正面と右側、ふたつの扉に面した、狭い階段のある踊り場だった。
高い位置にある小窓から午前の光が零れ、辺りに埃が舞い散っているのがわかる。
以前の裏宮殿探索でも、シャリオたちが通らなかったはずの階段。
そこに、明らかに踏み散らされた埃が見えた。途端に警戒心が全身に満ち、視界が妙に鮮やかになる。フラムがちら、とシャリオの様子を振り返り、すぐに彼の緊張を見て取った。
フラムは無言のまま、ふたりをかばうようにして銃を抜く。
「後ろへ！」
シャリオは鋭く叫んでレアの腕をつかみ、自分の背でかばう。
半秒遅れで、フラムが目の前の小部屋の扉を蹴り開ける。
「動くなよ」
どことなく浮き立った声で言い、フラムは銃を構えた。
小部屋の中では黒服の男たちが、こちらに向かってすでに銃を構えている。
シャリオはすかさず自らも銃を抜いたが、とっさに躊躇し、後ろを振り返った。
その瞬間、こちらを向いた銃口が見える。

「……この数相手では、いくらお前たちでも命はない。その女を渡せ」
シャリオたちの背後の階段下にも、銃を構えた男たちの集団がいる。数は見えるだけでも四、五人。格好は例のごとく黒服で固めていて所属はわからないが、ただの素人ではないのもいつも通りだ。フラムは瞳をぎらつかせ、やけに楽しげに言う。
「閣下ー。ここ、俺に任せちまっていいですよ？」
「ばかは死んでから言え」
シャリオは吐き捨て、ざっと脳内で宮廷裏の地図をひっくり返し、レアに鋭く囁いた。
「右の扉へ、走りなさい。先は狭い廊下だ、明かりもないが、とにかくまっすぐ。突き当たりの部屋の暖炉の向こうへ行けば、大広間の控え室だ。エトワール隊の者がいる。事情を言えば、奴らならどうにかします」
「――シャリオ様、私も戦います」
まだ軍服姿のレアが、思い詰めた声を出す。
シャリオは不意に怒りのようなものに捕らわれ、瞳を燃やして叫んだ。
「自分の使命を忘れるな！　行け！」
「っ……！」
使命、と告げられると、レアは目を瞠ってわずかに涙ぐむ。
シャリオの言葉の鋭さに、そして、それ以上に彼が今までなしてきたことに、『使命』というものの重さが彼女を打ったのかもしれない。

それ以上は何も言えず、レアは必死に右側の扉にとりついた。
扉に鍵はかかっていない。無事に押し開けると、シャリオの言った通り、暗くて細い通路に出る。ざっと覚えこんだ宮廷の構造を思い出し、レアは懸命に走り出した。
背後で何発か銃声が聞こえ、そのたびに心臓が跳ね上がる。
走って戻りたい気持ちを、死にものぐるいで押し殺して先へ進む。
自分にできるのはそれだけだ。些細なこと。それでも、自分だけにできること。
（突き当たりの部屋の、暖炉の中をくぐったら、控え室！）
シャリオの信頼したエトワール隊の面々の顔を思い出すと、少しだけ心が安まる。早く彼らの顔を見たい。彼らの声を聞きたい。
そのことだけを希望にして走り続けると、急に目の前に壁が迫っている気配を感じた。
ほとんどぶつかるみたいにして、突き当たりの扉に取りつく。
ここは鍵がかかっているだろうか、と、ポケットに手を突っこんで、あらかじめシャリオから渡されていた鍵を引っ張り出そうとする。
けれどその前にためしに取っ手を回すと、扉はあっさり開いてしまった。
「あ……！」
小部屋の中によろめき入る。暖炉上についた小さな明かりだけでも、今まで闇の中を走ってきた目にはだいぶ明るい。
目を細めて、とにかく暖炉に歩み寄ろうとする。

その横から、いきなり声がかかった。
「待ってください！　どこへ行かれるんです」
「……!!」
息を呑んで声のほうを見やると、きらびやかなドレス姿の貴婦人だ。
おそらく、侍女なのだろう。そういえば、裏の宮廷でドレスに着替えろと言われていたのだったと思い出し、レアは足早に彼女へと近づいていく。
「遅れてすみません……ここで着替える手はずになっているんですが、その前にエトワール隊に連絡を入れたくて。誰か、近くにエトワール隊のひとは居なかったでしょうか。向こうで賊が出て、隊長たちが応戦している。増援がいるんです！」
「増援は無理だと思いますわ、レア。いいえ――エルネスティーヌ・ダニエル・ラクロ。エトワール隊にかくまわれていた、ラクロ侯爵家の娘さん？」
年配の侍女が不意に妖艶に笑って発した言葉に、レアは思わず目を瞠る。
「……？　あ……あなた、まさか……！」
そう、目の前に居る侍女は、実はよく見知った人物だった。いつもは黒いヴェールの向こうに隠されていた顔。年中サントール砦にやってきていた、未亡人。
ベルクレール伯爵夫人だ。
彼女は華やかに微笑んだまま、背後に隠していた手を前に出す。
そこには華麗な銃が握られていて、銃口はまっすぐレアの胸の真ん中を向いた。

「……!?　なんのつもりです、私は――」

「女だ、というのはサントール砦での観察でとうにわかっていましたわ。エトワール隊、どうも怪しいと思ったら案の定。お飾り部隊だなんて、大嘘じゃありませんの。みなさんなかなか尻尾をつかませてくださいませんでしたけれど、女の情報網を甘く見られては困りますわね。こんなところに事情も知らされずに侍女がいきなり呼ばれるだなんて、何かあると思って入れ替わったら大正解。ねえ、姫君。どうしてエトワール隊なんかに隠れていらしたの？　結婚を邪魔されるとでも思ったからかしら？」

（落ち着いて、私。理路整然と、相手を打ちのめさなくては。こいつを引きずり込めるくらいでなくては、これからの苦難を乗り切ってなんかいけない）

目の前に銃口がある恐怖を無理やりに押し殺し、レアは毅然と相手をにらみつける。

「あなたは……王家に恨みでもあるのですか？　それとも、シャリオ様に？　どちらにせよ、ばかなことです。私がここで死んだら、大問題ですよ。あなたは処刑され、リシェスとフィニステリアは戦争になる」

鋭いレアの声に、ベルクレール伯爵夫人は不快そうに片方の眉を上げた。

そして、レアに負けず劣らず険しい顔つきになって、吐き捨てるように告げる。

「ずいぶん志の低い人間と思われているのですわね、私。よろしくて？　私の祖国はリシェスよ。そして、今私を動かしているのも、リシェスへの愛国心。戦争、いいじゃありませんの。むしろ、そうあるべきだと思いません？　婚姻関係なんか結んだって、フィニステリアが紳士

的な対応をするわけがない。あの古王国アルタリアでさえ、なんだかんだ言って呑みこんでしまった国ですのよ。結婚だのなんだのでリシェス国民の人気を取った後はどうせ次々にフィニステリアに有利な要求を出してきて、結局はリシェスも属国化するんでしょう？――私たち、リシェス愛国者同盟は、それぐらいなら戦ったほうがマシと思ってますのよ」

「リシェス愛国者同盟……？　あなたが？　しかし、ベルクレール伯爵家は、確かにフィニステリアの貴族のはず……」

思いの外はっきりとした相手の主張に、レアは虚を突かれて言葉をなくす。

その隙に、婦人はさらにレアに近づいた。

少女の白い額を銃口でこづき、彼女はにやりと笑う。

「本物のベルクレール伯爵夫人は、れっきとしたフィニステリア貴族ですわよ。だから入れ替わる意味があるんじゃありませんの。宮廷にも出入り自由だし、みんなが私を警戒しない。細かい容貌はヴェールの下で、夫の死で引きこもっていた元の夫人の顔を知る者はほとんどいない。本物は同志がリシェスにおつれして、下町でそれなりに楽しく暮らしてもらっているはずよ。……とはいえ、確かに私が姫君を殺したとなったら後が面倒ですわね」

そこまで言って、偽のベルクレール伯爵夫人はレアを暖炉のほうへと押しやった。

「じゃ、こうしましょ。幸い、あなたは今、『エトワール隊隊員のレア』のままですわ。そのまま自分の銃を握って、広間に行ってもらいましょうか」

思いも寄らない相手の要求に、今度こそ恐怖がぐぐっとせり上がってくる。

「私に、何をさせる気ですか」
乾ききった唇をどうにか湿してレアが問うと、ベルクレール伯爵夫人は彼女の耳元に囁いた。
「人質を取ったふりで、大立ち回りをするのよ。その中で、あなたは『レア』として宮廷警察に殺される。結婚式は台無し、エトワール隊の面目は丸つぶれ、宮廷警察の評判は上がって、私はどさくさに紛れて逃げさせていただくわ。ああ、そういえば宮廷警察はあらかじめ抱きこんであるから、安心してね？」
「私、そんなことするくらいなら――！」
「するくらいなら、どうする気？」
あざける声音。ばかにするな、と思う。レアだって必死なのだ。
相手は強者に見えるが、女だ。どうにかして武器を奪って――と考えているところへ、ベルクレール伯爵夫人の甘い声が響く。
「そうそう、念のために言っておきますけれど。今頃シャリオは、地下通路で宮廷警察に囲まれてますわよ。私、特別な合図で彼の様子がわかるんですの。私の合図ひとつで、彼は殺される。けれどもしもあなたがいい子にしてたら……命だけは、助かるかもね？」
シャリオ。
その名前がレアの胸に酷く深く刻みこまれる。
こんなの、はったりだ。絶対に。理性ではそう思うのに、心は酷く乱れて目眩がする。
レアは言葉を失い、ほんのかすかにあえいだ。

同時刻。大広間控え室にて。

「君たち……待ちたまえ。ぎりぎりに来たあげく、そこで王子と姫をお迎えするつもりかね」

「そうですけど、何かまずいですか」

アルがしらじらしく訊くと、侍従は怒りと興奮でじわじわと顔を赤黒くしながら言う。

「まずいどころか、常識外れにすぎる！　それでも近衛か？　まず見た目が美しくない！　まっすぐ、等間隔に、ここと、そこと、あそこと、立つべき場所が違うだろう！」

「美しさなら大丈夫だと思います。みんな、どこに立っていようと見た目は相当ですし」

「阿呆、そういう、問題では……」

侍従は歯がみをしながら改めてアルの姿を眺め、なんとなく口ごもって黙りこんでしまう。正装に身を包んだアルは、確かにいるだけでまぶしいほどの青年士官なのだ。

「……まあよい。とにかく、何か間違っても剣は抜かぬようにな」

侍従は言い、いちいちアルたちの剣の封印を確かめてから去っていく。

（……よし、これで隊長の指示した通りだな）

アルはしれっとした顔の裏で思い、さりげなく控え室の様子を確かめた。

ここは本来のエトワール隊が、お飾り警備をする予定だった場所だ。

この先の大広間には劣るにせよ、天井画や山ほどの王族の肖像で飾られた美しい室内に、華やかな装いの紳士、淑女がずらりと並ぶ。
ぎっしりと居並んだ客の数に対して、警備の人数はアルたちエトワール隊が四人。
宮廷警察は廊下や庭にはやたらと並んでいるが、ここには二人しかいない。
アルがエトワール隊員たちと目を合わせると、さっきまで宮殿のあちこちに散っていた面々が軽く目配せを返してくる。
（今のところ、王子は無事、怪しいところも特になし、か。……最後まで変なことにならないといいな。万が一ここで何かあったら、これだけの人数で全員を守るのは大変だ）
「あらあ、アル！　こんなところにいたのねえ。綺麗だわ、まるでお人形さんみたい！」
考え込んでいるところへどこかで見たような貴婦人に声をかけられ、アルは仕方なく視線をやった。
「あー、光栄です。で……誰でしたっけ、奥様は？」
対する貴婦人は、美しい目尻にわずかな皺を作ってにっこり笑う。
「私よ、ベルクレール伯爵夫人。喪服でないから気づかなかった？」
「ああ、覚えてます！　今日はもう喪は明けたんですか」
アルがちらちら辺りに視線をやりながら答えると、ベルクレール伯爵夫人は笑みを深めて顔を寄せてきた。
「実は喪はとっくに明けていましたの。あとは気持ちの問題。だからいっそ、晴れがましい席

で黒を脱ぎ捨てようと思って。——でも、肝心の姫君の到着が遅れてるんですって？」

「……まあ、ちょっと遅れ気味ではあるみたいです」

ごまかしまじりに言ってみたものの、アルもそこは不安に思っていたところだ。

改めて耳を澄ませ、辺りに注意を払ってみれば、周りからもそんなような囁きをひとつ、ふたつ拾うことが出来た。

「それで、姫君はどちらに？　ラクロ侯爵のお嬢さんと聞いたが……」

「どうやら遅れているようだな。それにしても、実際どのような方なのだ。誰も知らんのか」

王族に遠慮して小声ではあるが、姫のことを不審に思っている者は多そうだ。

（そりゃ心配にはなるよな。俺だって心配だもん。護衛しなきゃならないのに、顔も知らないし、どの経路でいらっしゃるかもわからない。隊長はわかってるみたいだったけど、その隊長もここにいないし。もうちょっと問いただしとくべきだったかな）

かすかな不安で心が陰ったとき、王宮付属聖堂から重厚で華やかな鐘が響いた。窓硝子をわずかに震わせるほどのその音は、結婚式の始まりの合図のはずだ。

しかし、鐘に合わせて華やかに開くはずの扉は閉まったままだ。

やはり何かあったのか。かすかにざわつく雰囲気の中で、アルはふと、ベルクレール伯爵夫人の後ろから、ほっそりとした人影が現れたのを視界にとらえた。

「あっ、レア！　隊長は？　一緒じゃないんですか？」

少々ほっとしてアルが声をかけるものの、レアは答えない。

青ざめた顔のまま、ちらりと控え室の扉のほうを見やる。
それとほとんど同時に、侍従の厳かな声が響いた。
「リシェス王国第一王子、ヴィンセント・オブ・リシェス様のおでましでございます」
彼の声を合図に、紳士淑女たちはからくり人形みたいにいっせいに頭を下げる。
ざわめきもぴたりとやんで、不思議な圧迫感の中でアルも思わず軽く頭を下げた。
間を置かず、静かな衣擦れの音が耳を打つ。
赤い絨毯の上をとらえるアルの視界を、まずは着飾った男の派手な半ズボンと絹の長靴下、宝石を惜しげもなく縫い付けた踵の高い靴に、山ほどの小動物の毛皮を縫い合わせたケープがよぎっていく。……これが、リシェスの王子なのだろう。
彼が目の前を通り過ぎたのはほんの短時間のことだ。あとは控え室の奥にある扉がかすかに軋む音がして、周囲がわずかに明るくなった気がした。
あの、鏡だらけの大広間へ向かう扉が開かれたのだ。
（このひとが無事にあっちの大広間に入ったら、次に姫君だ。ふたりが中に入れば、あとはこの扉を護ってれば大丈夫――ってことだったよな？）
アルは頭を下げたまま考えた。
シャリオと一緒に行った夜間警備のときは、大広間の鏡の裏に隠し通路があるのを教えてもらった。万が一にも賊があの通路を知っていたら危険きわまりないが、そこは昨晩のうちにがっちり封印したうえフラムが担当する計画だったはずだ。

だからきっと、大丈夫。警備の第一段階は、もうすぐあっさり終わってしまう。

――でも、なんだろう。

少し前から、首筋のあたりがぴりぴりする。

この場所は危険だ。誰かがひどい悪意を抱いている、と、アルの直感が囁いている。

しかし、一体誰が？

それと、他にもひとつ、さっきからどうにも腑に落ちないことがある。

ついさっきの、レアの出現場所だ。鏡の広間への扉が閉ざされていたからには、正規の出入り口はひとつだけ。それはアルも他の隊員も見張っていた。それで気づかなかったのなら、レアは裏の宮殿を通ってきたのだろう。アルからすると、別にそんなことをする理由はなさそうに思えるのだが――。

答えが出る前に、誰かが人々をかき分けて前に出る気配があった。

（賊か？）

アルはとっさに警戒し、頭をわずかに上げて気配のほうに視線を投げる。

ところが、そこにいたのはレアだった。痛いほどに真剣な面持ちで、まっすぐ扉のほうへ向かっている。

怪訝に思って、アルはちらと他のエトワール隊にも視線を配った。

クロエ。リシャール。ラウル。みな、レアの行動には気づいているようだ。レアに視線を配りつつも、その行動をさえぎろうという様子はない。

ならば自分も動くまい、とアルが思ったとき、いきなりレアが赤絨毯の上に飛び出した。
レアはドレス姿の貴婦人の腕をつかんで引き寄せ、その脇腹に銃を突きつける。
「なっ！」
目を丸くしたアルの前で、レアは懸命に叫んだ。
「おとなしくしろ！　この女を殺されたくなければ、みんな、控え室の外に出るんだ！」
人々は一瞬何が起こったのかわからず、戸惑った様子で互いに視線を交わす。
そのとき、ベルクレール伯爵夫人がアルの横で鋭い悲鳴をあげた。
「い……いやあああ！　賊よ！　姫君が、賊に！」
あっという間に控え室は騒然とし、人々がどっと出口のほうへ押しかける。
黄色い悲鳴を上げる貴婦人たち。それをどうにか導こうとする男。しかし、誰もが混乱していて、どこへ向かっていいのかすらよくわかってはいない。
宮廷警察のふたりは大慌てで銃を抜こうとしたものの、客たちの渦に巻きこまれて、何もできないうちにぎゅうぎゅうと出口へと押されていってしまう。
「退避！　落ち着いて退避してください！　殿下っ、身を低くして、こちらへ!!　壁際に！」
アルはとにかく叫びながら人の波をかきわけ、どうにかリシェスの王子に近づこうとする。
鏡の広間へ続く扉の前でぽかんとしていたリシェスの王子は、アルの声に反応して慌てて身をかがめかけたが、途中でなぜかためらった。
育ちの良さが見える顔で、それでも十歩ほど離れた赤絨毯の上に立つレアを見つめる。

「君は……」
「黙れ！　下手に動いたら、こいつを殺す！」
レアが貴婦人につきつけた銃をこれ見よがしに動かして見せると、リシェスの王子はゆっくりと後ずさっていった。すかさずアルが王子の前に立ち、彼を自分の小柄な身体でかばう。
「殿下、身体を小さくしてください。何があっても、俺たちがお守りしますから」
アルがレアをにらんだまま鋭く囁くと、リシェスの王子はどこか複雑な表情でうなずいた。
そこへ素早くクロエが歩み寄り、抜け目なく辺りに視線を配る。
「アル。殿下はわたしがお守りする。お前はいざというとき、動け。一番素早いからな」
「わかりました。殿下のことはお願いします！」
小声で言葉を交わす間にも、レアは人質をとったまま、じりじりと鏡の広間へ近づいていく。
（ほんと、どうしちまったんだよ、レア！　こんなことしたら、殺されるに決まってるのに）
なんともいえないもどかしい気持ちがわき上がり、アルは思い切り歯を食いしばった。
確かにこの結婚式を成功させようとは思ったし、今も思っている。王子と姫を守り、いざというときには敵を排除しようと心に決めていた。でも、その敵が仲間だなんて少しも予想していなかった。
今、こうしていても、レアのことで思い出すのはのんびりとした思い出ばかりだ。
いつもサロンの片隅で占い札をめくっていたレア。ほんのりと優しい顔をしていた彼。不思議に冷たくてきめのこまかい手。

そして――シャリオにすがるようにして顔を伏せていた、彼。

（あと、隊長は何やってんだ、こんなときに！）

そのとき、控え室の入り口のほうから、数人の男たちの声が響いてくる。

「宮廷警察だ、賊め、観念しておとなしくしろ！　ご婦人を放せ！」

「くそっ、こんなときばっか動きが速いな！」

アルは思わず舌打ちをして振り返る。

控え室内はまだ外へ出られない貴族たちでいっぱいだ。隣の部屋へ逃れようとする人々を押しのけ、宮廷警察の男たちが室内へ入ってこようとしている。その数はざっと十人近く。

さっき押し出された宮廷警察が呼んできたのか、この騒ぎを察知したのか、とにかく彼らは殺気立っている。もとより彼らはエトワール隊にいい印象なんて持っていないのだ。レアがエトワール隊の軍服を着ていたって、当然容赦はしないだろう。

（とにかく、奴らより先に俺が動くしかない！）

そう心に決め、アルは思い切って身を低くし、床を蹴った。

もとよりアルは周りより小柄で、そのぶん身軽だ。そんな自分の利点を最大限利用し、彼は長身の貴族たちのスカートや半ズボンの間をすり抜けていく。

色とりどりの絹が目の前で揺れ、人々の動揺や恐怖の叫びが耳をかすめる。

栗鼠かイタチかの小動物みたいな素早い動きは、ほとんど誰の目にも止まらないくらいだった。興奮した人々はそもそも注意力散漫になっている。

アルはそのまま人々の林の果てに辿り着き、貴婦人のスカートの陰からそっと顔を出した。
するとそこには、遠巻きにされたレアと人質の姿がある。
（レア、ちょうど宮廷警察のほうに気を取られてるな。よし――一瞬で、決める！）
瞬く間に決断すると、アルはできるかぎりの速度で人混みから駆けだした。
誰かの視線を引く前にレアに駆け寄り、ひと思いにその脇に当て身を食らわせる。
「あっ……！」
死角から隙を突かれたレアは、一体何が起こったのかわからなかったのだろう。呆気にとられた顔で息を詰め、けたたましい音を立てて鏡の広間へ続く扉に叩きつけられる。
その隙に、アルは人質になっていた貴婦人を彼から引きはがし、自分の後ろにかばった。
「もう大丈夫。あとは我々がどうにかしますから、下がってください」
アルは人質を安心させるためになるべく明るい声で言い、そのままじりじりと後ろへ下がる。
そうしている間も、視界の中心にはレアの姿を入れて外さない。
アルはそのまま、抑えた声でレアに訊く。
「――レア。ほんとに、どういうことなんだ？　まさかだけど……最初からこの結婚式を失敗させるために、エトワール隊に入りこんだのか？」
緊張と警戒のために、アルの声は固くなる。レアはアルの当て身の衝撃からまだ完全には立ち直れないのだろう。王家の紋章の巨大な金の板をはめこんだ扉にすがり、苦しげに顔を上げてアルと視線をあわせる。

その瞳はわずかに潤み、アルを懸命に見つめてくる。そう、ほとんど、すがるように。

――助けて。

そんな声が聞こえた気がして、アルは目を瞠った。

「……レア？」

ためらいがちにその名を呼ぶ。ほんの一瞬だけ、背後に護るべき人々がいるのを忘れて、レアのほうへ一歩踏み出す。

そうしてアルが何かを言う前に、レアは少し不自然にびくりとしたかと思うと、唇を噛んで起き上がった。そして今度は、近くで腰を抜かしていた貴婦人の襟首をつかんで引き寄せる。

「きゃあああ！　やめて！　何をなさいますの!!」

派手なわめき声をあげたのは、よりによってサントール砦の常連だったベルクレール伯爵夫人だ。レアは唇を強くかみしめると、ベルクレール伯爵夫人の頭に銃を突きつけて叫んだ。

「今度はこの女が人質だ！　私は……私は、この結婚に、断固反対する。みんな、外へ出ろ！」

震える声で叫ぶレアに、控え室内はしん、と静まり返る。

（こんなの――おかしい）

思わず呆気にとられてしまったアルだが、すぐに強烈な違和感と怒りみたいなものが湧いてきた。胸の奥がかっとして、拳を握る。

こんなのは絶対におかしい。だって、レアは助けを求めていた。こんなの、本意ではないのだ。レアはきっと、誰かにこの暴挙を強いられている。

「レア！　止せ！　そんなことをしてもなんにも――」
「みなさん、しばし、お静かに」
不意に役者みたいな朗々とした声が響き渡り、アルの言葉を遮った。
アルが眉を寄せ、鏡の広間のほうを見やる。周囲の貴族たちも、クロエ、リシャール、ラウルもまた、同じように同じ方向を見ていた。
この声。一度聞いたら忘れられない独特の節回しみたいなものを持つ声は、第二王子、ソールのものだ。アルたちからは死角になった広間の中で、彼は言う。
「結婚式への反対からこのような騒動を起こしたのだというのなら、式は俺の責任で延期しましょう。そうして、俺と宮廷警察が彼女の言い分を聞く。これでいかがですか？」
ソールの問いに、レアはほんのかすかに震えたようだった。
しかし、すぐに声を張って答える。
「お前自らが私の主張を聞くというなら、それでいい。しかし、私の見ていないところで下手なことをしたら、この女の命はない！」
「わかりました。フィニステリア王国第二王子、ソールの名において、あなたと誠実に話し合うと誓います」
ソールの声は広間に反響して、控え室にいる者にももれなくはっきりと聞こえた。その落ち着きに、ふっと控え室の緊張が緩まる。
「大丈夫だ、ソール王子がおられる。最悪の事態にはなるまい」

「いざとなっても、あの方さえおられればどうにかなる。我々はとにかく、外へ……」

さっきまでとは明らかに違う調子になった周囲のざわめきの中で、アルは複雑な思いに駆られて突っ立っていた。

（なんだ？　ソール殿下は話を聞くっておっしゃってるのに……なんだか、すごく嫌な予感がする）

首筋がぴりぴりし、胸は黒い不安で膨らんでいく。

レアは一体どうしてこんなことをしたのか。そしてソール王子は、どうしてここまで落ち着いているのか。そもそも結局結婚式はぶちこわしになってしまったのだから、このままリシェスとフィニステリアは戦争になってしまうのだろうか？

ぐるぐると考えているアルの視線の先で、レアは不意にまた動き出した。

人質のベルクレール伯爵夫人を引きずったまま鏡の広間へ入りこみ、中にいた王族や神官たちに「早く出ろ！」と叫ぶ。続いて「こちらへ」というようなソールの声が聞こえた後、ばたん、と音を立てて鏡の広間の扉は閉ざされてしまった。

おそらく、広間の王族や神官たちは広間の隠し通路から外へ出たのだろう。

――きらびやかな広間に今残っているのは、レアと人質のベルクレール伯爵夫人だけだ。

LA GARDE ETOILE ROYALE

5 この手にある正義

「……それで？　なぜ貴様ら近衛が我々宮廷警察の前を遮るのだ。どけ！」
「どく理由がどこにあるんです。宮廷の警備は俺たちの仕事でもあります！」
アルが怒鳴ると、宮廷警察の男はこめかみに血管を浮かせて顔を引きつらせた。
レアと人質が鏡の広間に立てこもって、しばらくの後。
広間の控え室は先ほどとはすっかり様変わりしている。きらびやかな人々の姿は消え、代わりに盾となる土嚢が持ちこまれ、入り口では十数人の宮廷警察と、エトワール隊の面々がぎりぎりとにらみ合っていた。
手際悪くあちこち行き来した後にふたたび大勢になって戻ってきた宮廷警察の男たちは、額に青筋を立ててアルを怒鳴りつける。
「貴様ら役立たずのおもてなし部隊に何が出来る！　まあいい、とにかくどけ！　議会から、この立てこもり事件について、宮廷警察に『のみ』発砲許可が出た」
「発砲許可!?　何言ってるんですか、人質に流れ弾でも当たったらどうする気です!?　ソール王子は、レアと話し合ってくれるんじゃなかったんですか！」

いきなり飛び出した予想外の台詞に、アルは勢いよく噛みつく。
宮廷警察の男は宮廷警察の男で、ここで退くわけにはいかない、とばかりに懐から書類を取り出して胸を張った。
「話し合うにしても、安全な状態にしてからでないと無理だろう。幸い、ソール殿下の手際で他の客人や国家の要人は避難済みだ。人質のご婦人にはなるべく被害が及ばないよう努力する」
「努力します、っていう奴を褒め称えるのは子供相手の親だけで充分だよ！　お前ら、まさかどさくさに紛れてレアを射殺する気か!?　言っとくけど、レアは犯人なんかじゃない！」
「どう見ても犯人だろうが！　貴様、やはり元仲間だというのでかばいだてか？　そもそも、この事件自体エトワール隊の企みなのではあるまいな！――おい、貴様らも取り調べる。おとなしくこっちへ来い！」
「陛下のご命令もなしに、俺たちがお前たちになんか従うか！　いいか、もしレアが犯人じゃなかったら、この俺が、一生かかってもお前に罪を償わせてやるからな！　覚えとけ！」
「貴様……っ！　本気で黙らんと、酷いことになるぞ……！」
真っ赤を通り越して赤黒い顔色になり始めた宮廷警察を見て、クロエが慌てて飛び出してくる。彼はアルの口をふさいでにっこり笑った。
「彼が少し喋りすぎるのは、あなたと彼との運命というやつかもしれんな。恋と冒険に香辛料を加える、対立の運命！　痺れるな！……ということでここは退席する。失礼！」
（何言ってやがるクロエ、ここで退いたらレアが殺される！）

じたばたするアルを引きずって、クロエはラウルとリシャールと共に、控え室の前の間まで撤退する。そこでやっと解放されたアルは、クロエの心臓の位置に人さし指をつきつけた。

「クロエ、何するんですか！　一体これからどうするつもりで――」

「わたしが時間を稼ぐ」

「……え？」

意外な台詞に言葉を失ったアルに、クロエはかつてない真剣な面持ちで告げた。

「わたしはこれでも、詩人だった時代は話術ひとつでありとあらゆる高貴なる方々を翻弄し、しまいには自分の偽の身分を作り上げて天上の美姫と呼ばれた姫君との結婚寸前まで言った男だ。他にもそれなりに恥ずかしい経歴があるが、その中でももっとも地味で誇らしい任務として奴らを煙に巻いてみせるから安心しろ。その間に、レアのことは任せた」

「……ありがとう。やっぱりちょっと詐欺師っぽいけど、頼りになりますね！」

「詐欺師っぽい、は余計だ。詩人は常に夢をみせるのではなく、醒ますものなのだから――」

横で浸っているクロエはよそに、アルはめまぐるしく考える。

（発砲許可が出たなんてなったら、もう猶予はない。俺たちは、武力行使以外の手でどうにかレアの真意を聞かなくちゃ。――レアが、殺される前に）

こんなときせめてシャリオが居れば、と痺れるような焦燥が生まれる。許可証云々は、シャリオが出てきてごり押しすればどうにかなるのじゃないかとも思えるし、たまに憎たらしいほどのあの冷静さを見て安心したい。

「……ええい、考えてるより行動だ。リシャールかラウル、どっちかはここでクロエの加勢に残って、どっちかは俺と一緒に行きましょう！」

がば、と顔を上げてアルが言うと、リシャールとラウルは互いに顔を見合わせた。

その間にどんな視線のやりとりがあったのか、すぐにリシャールがきらきら光る瞳でじっとアルを見つめてくる。

「行くっていっても、どこに行くつもりなの？」

「とりあえず、屋上かなって思ってます。俺はとにかく、レアがこんなことをする奴だとは思ってません。多分――あの感じだと、誰かに脅されてるんじゃないかな。それで、仕方なくやってるんだ。その、レアを脅してる誰かは、今もあいつを見てるかもしれない。だから、そいつの目を盗んで、どうにかレアと話をしたいんですよ」

「脅されている、かあ。その可能性は確かにあるね。でも、どうしてそれで屋上になるの」

「だって、正面扉をぶち破るわけにはいかないし、今は宮殿の裏も封鎖中でしょう？　こうなったら、屋上から紐でも垂らしてですね、窓か何かからそうっと手紙を放りこむんですよ。しかも、レアにしか読めない暗号で書いたやつを」

考え考え説明している間に、アルの頭の中では明確な案がまとまってくる。

対するリシャールは、いつになく真剣な面持ちで薔薇色の頬に指を添えて考えこんだ。

「うーん、ずいぶん思い切った案だなあ。実現できたとしたら、確かにみんなの意表は突くだろうけど……暗号っていうのは、解読方法をお互いが持っている場合にのみ使える手だよ？」

「……それはそう、ですね。ええっと、エトワール隊専用の暗号とか、ありません？」

ダメで元々の気分で訊いてみると、リシャールは困った笑顔で肩をすくめる。

「そんな都合のいいもの、あるわけないじゃない。万が一みんなで生き残れたら、クロエに頼んで作ろうか？」

「生き残れたら、って、さらっと怖いこと言わないでください！　あなたたち、多分そんなに簡単に死んだりしませんよ！　へらへらしながらいつだって裏技ばっかり繰り出してきて、いつも全然軍人らしくなくて、サントール砦なんかでは――あ！」

アルが素っ頓狂な声をあげたので、控え室の入り口でぎゃあぎゃあやっている宮廷警察の注意がちらとこちらを向く。ラウルがさりげなく立ち位置を変えて彼らの視線からアルを隠し、リシャールは怪訝そうに首をひねった。

「なーに。戸締まり忘れでも思い出した？」

「違います!!　ええっと、ちょっと待ってて……。ほら、あった!!」

アルはというと、自分の思いつきのほうに必死だ。彼が軍服のポケットから取り出したのは、くしゃくしゃになった紙切れが一枚。

白い指で開いてみると、表面にはレアの品の良い筆跡で、何かの模様みたいな怪しいおまじない用の文字と、通用のフィニステリア語の対照表が書かれている。

「レアから前にもらった、呪い文字……じゃない、おまじない用文字の解説です！　なんか、大事に持っちゃってたんだけど……これ、使えませんか」

アルが熱心に言うと、リシャールも軽く目を瞠ってうなずいた。
「君にしては考えたねえ。それならいけるよ！　レアはこの文字の意味、暗記してるはずだ。いつだって何も見ずに呪いの札とか作っていたし、滅多な人間にはこれは読めない」
「ですよね？　しかもこれ、何も知らない奴には一見ただの模様だ。――よし、これでいきましょう！　そう……これだったら、無理に屋上に行かなくてもいいかもしれない。まずは、敷布と、インクみたいなものを調達するんです！」

「……でも、まさかこうもあっさり、必要品が全部用意されるとは思いませんでした……」
「そのための、日々のおもてなし業務ってやつじゃない？　僕、侍女とか洗濯メイドさん関係とも結構仲いいの。現地調達なら任せてよ」
ぼそぼそと囁きあうアルとリシャールがいるのは、鏡の広間の外の植えこみである。
この非常時だ、宮廷を囲む庭にも宮廷警察は配備されている。とはいえほとんどは扉のほうにかかり切りで、庭の見はりは明らかに数が足りていなかった。
「それにしても、本当はこんなの、軍隊がぐるっと王宮ごと取り囲んでどうこうするくらいの事態ですよね……」
アルがため息混じりに言うと、リシャールはさばさばと答える。

「軍隊は王家の管轄だから、宮廷警察との摩擦で出遅れてるんだろうね。ここ二十五年間の平和ボケのせいもあるけど。だけどどっちにしろ、もうすぐ軍が出てきて大事になるさ」

「じゃ、やっぱりそうなるまでが、俺たちの勝負どころってことですね」

アルが自分に誓うように言うと、リシャールは面白そうに振り返って目を光らせる。

「そうくるんだ。アルってやっぱり、面白いね」

「あきらめが悪いんです。あと、仲間、大事ですし」

自分の気持ちを確かめるように言って、アルは木陰で息を潜める。

後はしばらく黙りこくったまま、アルとリシャールは、まるで自分たちが泥棒か何かになったような気分で宮廷警察の目をかいくぐり、木々の陰から陰へと移って鏡の広間の窓の近くまでにじり寄っていった。

ようやっとたどりついた好位置からそっとうかがってみると、一面が窓になった鏡の広間は昼過ぎの光を受けてきらきらと輝いて見える。

――正直、輝きすぎていて中の様子がよくわからないくらいだ。

「うわー、まっぶしいなあ。アル、あの中、見える？」

「ぎりぎり、レアと人質らしきひとの影は見えますよ。だけど、どっちを向いてるかとかはさっぱり。なんとかして、確実にこっちに気を向けてもらわないとですね。って言っても銃はないし……石でも投げますか。ちょっと遠いし、宮廷警察に気づかれそうだけど」

いざとなったら逃げ足には自信があるし、宮廷警察に捕まるのなんて別に怖くも何ともない。

そんなアルに対して、リシャールはふと能天気な笑顔になった。
「あ、だったら僕、さっきいいもの拾ったよ！　ほら！」
喜々として言い、抱えていた敷布を地面に置いて、懐から途中でふたつに割れた形の木の枝を取り出す。……どう見ても、ただの枝だ。
アルは思わず変な顔になってそれを見下ろした。
「あなた……そんなもんどうして拾ってんですか、こんな切羽詰まってるときに！」
「あはは、僕の家、貧乏貴族でさ。館の維持費とかだけでも一死にそうで、成人するまでにも色々あったんだ。おかげでちっとも背は伸びないし、大変だったよ～。んで、そのとき使えそうなものはなんでも拾って道具を作る癖がついたのね。ほーら、できたでしょ？」
言っている間にもリシャールは軍服のポケットから色々なものを取りだし、器用な指先でもって手のひらくらいの大きさの投石機を作り上げてしまった。
そのあまりの鮮やかさに、アルは思わず目を瞠る。
「すごい！……けど、あれ、成人って大体十七、八歳……え……？　リシャールって、実年齢、何歳ですか……？」
おそるおそる訊いてみると、リシャールは笑みを深くして投石機をつきだしてくる。
「聞かないほうが心臓の健康にはいいと思うよ。はい、使ってみる？」
「……わかりました、聞きません。でもこれ、ほんとよくできてますね。銃みたいにレアを傷つける心配もないし、安心だ」

「そんなことないよー。石が額に当たったら充分死ねる強度で作ってるよ？」

「全力で気をつけます！」

さらっととんでもないことを言われて真顔になり、アルは茂みの外の形のそろった砂利をいくらか拾い、ひとつぶを投石機の弦にひっかけて引き絞る。

ひゅ、と風を切って飛んだ砂利は、美しい広間の窓枠に当たって、ぱし、と音を立てた。

反応は……ない。奥でひとが身じろいだようには見えるが、それだけだ。一面の硝子の横で庭を見張っていた宮廷警察の男が、怪訝そうに辺りを見渡している。奴らに気づかれると、これまた面倒だ。徐々に心臓が緊張で高鳴ってくる。

一回では気づかれないかもしれない。もう一回。そう自分に言い聞かせ、アルはもうひとつぶ、砂利を投石機に乗せて慎重に広間の窓を狙った。

二度目の着弾。――しばらく後に、窓際に人影が近づいてくるのが見える。

アルは素早くリシャールに視線と声を投げた。

「リシャール、お願いします！」

「はいはい。えいや、っと！」

アルたちはふたりがかりで、持ってきた敷布を開く。真っ白な敷布には、灰で大きく『おとなしく降伏しろ』と書かれていた。これだけ大きな文字なら、室内からでも目につくだろう。

しかし、主たる伝言は、もちろんそれではなかった。

周囲に模様みたいに書かれている呪い文字。それには、『お前が犯人じゃないと知っている。

必ず助けるから、中の情報をくれ』という意味をこめてあるのだ。
（届くか？　いや、きっと届く。レアが、俺たちのことを信じてくれてるなら。まだ、希望を持ってくれてるなら、届く）
信じよう。信じるしかない。
そうしてじりじりとしながらアルたちが待っていると、すぐに人影は広間の奥へ引っこんだ。
――永遠にも思える少しの間。
その間に、宮廷警察の男たちがしかめっ面でアルたちのほうへ寄ってくる。
「お前ら、エトワール隊だな？　こんなところで何をやっている」
「見てのとおり、降伏勧告です。俺たちは武器使用が禁じられてますから、こんなことくらいしかやれることがなくって……」
アルはすっくと立ち上がり、宮廷警察の男をにらんで言った。その間も、横目で窓のほうをうかがう。宮廷警察の男は、いらいらと話し続けている。
「お前らはお飾りなんだ、こんな非常時にはいるだけで迷惑だ！　あの砦にでも帰れ！」
「だけど、レアは俺たちの仲間ですよ？　俺たちの説得なら聞くかもしれない！」
言い合いをしている間に、ふっと広間の窓辺に人影が戻ってくる。
人影が手にしているのは――切り裂かれたドレスに文字をいっぱい書きこんだもの、だ。窓硝子に貼りつけられたそれを見て、アルは緊張と興奮がどっと高まるのを感じた。
耳まで熱くなりながら、懸命に内容を読み取ろうとする。

書かれた文字はたくさんあるが、中身は――『私は、この結婚に反対する』。
ただ、これの繰り返し。しつこいくらいに、ぐねぐねと曲がった短文がまるで絵みたいに連なっている。執念を感じる文字だが……それだけ？　まじないの文字の返信は入っていないのだろうか。だとしたら、自分の案はダメだったのだろうか。
レアにはあの文字の暗号が届かなかったのか。
アルは焦って必死に目を細めた。と、そのとき、不意に視界にまじない文字が浮かび上がる。
（あっ、これ、元の文章には意味がないんだ。びっしり書いた文字のひとかたまりが、ひとつのまじない文字になってる。ってことは――レアからの伝言は、『地下』……？　それに、『地下』の上の文字は五芒星っぽい。あれはひょっとして……サントール砦の形か！）
つまり、レアからの伝言は『サントール砦の地下』。
サントール砦の地下にあるものと言えば――そう。
夜にシャリオと裏宮殿を探索した日、シャリオは言っていなかっただろうか？
地下通路を通って、サントール砦まで逃げろ、と。
（やっぱりあそこにあるんだ、地下通路が。でも、それが一体どうしたんだろう？　そこに何かがあるのか？）
「おい、貴様！　何をぼうっとしている！　わたしの話を聞いているのか？」
宮廷警察の男の叫びで、アルははっと我に返る。
そして素早く、リシャールのほうへ視線を投げた。リシャールはその視線を受けると、すぐ

に浅くうなずいて見せる。彼もまた、レアからの伝言に気づいたのだろう。
万が一そうでなくとも、アルにあわせてくれる気はありそうだ。
エトワール隊員の臨機応変な能力に期待して、アルは宮廷警察の男に向き直ると、いかにも悔しそうな顔をしてみせる。
「そんなに怒鳴らなくたっていいじゃないですか！　わかりましたよ。サントール砦に戻ってればいいんでしょう？」
「……ま、まあ、それはそういうことだ。尻尾を巻いて逃げていくくらいなら、最初から出てくるものじゃない。綺麗な顔に傷がついても、あれだしな……」
ちょっと宮廷警察の男の視線が泳いだのは、演技でわずかに悔し涙をにじませたアルの姿が少々美少女じみていたからだろうか。少し複雑な気分になりかけながら、アルは身を翻した。
「リシャール、行きましょう。レアのことは、諦めるしかないのかもしれない……」
「うーん、そうだねえ……。悲しいな。僕、涙が出そう。レアが星の間に行ったら、僕、毎日夜空にお祈りするね……」
リシャールもまた、アルに負けず劣らず、甘ったるい感じであざとい演技を披露した。
「あ、うーん……いや、わたしも、その、頑張るというか……うむ……」
しどろもどろになっている宮廷警察の男を背後に、アルとリシャールがうなずきあった直後。
鏡の間の中でがしゃん！　と大きな音が立つ。
アルはぎょっとして広間のほうを見たが、やっぱりレアと人質がいるということくらいしか

見えない。どちらも倒れてはいないようだ、と思った途端、自分でもびっくりするほどほっとした。……とはいえ、本当の安堵にはほど遠い。

「なんだ!?　何があった！」

宮廷警察の男は叫んで鏡の間へ駆けつけ、リシャールはじっと広間を見やってうなずいた。

「大丈夫、宮廷警察を牽制するために何かやっただけだと思う。――僕はここでいざというときのために待機してるから、アルはレアの伝言どおり、サントール砦へ行って。あそこの地下に何があるかはわからないけど……。あと、隊長の姿が砦にないかも、見てきてほしい。正直、ここまで姿がないと、ちょっと隊長のことも心配だ。……頼んだよ」

言われてみれば、確かにそうだ。アルはほとんど迷わずにうなずいた。

「……わかりました。ここは任せます！」

リシャールにそう言い置いて、アルはなるべく茂みの中に身を隠しながら走り出す。

背後をリシャールに任せていることについては、もうすっかり不安はなかった。どのエトワール隊員も、非常時に当たっても冷静で、誠実だ。できれば、みんな無事なうちにこの任務を終わらせたい。もちろん――レアも。

（全部終わったら、もっとみんなに色々聞き出してやる。あの隊長にも！）

そのためにも、とにかく走ろう。

美しい幾何学庭園には、普段なら散歩するひとの姿が見える時刻だ。しかし今はほとんど人気がない。たまに姿が見えるのは、大慌ての侍従や、まばらな宮廷警察ばかり。それなのに日

はさんさんと穏やかに降り注ぎ、秋薔薇の匂いが漂っているのがどこか異様な光景だった。
アルはできるかぎりの速度でサントール砦にたどりつくと、いそいで腰を探る。支給されている鍵束の中からサントール砦の扉の鍵を取りだし、大急ぎで中へ。
（地下通路の鍵も、あの夜間警備の日に隊長にもらったまんま、持ってる。……これだ！　返さなくてよかった……！）
ここで鍵がなかったら、冷や汗をかくどころではない。
アルはシャリオの執務室に飛びこみ、無駄な荷物の多い室内をぐるっと見渡した。もの、もの、もの――しかし、通路の扉があるところには無造作にものは積まないだろう。
「床か……？　だけど絨毯が乱れてるでもないし」
すばやく床に這いつくばってあちこち叩いてみるが、絨毯の下は板張りだ。
どこもそれなりに空洞音はするものの、扉らしきものはない。時間がやけに早く過ぎていくように思え、じわじわと全身を焦りが満たし始めて、アルはぎゅっと唇を噛む。
そのとき、どこかで乾いた銃声がした。
「！　下かっ……!?」
アルははじかれたように顔を上げ、そのひょうしに背後の書棚に背中をぶつけた。
と、背中に当たった固い感触が、がくん、と後ろへ下がる。
「いっ！」
悲鳴らしい悲鳴を上げる間もなく、アルは床へと転がった。

転がったまま見れば、書棚が扉みたいに向こう側へと開いている。
その先に見えるのは、うすぼんやりとどこかが照らされた薄闇の踊り場。
「よかった、当たり！……っ！」
慌てて飛び起き、踊り場に駆けこんだとき、もう一度銃声が響く。もう、この銃声が地下通路で響いているのに間違いはない。
（一体どんなことになってるんだ！）
アルは自分の腰の銃帯に手をかけながら、大急ぎで階段を駆け下りた。
もう、こそこそしているような事態ではない。ぎりぎり残った理性で方向だけを確認しつつ、とにかく通路を走っていく。
すると、いきなり柔らかいものを踏んで、その場ですっころびそうになった。
「あた、たっ、たっ……!?」
「相変わらず騒がしいな、お前は」
アルがどうにか体勢を整えていると、離れた場所から低い美声が響いてくる。
ぱっと顔を上げ、目を凝らした。
どこまでも続いているかのように見える、薄暗い地下通路。明かりはぽつ、ぽつと壁のくぼみで獣脂が燃えているだけだ。
あやふやな明かりに目が馴れてくると、足下にごろごろと人間の身体が転がっているのがわかった。生きているのか、いないのか。とにかくぴくりともしない身体が、ざっと数えて十以

上。そしてその先に、ひとり、すんなりとたたずむ男。
どれだけあやうい光の下でも、ただ輪郭だけでもよくわかる。
エトワール隊隊長シャリオは、ひざまずいたひとりの男の額に銃を突きつけて、いつもどおり静かに立っていた。その脇に、壁にもたれるようにして立っているのは、髪と同じ真っ赤な返り血に手と頬を染めたフラムだ。
「隊長、フラム！　ご無事で何よりですが、どうなってるんですか、これは……！」
気持ちが定まらないままに声をかけると、迷いがそのまま声に出る。
シャリオはアルに背を向けたまま、冷徹に返した。
「よくここがわかったな」
「ない頭を振り絞りましたから」
「なるほど。まあ、野生の獣にも頭のいいものはいる」
「さすがに今は、嫌味言うより先に、状況説明とかあってもいい気がします……！　こいつら、また例の賊ですか？……っ、て、え……？」
あきれたような、安心したような気持ちで倒れている人々を避けて歩み寄って行くと、シャリオが銃を突きつけている相手の姿がはっきり見えて来た。
格好の良い髭を生やしたその男は、明らかに、宮廷警察の制服を着ている。
とっさに制服だけ変えた偽物か、と思った。
しかし、残念ながら顔にも見覚えがある。アルとフラムが庭園で訓練をしようとしたとき、

邪魔しに来た、宮廷警察の男。ダントン。彼はアルに切羽詰まった声をかける。
「――君。君は、エトワール隊の新入りだね。頼む、助けてくれ！」
「助けろ？　何がどうなったら、俺が隊長からあなたを助けるってことになるんです」
アルは顔をしかめるものの、ダントンは勢いよく続けた。
「君はきっと、我々宮廷警察が君たち近衛と敵対している、と教えこまれているだろう。しかしすべて誤解だ！　エドモン中将は過去の失敗で近衛に押しこめられているのを不満に思う野心家だ。彼は今回の婚礼をぶちこわして宮廷警察を無能扱いし、のし上がろうとしている。君が思っているのと、真実はすべて逆なんだ。……なあ、この隙に、上では今、彼の部下が大立ち回りでもしているんじゃないのか？」
上での大立ち回り。
それはラウルやクロエのことを言っているのだろうか。
それとも……レアの引き起こした大事件のことか？
アルが少し考えこむ様子を見せると、宮廷警察の男はすかさず叫んだ。
「それも全部、エドモン中将のもくろみだ！　頼む、君が我々の正義を信じるなら、どうか彼の逮捕を手伝ってくれ！」
「……」
アルは目を細めて相手を見ると、ゆっくりと歩み寄る。
そして、素早く手首をねじって床にねじ伏せた。

「なっ、何をする！」
「何をする、じゃないですよ。正義だのなんだの、よくその口で言えたもんですね。俺があんたに正義を感じたことなんて、初対面のときから一度もない。信じてほしけりゃ、信じられるような行動をしないと。――あなたの正義は、絶対に昔の俺みたいな子供は助けてくれない」
アルは言い、近衛が本来形ばかり常備しているはずの細い紐で相手の手首を縛めると、ポケットから取り出したハンカチで猿ぐつわを噛ませてしまった。
相手がもがくしかできなくなったのを確認して立ち上がり、シャリオと視線をあわせる。
「レアはどうしている」
助かったともなんとも言わない彼の態度が、信頼を感じさせて少し嬉しい。
アルも無駄口は叩かず、真剣な面持ちで答える。
「大変なことになってますよ。人質を取って、『リシェスとフィニステリアの婚礼に断固反対する』とかいって鏡の広間に立てこもってる。クロエが時間稼ぎをしてますけど、ぼやぼやしてたら宮廷警察に殺されるんじゃないかと思います。奴らは発砲許可を取りました」
「――しくじったな」
吐き捨てるような台詞はいつもよりよほど感情的で、アルは少しびっくりした。
叱られたのかとも一瞬思うが、シャリオは考えこむように口元に手を当てて瞳を鋭くしている。殺気じみたものをまとった彼は、おそらく自分を叱咤しているのだ。
「……そんなものはレアの真意ではない。敵は思ったよりも上手のようだ――行くぞ」

「はい！」

シャリオの怒りはなんだかいたたまれないが、彼が隊員のために感情を見せるのは、ほんの少しだけ嬉しい。アルが返事をすると、シャリオは深くうなずいて歩き出す。

「急ごう。この通路は、正しい順路を辿れば直接鏡の広間の奥へも繋がっている。結婚式用に設置された祭壇の下から出られるはずだ」

「そんなとこに出られるんですか！　そしたら楽勝ですね」

「楽勝ですね、じゃねーよ、まったく。お前は色々気楽だねえ」

アルがシャリオに続いて歩き出すと、フラムもその後に続いて少々だるそうな声を出す。

アルは少し心配になって、肩越しにフラムを見た。

「少佐、怪我してます？　ちょっと声が変ですよ」

「んー、大丈夫よ。死ぬほどじゃないし。お前はちゃんと、自分が死なないように前見てな」

笑うような声を少し不安に聞きながら、アルはシャリオについて例の庭園地下、仕掛け噴水の機構がある辺りまでやってきた。

鈍い音を立てながら回る巨大な歯車の脇をすり抜けたところで、不意に例の首筋がぴりっとする気配に襲われる。

「隊長……」

声をかけたとほとんど同時に、シャリオの歩が唐突に止まる。

前後して階段を下りる複数人数の足音が歯車の音にまぎれて響き、複雑な機構脇の闇からば

らばらと人影が現れた。シャリオはすかさず銃を構えて訊く。
「貴様ら、何者だ？」
冷えきったシャリオの問いに、敵は答えなかった。
問答無用でひとりがこちらへ銃を向けた、と思ったときには、シャリオが引き金を絞っている。乾いた銃声は、これもまた周囲の音にまぎれてしまう。
敵は銃を取り落としてその場にしゃがみこんだが、すぐに他の男たちが銃をかまえた。
アルたち三人は歯車の後ろへ身を隠す。
間を置かず、複数の銃声が響き渡って火薬の匂いが充満した。
銃声の合間をぬって、アルが素早く低い位置から顔を出し、リシャール製の投石機で敵の足を狙う。歯車が回転するわずかな隙間をぬって飛んだ砂利石は、確かに敵の足をとらえた。
敵のひとりが悲鳴をあげて転倒、途端に敵の銃撃が激しくなり、フラムがぼやく。
「ったく、なりふりかまわなくなってきやがったなー。もう、何かの制服着たりなんだりってのすらねーや」
「あの、俺、まだ色々わけわかってないんですけど！　これ、敵ってことだけは確かってことでいいですよね？」
アルの問いに、攻撃の合間、合間をぬってひとりずつ敵を仕留めながらシャリオが答える。
「それだけわかっていれば充分だ。ときに貴様、どうしてさっきの宮廷警察の言い分を信じなかった？」

アルは投石機にポケットの砂利を設置しながら、少し考えこみながら言う。
「理由は色々ありますけど……一度も俺を守ってくれなかった警察の正義より、隊長の正義のほうが好きだったから、じゃないでしょうか。なんか、隊長って、嘘吐けなさそうですし」
「あらまー。ばれてますよ、閣下？」
「黙れ、番犬。――アル。可能なら銃を一丁拾え。そしてわたしが合図をしたら、右手の隅まで走れ」
いつもの冷徹な声が不意に愛称を呼んだので、不思議な感じに胸の奥が熱くなった。
「了解、隊長」
アルは小さく囁き、投石機を引き絞る。
次の瞬間、投石機の石が敵の手の甲に命中し、相手は悲鳴をあげてうずくまる。直後、シャリオの弾がその横の男の肩に着弾した。
「今だ！」
シャリオが叫ぶ。
アルはほとんど反射的に駆けだした。床に転がった、敵の銃を引っさらう。
背後では銃声は起こらない――いや、起こった。乾いた銃声が、足下めがけて一発。
その後、シャリオのものらしき銃声が響く。
妙にゆっくりと感じられる時間の流れの中で、アルは真っ暗な部屋の隅にたどりついた。
湿った壁から、空気の流れを感じる。ここに扉があるのだ。片手で鉄扉を探り、取っ手と鍵

の位置をどうにか知る。ポケットに手をつっこみ、例の鍵を差す。
――大丈夫だ、開いた！
「隊長！」
振り向いて一声叫ぶと、シャリオがこちらへ走ってくるのがわかった。その背後を守っているのはフラム。
アルは軋む扉を押し開け、湿った地下通路へ歩み入る。
「行け、まっすぐだ！」
「はい！」
シャリオの声に答え、あとはひたすらに走った。
自分の息づかいと、足音だけがやたらと頭の中に響いている。
この先に行けばレアを助けられる。ただそれだけを考えて走る。
こんなわけのわからないことに巻きこまれて、ひとりの味方もいないレアの気持ちはどんなだろう。幼いころ、旅芸人舞台の客席で泣いていた自分みたいな気持ちだろうか？
あのときの自分は、助けを求めたりしなかった。
そんなもの、来るわけがないと思っていた。
ただただ絶望して、重い銃を手にとって、泣きながら敵にあざ笑われていた。
（あんな思い、レアにさせてたまるか！）
怒りとも決意ともつかない熱いものを胸の真ん中に抱えながら、ふわりと周囲の空気が変わ

るのを感じた。淡い圧迫感を全身に感じる。
おそらくは、行き止まり。
ほとんど真の闇に近い場所で手を伸べると、指が湿った壁に当たった。そのまま指を横へずらすと、今度は錆びの浮いた金属棒の感触。はしごだろうか？　多分、そうだ。
すうっと空気が上へ吸い出されていく気配がある。
「警戒を怠るな。――行け」
背後から、追いついてきたシャリオの声が響く。彼が背後を警戒してくれている空気を頼もしく感じながら、アルは慎重に、できるかぎりの速度ではしごを登っていった。
「っ……！」
いきなり頭をごつん、と何か固いものにぶつける。
そのひょうしに、頭上で何かがごとり、と動き、まぶしい光がうっすらと差しこんできた。
きっと、ここが出口だ。アルは案外軽い頭上の『何か』をはねのけ、さっき拾った銃を構えながら外界へと躍り出た。
「動くな！　エトワール隊だ！」
急な光に一瞬目がくらむが、とにかくひとの気配の方向へ銃を向ける。
目の前ではおそろしいまでの光が、ちかちかときらめいていた。
鏡のように磨き上げられた大理石の床。壁にかけられた金の額縁に、無数の鏡。平板な硝子をはめた窓から差しこむ、黄金色の午後の光。

夢のように美しい鏡の広間の真ん中で、レアが叫ぶ。
「アル！」
「静かになさい！」
すかさず声をあげたのは、レアよりも低い女の声だ。
アルは徐々に視力が回復してくるにつれ、目の前の光景にぎょっとして目を見開く。
「あなた……！　人質だったはずじゃ……」
「そうよ。今時の人質は、犯人とひとり二役もやってのけるの。知らなかったでしょ、可愛いおもてなし部隊の新入りさん。ごきげんよう」
華やかに、かつ毒々しく囁いたベルクレール伯爵夫人は、レアの銃を手にして、ひざまずかせた彼――彼？　いや、今の表情では女性にしか見えないのだが、とにかく、レアのこめかみに銃口を向けていた。
くわしい事情はよくわからないままにかっと激しい怒りが燃え上がるのを感じて、アルは唇を震わせる。
それを感じ取ったかのように、ベルクレール伯爵夫人は声をあげた。
「銃を下ろされたほうがよろしくてよ。こんなところで発砲したら、あなたもレアの共犯だと叫んで差し上げますわ。エトワール隊なんて隊ごとお取りつぶしのうえ、全員死刑ね」
「それで脅しのつもりですか？　俺は……！」
アルが相手を怒鳴りつけようとしたとき、背後からシャリオの気配が現れる。

彼はなめらかな所作で棺桶じみた祭壇の縁を飛び越えて大理石の上へ立つと、貴婦人を鋭い瞳で一瞥して告げた。

「ご機嫌よう、美しい方。装いだけでなく、いかにも美しいフィニステリア語だが……少々美しすぎますね。この広大な領地をもつフィニステリアの貴族にしては、どこの地方の訛りもない。まるで外国語を喋るのが大変上手な方のような発音だ」

「え？　それって――どういうことですか、隊長」

アルがびっくりして聞き返すと、最後に出てきたフラムが軽く指を鳴らしながら言う。

「外国人、ってことでしょ？　そのまんまだ」

「外国人……」

アルは改めてまじまじと夫人の顔を見つめたが、きちんと化粧をした美しい顔からでは、何人かなんてさっぱりわからない。そもそも大陸ではありとあらゆる混血が行われ、髪の色や目の色だって恐ろしく種類がある。よっぽど特徴的なのは、混血を嫌った古王国アルタリアの元貴族、王族だけが持つ白金髪くらいなものだ。

ベルクレールはアルになど目もくれず、まっすぐシャリオを見つめて目を細める。

「麗しのシャリオまで来て下さったのね。嬉しいわ。お察しの通り、私はリシェス人。ベルクレール伯爵夫人と入れ替わった、リシェスの愛国者同盟の女よ」

奇妙に甘ったるい声。今はその裏に、暗い澱がひそんでいることがよくわかる。

レアは彼女に銃を突きつけられたまま、懸命に声をあげた。

「エドモン中将！　敵の親玉はこいつです！　こいつは宮殿の裏で、着替え担当の侍女と入れ替わっていました。私を脅迫して、自分を人質にするふりをしろと要求してきたんです！」

「黙りなさい、小娘！　あなたは犯罪者として死ぬのよ！　いくら男装して男の子みたいな言葉遣いをしたからって、性別や生まれをごまかせるとでも思ったの？　今回結婚する姫君がどこにも見あたらないと思ったら、サントール砦で四六時中殿方たちに守られているなんてねえ。予想外だったわ」

（え……ってことは……レアって、女!?　そのうえ……結婚する、姫君……）

一瞬思考が真っ白になるが、思ってみれば納得することだらけだ。

怪しい雰囲気に見えたシャリオとレアの姿も、男女に置き換えれば兄と妹みたいにしっくりくる。自分がどきどきした理由も、すとん、と胸に落ちてくる。シャリオは、そして他のエトワール隊のみんなも、ずっとレアを守っていた。

この結婚式を守っていた。なのに、最後で奪われた、ということなのだ。

（いや――奪われるわけには、いかない、だろ）

最初の衝撃から立ち直ると、アルの胸にはふたたびじわじわと熱いものが湧いてくる。エトワール隊員としてのレアの笑顔を思い出しながら、アルはベルクレール伯爵夫人をにらんだ。

「……それで？　その子が今回結婚する姫君だったら、なんか悪いことでもあるんですか。わざわざあなたたちの罪を着せて。酷い目を見せて、名誉も何もかもはぎ取って、死ぬような目に遭わせていい理由なんかどこにもないでしょう！」

「あるわ！　だってフィニステリアは私たちのために、もっとひどいことをさんざんやってきたもの！　国境付近での小競り合いを起こしてはしらんふりをしたのもフィニステリア。国宝を盗んでいったのだって、そう！　今さらこんな小娘をリシェスに貢ごうって言ったって、腹の裏は読めてるわ。どうせ親戚面して、じわじわリシェスの領地を切りとっていくつもりなんでしょう？　わたしたち、リシェス愛国者同盟は、そんなことは許さない！」

叫ぶ女の声音は、段々と狂信めいてくる。

彼女の言うことはアルには初耳のことばかりで、まるで足下を強引にぐらつかせられているみたいだ。フィニステリアが、リシェスに喧嘩を売り続けていた？　そんなの本当に知らなかった。全部逆だと思っていた。

とっさに言い返せないアルの代わりに、シャリオが静かな声を出す。

「リシェス愛国者同盟についての噂は聞いています。けれど、あなたたちが今回の事件の首謀者とは思わなかった。国を愛する心は美しいと思いますが、こんなことをしても戦争が起こるだけです。戦争になったとして、リシェスがフィニステリアに勝てるとお思いですか？」

「勝てるわ！　今のフィニステリア国王はふぬけだし、重病で長くはもたないのでしょう？　今なら、フィニステリアの今までの悪事をあばいて喧伝すれば、他の国だって協力してくれるはず！　勝機はあるのよ！」

段々と狂信めいてくる叫びに、アルの頭はくらくらしてきた。

「なんだ、それ……？　そんな、領地を切りとるつもりだろうとかなんとか、そんなのあなた

の妄想じゃないか。どうしてフィニステリアを信じようとしないんだ！」

あきれ果てて叫ぶものの、ベルクレールは目の色を変えて叫ぶ。

「妄想なんかじゃないわ！　あなたたちフィニステリアは、あの古王国アルタリアだって結局吸収してしまったじゃない！　あの国の高貴なる王族の方々の子孫がどうしているか、あなた、ご存じ？　知らないでしょう？　見たこともないでしょう！　それはね、殺されたか、よっぽどの田舎に追いやられているかのどっちかってことなのよ！」

「それは……」

夢にもみなかったような話に、アルはつい口ごもった。

そんな大陸規模の話を、アルは知らない。アルは自分が死にかけたのを助けてくれたひとに、その力に憧れてここまできただけだ。戦争の意味を考えるのは、別の偉いひとの仕事だと思っていた。けれど今、自分はフィニステリア王国人のひとりとして、非難されている。

彼女に答えるべき言葉は、心の中をひっくり返しても見当たらない。

どうすりゃいいんだ、と変な無力感にさいなまれかけたとき、シャリオの声が響いた。

「フィニステリアが卑怯なまねをしたと言って、己も卑怯なまねで戦争を引き起こそうとする。それは結局、泥沼でしかない。――思うに、おそらく国の規模になれば、『正義』などというものはいかなる人格者の王のもとでも実現はされないのです」

「なあに、開き直り？」

ベルクレールが引きつり笑って問う。しかし、対するシャリオはあくまで落ち着いていた。

淡々とした無表情で、それでも瞳だけが強い情熱に燃えていた。彼は言う。

「いいえ。それでもわたしは、わたしの立場からの『正義』の実現を諦めない。国の規模でなされ得ないなら、この両手には『正義』を握り、けっして離さない。――あなたの主張が正しかろうが、あなたの行いは卑怯だ。その行いを、わたしは許しません」

シャリオの揺るぎない言葉が、アルの心を徐々に落ち着かせてくれる。

そうだ。大事なのは、自分が今までしっかり握りしめてきたこと。

かたくなになりすぎるのが害悪なら、揺れすぎるのもまた愚かだ。アルが今までの人生でしっかりと握りしめて、放したくないと思って来た、自分なりの信条。

それは――

「いいかげんにしなさいよ！　そうやってきれい事ばかり！　この国に正義なんかない。あなたには、私の気持ちなんかわからない!!」

「ひとの気持ちなんか、誰にもわかるか！　俺にわかるのは、今そこに震えてる女の子がいるってことだ！」

アルは叫び、あらためてベルクレールに銃口を向ける。

彼女は顔を引きつらせ、必死の形相で告げた。

「た……大変なことになるわよ？　こんな宮殿の奥で発砲なんかしたら、絶対に大変なことになる！　どうせ、あなたたちはみ出し部隊なんて、発砲許可なんてとれてないんでしょう？　国王のいない宮廷に、あなたたちの味方はいない。疑われるのは、あなたたち」

いかにも苦し紛れの話だが、ベルクレールの言うことは事実でもあった。冗談みたいな宮廷警察との許可証騒動が、ちらっとアルの脳裏をよぎる。

しかし、それを吹き飛ばすようにシャリオが叫んだ。

「規則は常に、真の正義を護るためにある。アルカイド・クレール、貴様の抜刀、発砲を許可する！」

「――!!」

はじかれたように身体が動いた。銃の引き金には、力が入らなかった。代わりに、封印を引きちぎって儀礼用のサーベルを抜く。

アルの銃口に注目していたベルクレールが、虚を突かれて動きを鈍くする。

これなら、充分間に合う。

こちらを向くベルクレールの銃口。アルは間をおかず、銃をサーベルで弾き飛ばした。

ベルクレールが何があったのか把握できずにいるうちに、その手を取って床へ押さえつける。

「……っ……！」

「女に乱暴するのは気持ち悪いけど、今回はあなたがいけないんだ。我慢してください」

相手が動けないようにがっちりと固定して、アルは言う。

ベルクレールはしばらく必死にもがいていたが、小柄でもしっかり鍛えたアルの力には、とてもではないが抵抗できなかった。

そんなアルのもとに、硬質な足音がふたりぶん、近づいてくる。

「しっかしお前、こういうときでも銃より剣なのなー。相手が訓練されてなかったからいいようなものの、もうちょっと銃も練習しろよ、お嬢ちゃん」

「まあ、確実性をとったという点では間違いではない。よくやったアル」

こんなときでも冷静にアルの行動を評価してくれる。アルが気恥ずかしいような気分でシャリオを見上げると、彼はそっとレアの傍らに膝を突いて、優しく声をかけるところだった。

「大丈夫ですか、姫君」

(うわっ、こんなときにまでいいとこ持っていくし……!)

レアを救おうと頑張ったのは自分も同じだ——と内心激しく文句を言いたいところではあったが、レアが憔悴の中にもいかにも嬉しそうな顔をしたので、アルは結局口をつぐんでしまった。正直、男女として見るとシャリオとレアがあまりにお似合いだったのもある。

レアは、床に座りこんだままで小さく言う。

「……はい。ありがとう、ございました。シャリオ様のおかげです」

「いや、エトワール隊全員の手柄です。わたしひとりでは何もできなかったでしょう」

シャリオの台詞に、レアはそっと微笑んだ。シャリオは彼女に手を貸して立たせると、後ろへ下がらせてからベルクレールの持っていた銃を床から拾い上げる。

アルによって床に押しつけられたままのベルクレールは、シャリオの所作を横目で見て陰鬱につぶやいた。

「やっぱり、ダメだったわね。うまいことを色々言ってたけど、宮廷警察の男なんてあてにす

るんじゃなかった。これでリシェスは滅ぶんだわ」

なんだってそう決めつけるんだろう、とは思うものの、アルには無責任な慰めか文句しか言えない。言葉を失っているアルの前に、シャリオが緩やかに片膝をついて言った。

「やはり、宮廷警察のダントンと繋がりがありましたか。奴は国民議会の過激派に属しています。戦争を賛美し、それこそリシェスを戦争で呑みこみたいと思っている派閥だ。あなたは、その愛国心を、結婚式を阻止して戦争をしたいだけのダントンに利用されたのです。この結婚は、誓ってリシェス属国化のためのものではない。――わたしはフィニステリアの貴族ですが、あなたの気持ちはわかる」

「はあ？　は……あ、あはははは！　信じないわよ、そんなの。大体私の気持ちがあなたみたいなのにわかるわけないじゃない！　何言ってるの、ばかみたい……お飾り中将さん。きっとずっと、ちやほやされて育ったんでしょ？　戦争になったって大丈夫よ。あなたはけっして前線になんて出ないでしょうし」

おかしくなったかのように笑い転げ始めた相手を、シャリオは静かに見下ろしていた。

そして不意に胸にかけていた星石のお守りを外すと、首飾りの蓋を開けてベルクレールの目の前にさらす。中にちょっとしたものを入れられる構造になった首飾りからは、ころん、と黒い石が零れ落ちた。

「これを」

「何かしら？　宝石でもくださるの……え？」

いかにも嫌そうにその中を見たベルクレールだったが、不意に表情が変わった。愕然とした顔でまじまじと、転がり出した石と首飾りの中身を見つめ、次にシャリオの顔を見上げて、どことなくおびえたような声で訊く。

「これ……この、石、まさか……」

「ええ。リシェスの国宝、『絶望』の星石です」

(星石？　しかも、リシェスの国宝が、どうしてフィニステリアにあるんだ)

急に出てきた星石の話に、アルはきょとんとする。

そんな彼の前で、シャリオは告げた。

「リシェスとフィニステリアの間の不和を決定的にしたこれを、今、わたしの名において、リシェスに返還いたします。……わたしの名は、今、この世界ではろくな力を持たない。しかし、ある種の呪文でもあるのです」

静かに言い、シャリオはペンダントの中から取り出した黒い星石を、レアのほうへとさしのべる。レアは疲労困憊しているであろう足で床を慎重に踏みしめて歩み寄ると、両手のひらでそれを受け取った。

途端に、レアは淡い銀色の光に包まれる。

――それは、アルがシャリオのお守りを手にしたときに起こった反応によく似ていた。

よく似ていたが、より、穏やかで、洗練された光だった。

レアは愛しげに手の中の石を見つめ、そうっと手の中に押しこめる。

ベルクレールはレアの手の中で徐々に光を収めていく星石を呆然と見つめていたが、次に目の前で開いたままの、シャリオの首飾りの中を見つめる。

「この……首飾りの中の肖像。あなた、なのですか」

（ん？　なんか、いきなり丁寧になった？）

気にはなるが、アルのところからはちょうど首飾りの中身が見えない。アルがもどかしく思っている目の前で、シャリオは静かにうなずいて首飾りを閉じた。

「そうです。そして、レアはわたしの同志。今に生き残った《護星官》です。彼女はあなたの国へ無事、『絶望』の星石を持ち帰る。そして――星石がひとを魅了して悪事を働かないよう、見守り続けます。――一生。あるべきものを、あるべき場所へ。アルタリアの悲劇を二度と繰り返してはいけない。それが、平和をのぞむフィニステリア国王陛下の願い。そして、わたしの願い。この結婚の、本当の意味なのです」

不思議な重みをもってシャリオが言うと、ベルクレールの身体が少し震えた。

シャリオはほとんどうやうやしいと言ってもいいような態度で、刻みつけるように言う。

「あなたはその罪ゆえに捕らわれてもらわなくてはならないでしょう。しかし、この、シャリオ・シルヴェストル・エドモンが約束をする。……けして、フィニステリアにあなたの国を荒らさせはしない」

シャリオのやけに真摯な言葉が響き渡ると、アルが押さえつけているベルクレールの身体からは魔法みたいに、力が抜けた。

LA GARDE ETOILE ROYALE

6 守るべき星

「こーんにちはー！　私の天使な妹さんは、お元気かしら～？」
「遊びに来たわよう、アルちゃーん！　って、あら。鍵が閉まってる？」
きゃっきゃとはしゃぎながらサントール砦にやってきたふたりの貴婦人が、午後になっても閉ざされた扉を見てお互い顔を見合わせる。
彼女らがよくよく見てみれば、扉の上には張り紙があった。
『サントール砦サロンは、無期限休業となっております。再開の予定はございません』
「え……えええええ!?　無期限って、どういうこと！」
「嘘よ、私の天使！　天使のいない日常なんて灰色の砂漠よおおお！」
ふたりの叫びは青い空に響き渡り、サントール砦奥の執務室まで届いてくる。
「控えめに言って、実に耳に厳しい超高音だな」
「隊長、隊長。本音がだだ漏れてます」
アルがわずかにひきつって言うと、シャリオは完璧な軍服姿で執務室内を見渡した。
「事件の収拾はついたが、その代わりに我々が『お飾り部隊』ではないことも明らかになって

しまった。これ以上おもてなし業務を続けることもあるまい。みんな、よくやってくれた」

シャリオの言葉に、クロエ、ラウル、リシャール、そしてアルが敬礼を返す。

あの宮廷での人質騒動は、真犯人の偽ベルクレール伯爵夫人の自首で幕を閉じた。

彼女はリシェスの秘密組織の人間だと名乗ったが、そのような組織のことはリシェス王国自身が認めてはいない。これに関しては国家間での調整が始まるのだろうが、今のところすぐに物騒なことになる気配はないそうだ。一体どんな力が働いたのか、痛み分け、ということでリシェスもフィニステリアも今回の事件は細部は公表せず、ちょっとした騒動があった、とだけ国民には発表することにしたらしい。

宮廷警察の裏切り者、ダントンは自殺。『レア』というエトワール隊員は田舎へ帰ったことになり、フィニステリアの姫君は日を改めて無事、結婚の儀式を終えたのである。

（これで俺たちが関われるところは全部終わり、か。色々と表沙汰にならなかったのはもやもやするけど……まあ、これが一番よかったんだろうな）

レアのいない自分の隣にちょっとしんみりするアルだったが、シャリオはいつもどおり、落ち着き払って冷徹な声を出す。

「今後のエトワール隊の活動については、追って指示する。今日はこれにて解散だ。あとはこちらから連絡するまでは好きにすごせ。以上」

「はい！」

返事は四人そろって綺麗なものだったが、すぐに動き出す人間は誰もいない。

なんとなく手持ちぶさたにたたずむ隊員たちを横目で確認してから、アルは勢いよく片手を挙げてみた。

「えーと、ひとつ、よろしいでしょうか」

「早めに終わらせろ。わたしはどっさり届いた実家からの要らない私物を片づける用がある。レアがいないとその辺りを頼める人間がいない」

「……いや、でも、要らない私物は逃げないし、俺たちも手伝うのでせいぜい崩れないように積んどきゃいいじゃないですか。流れ的に、この後みんなで飲みに行こうかなー、なんてことになるのが目に見えてるんですけど……隊長も一緒に行ったりしませんか？」

適当にほっぺたを掻きながら言ってみると、周囲の空気がびしり、と固まる。

（あれ？　みんなこういうこと言いたくて居残ってた雰囲気だったよな？　違うの？）

きょろきょろ周囲を見回してみたが、隊員たちはそろって、面白そうというか、嬉しそうというか、言っちまったなお前、とでも言いたいような顔をしていた。

曖昧な沈黙が執務室に流れ、ふとシャリオが机の引き出しを開ける。

「アルカイド」

「は、はい……？」

「資金が欲しいなら、はっきり言え」

静かな言葉と共に、アルのほうに小さな袋状の財布が押しつけられた。

反射的に受け取ってから、アルは慌てて身を乗り出す。

「いや、そういう意味じゃないですよ!?　俺は隊長に来てほしいって、心から思ってます！」
「気にするな。わたしはそもそも友人が少ない。飲んで冗談を言うのも苦手だしな」
「別に冗談言わなくても、大丈夫ですって。そのままで充分おもしろ……あ」
……さすがに、これは言ってはいけないことだっただろうか。
アルが黙ると周囲の雰囲気はますます微妙なものになり、シャリオはさらに引き出しを開け、今度は綺麗に包まれた大きな包みをアルの腕の中に押しつけた。
「まだ足りないのなら、お前に特別に報奨をやる。宮殿から離れるまで開けるなよ。呪いがかかるからな」
「の、呪いって、レア直伝だったりとかします……？」
「みなまで言わせるな。ちなみに日が暮れると、包みを開けなくても呪いが発動する可能性があるので、急ぐのを勧める」
「はいっ！　ご親切にありがとうございましたっ!!」
アルは大急ぎで敬礼をし、回れ右して執務室から退室する。
他のエトワール隊員たちは、それぞれ顔を見合わせてなんとなく笑い、ひとりひとりシャリオに敬礼してからのんびり部屋を出て行った。
最後に残ったフラムが、腕を組んで困ったように笑う。
「それで？　まさか俺にまで、奴らと一緒に飲みに行けとか言いませんよね？」
「たまには行ってこい。事件はすべて終わった。特に危険なことなぞないだろう」

ぞんざいに言い、執務机の引き出しから煙草入れを取り出す。フラムは当然のように歩み寄って彼の煙草に火をつけると、片手を机の上へ置いてシャリオの顔をのぞきこんだ。

「本気でおっしゃってるんですか、それ。あなたは存在自体が危険すぎる。今回の事件どころじゃない。あなたが何者か公表されたら、それだけで大陸の火種になるんですよ。だからこそ、この俺が命をかけてお守りしてるんだ」

少し近い位置で言う彼を、シャリオはちらと見上げる。上質な紫煙をあげる煙草を手袋をしたままの指でつまみ、シャリオはさもつまらなさそうに告げた。

「今さらな話だな。確かに私は火種だ。だが、同時に切り札なのだ。だからこそ、誰もわたしに本当に手は出せん。少なくとも、国王陛下がご存命の間は」

言いながら、胸元に提げた首飾りをもてあそぶ。

今は絶望の星石を外へ出し、軽くなった首飾り。その元々の持ち主が生きていたら——そんな感傷的なことを考えかけて、シャリオはかすかに笑った。

そのまま、投げ出すようにフラムに訊く。

「フラム、お前は陛下が崩御なさった後にも、わたしに仕えるか？」

フラムは軽く目を瞠り、顔をゆがめて机から身体を押し離した。シャリオの姿をじろじろと眺め、なんとも嫌そうな笑顔で自分の頭を掻く。

「どうでしょ。確かに俺は、陛下のご命令であなたのそばに居ますからねえ。ただ、自分でも自分の人生はあなたのために賭けるって決めちまったからなあ。今さら自由になっても、何し

ていいのかわかんねー気もします。まあ、庇護者を失ってぼろぼろになるあなたを見るのも、いっそ破滅的にすかっとしそうではありますけど」

そう言ってじっとシャリオを見つめるフラムの瞳は、いささか暗い色を帯びた。

彼のよく光る瞳の奥に、赤黒いしたたりみたいなものが沈んで見える。

あれは血の色だ。瞳を透けて見える、フラムの血の色。この大陸生まれではない血。

そんなことをシャリオが考えている間に、フラムはからりとした笑顔を取り戻して告げた。

「――やっぱり、駄目だなあ。他の誰かに殺されるあなたを見るのは、心底むかつく。俺が同席してたら、何があっても相手を引っぺがしてぶち殺しますね。あなたはそうやってしれっと煙草ふかしてるのが一番いい。あなたが誰かにひざまずくのも、従うのも、ほんとは見たくないい。……ま、一生お守りしますよ」

形ばかり立派な敬礼をされ、シャリオはいつになく適当な返礼をして、失笑する。

「お前はやはり犬だ」

「捨てないでくださいよ？　忠義な犬ほど、一度捨てられるとやさぐれますからね」

「捨てはしない。だから主人の言うことを聞いて、今は行け」

視線をそらして適当に手を振ると、フラムは静かに笑みを潜めて一礼した。

「はい。俺の閣下」

今度は軍人のようにではなく、従順な従者のように言って身を翻す。

シャリオはそれを視界の端に収めたまま、ゆっくりと上る紫煙を見つめていた。

香りのいいそれを肺まで吸いこもうとして、思わず咳きこむ。そうなるとしばらく咳は収まらず、胸にぴりりとした痛みが走った。

あの絶望の星石を押さえこむのは、星石の扱いに慣れているシャリオでもけっこうな負担ではあった。シャリオは秀麗な顔をわずかにゆがめて舌打ちし、こめかみを押さえて椅子の背もたれに身を任せる。

「何が犬だ。人間が犬になれるのなら、誰も苦労はしない」

口の中でつぶやいたのは、なぜだろう。

フラムの忠誠心をふみにじりたいわけではない。ただ、それに見合う自分であるのかどうかに、まだ迷いがあるのかもしれなかった。

迷いがあるからこそ、常に背を伸ばしている。常に正義を口にしている。

レアは、そんな彼の姿を憧れの瞳でいつも見つめていた。

おかげで、シャリオは彼女の瞳に映る自分を見る度に、とてつもない罪を犯しているような気分になったものだ。正義感にあふれ、平和を愛し、厳しくも寛容。

そんな男は、いないのだ。本当は、ここにはいない。

首飾りを握った指に勝手にじわりと力が加わる。

「面倒だな、心というものは」

小さく囁いたとき、背後でかちゃりと音がする。

執務机の後ろにあるのは、書棚だけ。そこには地下通路へ繋がる扉があるが、それを知って

いるのはシャリオの他にはアルとレア、そして、王族だけのはずだった。
空気の流れと、床のかすかな軋み。
――確かに、背後に誰か居る。
そう感じた瞬間、シャリオはできるかぎりの速さで銃帯から銃を抜いて振り返った。
背後の人間の眼前に、銃口を突きつける。
と、同時に、自分の目の前にも銃口があるのに気づいた。
背後の人物とシャリオは、ほとんど同時に銃を抜いたのだ。まるで、同門の剣術者のように息のあった所作で。
そう、この呼吸を知っている。経験が、本能が、相手の呼吸を忘れない。
「――素敵ですね、シャリオ。足音で俺だとわかりましたか？」
穏やかに言って陰鬱な瞳を細める軍服姿の男。
黒髪を肩に零して微笑むのは、フィニステリア王国第二王子、ソールそのひとであった。
見慣れたはずのその姿が、心にすっと暗い影を落とす。
シャリオはしんしんと瞳を冷やして囁く。
「俺はそこまでの化け物ではありませんが、こんなことをするのはあなただけです。今回の件で、そろそろいらっしゃるころだとは思っていました」
「なるほど？　それでわざわざ番犬を追い払ってくれたというわけですか。甘く見られましたねえ。別に番犬がいようといまいと、ひるむ俺ではありませんが」

さも嬉しそうにくすくすと笑って、ソールはシャリオの額にこつん、と銃口を当てる。冷えた固い感触に、シャリオはじっとソールの目を見つめ続けた。

ただの脅しにしても趣味の悪いやり口だが、ソールの目は妙に真剣に光っている。普段は砂のような灰色の瞳に、今は粘ついた感情がわだかまっている。

見つめ続けているとあてられてしまいそうな、嫌な熱がある。

彼は自身もその熱に浮かされているかのように囁く。

「銃を下ろしなさい」

反射的に従いたくなるのは、シャリオの軍人としての習い性か。それとも。

「これは命令ではありません。忠告です。このままではお前は不敬罪ですよ。俺を守るべきエトワール隊の隊長がこんなことをしているというのは、よろしくない。お前に流れる血がお前を守るのは、陛下がご存命の間だけです。――今回はずいぶん、好き勝手やってくれましたね。姫君をエトワール隊の中で守り抜いた。リシェスは色々あった末のあんな結婚式でも、文句を言わないことにしたそうです。ずいぶん物わかりがいいものですねえ」

ソールはゆるゆると声を低くして、シャリオの顔をのぞきこむ。

シャリオはじっと彼の目を見つめ返した。目をそらそうが、そらすまいが、ソールは同じ粘つくような怒りを瞳にたたえたままだろう。それでも、自分の心を折らないために、目をそらすわけにはいかなかった。

「戦争を望まない者が、フィニステリアにもリシェスにも多かった、というだけのことでしょ

う。話し合いの結果です」

「まさか。お前は話し合いというものを甘く見ていますよ。国家間での話し合いなど、さんざん根回しした結果の儀礼的な試合のようなもの。始める前から、結果は決まっているんです」

そこまで言って、ソールは鋭く囁いた。

「シャリオ。やはりお前、あの、『絶望』の星石を、この機会にリシェス側に返したのでは？」

針みたいに耳を突き通して入ってくる、敵意ある言葉。

シャリオはほんの一瞬ためらってから、静かな声を絞り出す。

「……その可能性を考えて、王宮にさんざん賊を忍びこませ、『絶望』の星石を探させていたのは――やはり、あなたでしたか。あげく、表からはダントンを使って色々と妨害工作を仕掛けてきた。ひょっとしたら……ダントンを殺したのも、あなたかもしれない」

「おやおや、言いがかりはやめていただきましょう。わたしの友人が勝手にやったことまで、わたしは責任を取りませんよ。お前と違ってわたしには友人が多いんです。それに、今回の犯人はリシェス人でしょう？　実に、許し難いことですねえ」

ソールは笑う。瞳も笑う。でも、彼の笑いはいつだって暗い殺気に満ちている。

やはり、偽ベルクレール伯爵夫人などというのは、ダントン越しにソールが操っていた傀儡なのかもしれない。

ベルクレール夫人自身が操られていることを知っていたかどうかは、別として。

確かに今回、リシェス側が引き下がったのはあの石を返したからだ。

結婚と同じくらい、もしくはもっと重かったのは、あの石のことだ。
そんなことはシャリオは口に出さない。どうせ、ソールには全部わかっている。わかったからこそ、ここに来たのだ。シャリオは、苦い言葉をどうにか淡々とはき出す。
「――あなたは、なぜ、そんなにも戦争を望むのですか？」
ソールはそれを聞くと、実に屈託なく笑った。
「好きだからです。父上とて昔はそうだったはず。戦場に立ち、生きるか死ぬかの境界線で戦略を練り、だましあい、殺し合った！　人間の死が単なる数に変換される戦場こそ、真に人間の生きる場所です。だが、父上は腑抜けた。あの女にすべてを狂わされたんです。……ああ、こんなもの、まだ持っているんですね？」
ソールは銃を持っていない片手でシャリオの首飾りをつかむと、今度は無造作に蓋を開けた。中に入っていた『絶望』の石がなくなった今、その中に収められているのはシャリオの幼いころの肖像画だけだ。
当時は少女じみてすらいた少年の美貌には、今とはまったく違う白金髪が光っている。
――それは、アルタリア貴族、それも王族に近いものにだけ出現する色。
シャリオはわずかに目を細めて言う。
「父上からの贈り物ですから」
「父上はお前を愛していますからねえ。お前を――いや、お前の母親を。フィニステリアを筆頭とした連合軍が二十五年前に滅ぼした、狂った古王国、アルタリアの美姫こそがお前の母。

アルタリアが滅びた後、我々の父上が、彼女に産ませたのが、お前だ」
呪うような囁きに、シャリオの耳の奥で誰かの声が蘇る。
『おいで、わたしの星よ』
優しい声。これはいつの記憶だろう？　十年前？　それとも二十年前？
どちらでも大して差はない気がする。幼少期の自分の世界は、額縁の中にあった。
淡々と、ぼんやりとした、感動の薄い日々。
自分はずっと椅子に座っていて、額縁の中で繰り広げられるお芝居を観ているような気分だった。額縁の中が朝になると、見目麗しく、賢く、礼儀正しい使用人たちが現れて頭を下げる。
――おはようございます、シャリオ様。本日のご予定は以下の通り。
適度な運動と適度な勉強。どれも努力が必要なほどではなくて、ぼんやりとしている間に済んでしまう。そうすると今度は、やけに腰の低い男女がやってきて、額縁の向こうから自分を褒め称える。
――素晴らしいよ、シャリオ。それでこそだ。今日も元気そうだね。お守りを手放してはいけないよ。何かあったら、周りの者にすぐに言うのだよ。
彼らが自分の両親であるということは、知識の上では知っている。
でも、別に、好きでも嫌いでもなかった。そもそもそういう感情がわからなかった。だって、嫌いなものすらひとつもなかったのだ。ありとあらゆるものが与えられ、不満の種は育つ前に解消される。感情を高ぶらせる必要がない生活の中では、憎悪も愛も芽生えなかった。

自分は額縁のこちら側から、向こう側に定型の台詞を投げている人形だった。

――ごきげんよう、みなさん。ごきげんよう、父様、母様。僕は今日も元気です。はい、お守りは持っています。はい、勉強は済みました。乗馬は楽しいです。湖まで行きました。領地からはけして出ません。知らない人間には会いませんでした。僕は元気です。

いつもどおりの報告に、使用人たちが笑う。両親が笑う。

笑いの木霊が、少しだけ頭に痛い。

額縁みたいな世界から逃れられるのは夜、眠っている間だけだ。夜みる夢は、澄んだ青い夜空を裸足で歩いて、親指の先くらいの冷たい星を拾い上げて遊ぶ夢やら、真っ白な四阿で悲しげに遠くを見ている美しいひとの夢やら、どれも起きているとき見るものよりよほど生々しかった。

そして、またいつもどおり、穏やかな朝が来る。

この永遠にも思える繰り返しが少しだけ変わるのは、あるひとが来るとき。

彼がやってくる日は館中が朝からそわそわしていて、シャリオはとびきり綺麗な服を着せられる。しばらくしてやってくるひとは、疲れたような琥珀の目を細めて笑い、シャリオに向かって両手を広げるのだ。

――おいで、わたしの星よ。大きくなったな。

不思議に堂々としていて、それでも開けっぴろげで、悲しそうで、嬉しそうなひと。

ぼんやりと生きるシャリオにとってはその複雑さが少し怖かったけれど、彼に抱きついてい

ると体が芯から痺れた。この、わけのわからないむずがゆさは何。顔が勝手に動くのは、なぜ。

どうして僕は笑うの？　わからない。……わからないけれど、嫌じゃない。

――お前は星石と惹きあう力が強い。それは母親からの贈り物なのだ。さあ、わたしからはこれをやろう。お前のための銃だ。

何歳のころか、まだ銃を撃てる歳ではないのに、おそろしく美しい銃をもらった。

それでシャリオにもぼんやりと理解ができた。

このひとは、特別な存在。そして、自分もおそらく特別な存在なのだ。

でも、そのことは内緒。このひとがいう『母親』は、この館にいる腰の低いひとじゃない。

でも、そのことも口に出したらみんなが困る。

――わたしは、何者なのですか。

そう、はっきり問うことが出来るようになったのは、自分のプラチナ・ブロンドはフィニステリア人にはまったく存在しないものだと気づいた十二歳のころだった。

シャリオの問いに、琥珀の瞳の『そのひと』は、威厳のある笑みで告げた。

――その問いを待っていた。さあ、髪を染めるのだ。そして、外に出なさい。今こそ、そうすべき時だ。さあ、お前は何になりたい？

何になりたいか。そう問われたら、答えは決まっている。ずっとぼんやりと育った自分になりたいものなんてあるはずがないから、目の前のこのひとが望むようになればいいのだ。

今までの学習で、心は理屈に基づく推理で補えることはわかっている。

だからシャリオは答えた。

——わたしは、軍人になって、この国を護ろうと思います。

——よくぞ言った、わたしの息子よ。

初めて国王がシャリオを息子と呼んだのは、その日のことだった。

どことなく暗い瞳で過去を見つめるシャリオに、ソールはゆっくりと言う。

「……お前に初めて会ったときのこと、覚えてますよ。士官学校を出たばかりのお前は、美しいだけの人形だった。ろくな表情すら浮かべられなかった。でも、俺にはお前の正体がすぐにわかりました。陛下はお前のその首飾りの中の肖像画と同じものを私室に隠していたし、思わせぶりにお前を俺の軍事訓練にくっつけてくるし。わかりましたとも——お前が、陛下に溺愛されて育ったことは」

彼の言葉に含まれた棘は、シャリオの一番の傷をそっと引っ掻く。

胸の奥で暗い記憶と激情が渦を巻き始めるのを感じながら、シャリオは答えた。

「……わたしも、わかっていました。あなたが、父上以外で初めて会う肉親なんだと。初めて見たあなたは輝いて見えた。弁舌爽やかで、頭が回り、友達が多く、ひとを統べるのが得意だった。本当に、憧れでした。何を言われても、素直に従った。——わたしは、あなたに好かれたかった」

「そうですね。よくわかりましたよ、お前の単純な好意のことも」

ソールは低く言い、にっこりと人好きのする笑顔になった。

それでも足りなかったようで、彼は喉の奥でくつくつと笑い出す。
「勘違いしないでくださいね。お前がもっと無能で、俺の役に立ち、もっと幼いころから俺と一緒にいたら、俺もお前を愛するようになったかもしれない。でも、そうではなかった」
そう告げたとき、ソールの瞳は奇妙な色に光った。
まるで、硝子玉が光を反射したみたいな、強いばかりで無機質な輝きだった。次の瞬間、ソールの銃口がふっとシャリオから外れた。
殺気。いきなりソールの銃把が、シャリオの頭に振り下ろされる。シャリオはとっさに腕で受けたが、それでも銃把はこめかみをかすり、皮が裂けてぱっと血が飛んだ。
衝撃と痛みにシャリオは秀麗な顔をしかめたが、ソールはそのまま、何事もなかったかのように身を乗り出して囁く。
「俺は聞いたことがあるんですよ。陛下が、お前の肖像を見ながら、『お前がわたしの跡を継ぐべき星だ』と語りかけているのを」
ソールの全身から発せられる憎悪と悪意がシャリオの心臓にまとわりつく。圧迫感で呼吸すら困難になる。昔は知らなかった。
憎悪されるとは、こういうことだ。
嫌な目眩を覚えながら、シャリオはそれでもどうにか静かに言う。
「わたしの生まれでは王にはなれません。母はわたしを産んですぐに死んだ。由緒あるアルタリアの姫君に子供を産ませて殺したとなれば、陛下の評判は地に落ちます。わたしは、あなた

と喧嘩をしたいわけではない。わたしは自分の立場から、平和を守りたい。そして、滅びたアルタリアの生き残りとして、星石を護りたいのです」

「星石を護る？　またその戯言ですか。どうせ護星官復活のために星石の使い手を集めているのでしょうが、あの、ちょっと光る程度の魔法など、俺はどうでもいいのですよ。ただ、あの石が持つ権威に興味があるのです。巨大な星石は各国で国宝とされている。あれがなくては王権が揺らぐとさえされる。その価値こそが使えるんです」

緩やかに言って、ソールはこれ見よがしに血のついた銃をもてあそんだ。

彼の言う『使える』。それがいかに邪悪なものであるか、今のシャリオは知っている。

「――あなたは間違っている。星石の力を軽んじてはいけません。あの石は持っているだけでひとの心に影響を与え、魅入られた者は徐々に深みにはまり、しまいには石に操られるようになる。……最後のアルタリア王も、そうであったと言います。あれを駆け引きに使っては駄目だ。わたしは石を護り――あなたも、救いたいのです。あなたはおそらく、わたしが持ち帰ったあの瞬間に、絶望の星石に魅入られたんだ」

答えはわかっているようなものなのに、それでもシャリオは祈るように告げる。

こめかみからたらりと鮮血が流れ落ち、血の匂いが、シャリオの頭の中から七年前の記憶を引きずり出し始める。

ソールは七年前のあのとき――シャリオと初対面となったとき、軍事訓練のふりでリシェスから『絶望』の星石を奪おうと画策していたのだ。

（そして、その役目を振られたのが、わたし）

――実は、俺は陛下の密命を受けているんです。助けてくれますね？

優しかったソールの頼みを、シャリオは迷わず承諾した。

ソールはなおも告げた。リシェスが『とんでもない陰謀』を企んでいて、自分たちがそれを阻止しなくてはならないのだと。彼の言葉のままにシャリオと部下はリシェスの国境を越え、移動中の馬車を襲った。

初めての実戦。わけのわからない戦いの興奮の中でつかんだ派手な小箱。それに触れた瞬間、全身がぞわりと悪寒に震えた。これは、とんでもないものだ。そう本能が囁いた。

それでも。いや、ひょっとしたらそれだから、これを持ち帰らなくてはならない。

そう思っての必死の脱出。追っ手は真剣で、どんどん増えた。教科書通りに逃げこんだ森は暗かった。少しも勝手のわからない土地と、飢えと渇き。どこからともなく飛んでくる銃弾。自分を護って死んだ部下の顔。徐々に生気をなくして濁っていった瞳。

すべては、使命のためだと、正義のためだと自分に言い聞かせた。そうしなくてはおかしくなってしまいそうだった。

そうして信じたすべてが大間違いだとわかったのは、生き残った部下たちを引き連れ、ひとりの部下に肩を貸して、どうにか敵の包囲を抜けたときだった。

森を抜けた明るい小空間に、私兵らしき男たちを従えたソールが居た。

救われた、助かった、そう思って目の前が明るくなった瞬間、彼は顔をしかめて笑った。

——ゴミを担いで、どうしたんですか。そいつはもう死んでますよ。

何を言われたのか、よくわからなかった。自分が担いできたのは、ゴミなどではない。ついさっきまで自分に向かって一生懸命笑いかけて、最後まで自分を守り、ついさっきまで子供みたいな声で泣いていた、人間だ。

ソールが近づいてくる。

——石は取ってきましたか？　さあ、出しなさい。

ぎらぎらと輝く彼の目を見て、彼が嘘を吐いていたことがわかった。彼は、この、自分が懸命に持ち帰ったものが欲しいだけだ。

このひとに、正義はない。

このひとは、自分を愛してはいない。

鈍い衝撃が身体を震わせ、目の前が奇妙に鮮やかになった。——そして。

「……あなたが石に魅入られたと思ったからこそ、わたしはあのとき、絶望の星石を持ったままあなたから逃げたんだ」

「追いかけっこをしましたねえ。あれは腹がたったけれど、面白いところもあったな。お前の必死ぶりが、可愛くてね。あげくお前はすばしっこく逃げ切って、リシェスへの侵入も、星石を奪ったことも、全部自分がやったこととして自首し、星石も陛下に返したらしいけれど——父上はお前への愛からすべてをもみ消してしまわれた。一応訊きますが、どうして俺が悪いと訴えなかったんです？」

からかうような台詞に、シャリオは苦く吐き捨てる。
「決まっている。あなたを訴えたら、あなたは濡れ衣だと叫び、国民を焚きつけて王家を滅ぼすだろうからだ」
ソールが目を細めて笑った。さも楽しそうに、いっそ子供のように瞳がきらめく。
きっと今、彼の目の前には、血で汚れる空想の宮廷が広がっているに違いない。彼は自分を認めなかった父を殺すために、王家そのものを殺そうとしている。その彼の目をすり抜けて、とにかく絶望の星石をリシェス側に返還するのが、今回の結婚式の最大の目的であった。
国民にははっきり知らされていないが、国王は余命幾許もない。
――勉強の時間は終わったかね、シャリオ。
最後に会ったとき、もうろうと子供のころの自分に話しかけていた父の姿をそっと脳裏から追い払い、シャリオはソールをまっすぐに見つめた。
「わたしは絶望の星石を奪ったときに、己の『正義』を失った。ゆえに残りの人生を『正義』を執行することにかけると決めました。この決心は、何者にも殺せません」
鋭くまっすぐな言葉を、しかしソールはこともなげに笑いとばす。
「素敵だなあ、まるで人間みたいな顔ですね。でも、その『正義』は俺が与えてあげたものなんですよ。だって、俺の起こした事件がなければ、『正義』が大事だとか、そんなふうに切羽詰まって思えなかったでしょ、お前は？」
ソールの言葉に、シャリオは軽く目を瞠った。

どくん、と心臓が音を立てる。

今は消え去っていたと思った額縁を思い出す。灰色の子供時代。好くことも嫌うことも知らなかった昔。初めてソールに会ったときの憧れと、その後の猛烈な絶望。

……確かに、世界が色を変えたのは、ソールと出会ってからだ。

「いいかげん気づくことです。お前を作ったのは俺だ。お前の『正義』なんて、お前が生きるために必要とした薄っぺらな言い訳にすぎない」

ソールの声は、徐々に優しくなってくる。彼はシャリオに歩み寄ると、繊細な手を伸べて彼がまだ手にしていた銃を取りあげた。そして、少しばかり怪訝そうな顔をする。

「これは、お前がいつも持っていた、陛下からの贈り物の銃ではありませんね」

そんな彼の反応を見て、シャリオはふと、ほんの少しだけ呼吸が楽になるのを感じた。いつも持っていた銃。世界中の技術を集め、国王がシャリオのために作った、六連発銃。その行方を思うと、シャリオの唇にはふわりと礼儀正しい笑みが載った。

やたらとまっすぐで、情熱に満ちた青い瞳を思い出す。

まぶしいほどに星のきらめく明るい夜空みたいなその瞳の、持ち主は。

「あれは今、もっとも、あれを持つのにふさわしい人間が持っています。……もの知らずで、正義とはなんたるかを考え尽くしたことなんて一度もないような人間。でも、それだからこそ、わたしもあなたも一生到達できない、本物の正義を知っている人間です」

どこか満ち足りた顔で沈黙したシャリオを、ソールは信じられないものを見る目で見つめた。

「……そんなふうに思える相手が、お前にもできたんですか？」
お前は、人形のはずだったのに。
そんなソールの心の声が聞こえるような気がして、シャリオはかすかに笑みを深める。
「はい。奴はあなたのものにはなりませんよ。本物の、ばかですからね」
「腹が立ちますね。エトワール隊の中の誰かかな？　なら、まあ、許しましょう」
ソールはさもつまらなさそうに言うと、手にしていたシャリオの銃を持ち上げた。
そうしてにっこり笑って告げる。
「エトワール隊は、今頃全滅しているころでしょうから」
シャリオが緩やかに目を瞠ったのを満足げに見つめて、ソールが無造作に引き金を絞る。
乾いた銃声が、一発だけ響いた。

「やっぱり俺、もう一回隊長誘ってこようかなあ……」
ぐってりと酒場の卓に頬を載せて言うアルに、他の四人の視線が集まる。
「閣下がいないと寂しいか？　ま、閣下も、お前にゃものすんごく過保護だもんな。ほとんど親鳥だぜ、ありゃ。見てて恥ずかしいっつーの」
酒杯を傾けながらフラムが楽しげに言うので、アルはじろりと彼をにらんだ。

ここは例の、自分の生家に近い酒場だ。普段なら足を運んだだけで心が躍る場所なのに、今日はなんとも気分が乗らない。

「どこが過保護なんですか。俺、出会い頭から踏まれたり殴られたりさんざんだったと思うんですけど。どう見たって、あなたのほうがいつもべったりじゃないですか」

「べったりだよー、だって俺はそれが仕事だし？　けどさ、閣下は俺のこと信頼してるけど、俺のこと好きじゃないね。賭けてもいい」

しれっと言うフラムに、アルは怪訝そうな顔になって身体を起こした。

「そんなことないでしょう。あのひとって、好きって思ってもわかりやすく外に出す類じゃなさそうだし、そもそも信頼されてるってだけで凄くありません？　俺が過保護にされてるんだとしたら、それ、『可愛いもの好き』のせいだと思いますよ」

「へ？　あれ、お前、マジであんなの信じてたの？」

フラムに割合本気で目を瞠られ、アルはきょとんとしてしまう。

「大マジですけど。なんですか、その反応」

「んー。なんですか、って言われても困っちまうなあ。……ま、とにかくね、あのひとは昔色々あって、あんまりひとに守られるのが好きじゃねえの。だから俺とかは、あのひとを守るだけの存在だって時点で、あんまり気にくわねえんだと思うよ？」

「……？　だったら、フラム少佐が隊長を守るだけの存在じゃなくなればいいんですよね？」

当然のことと思ってアルが言うと、フラムは思い切り変なふうに顔をゆがめて沈黙した。

他の隊員たちもそれぞれちょっと遠い目をするのを不思議に思って眺め、アルは眉を寄せる。
「なんですか、この空気。そりゃ、隊長は変わってるし取っつきにくいひとだけど、そんな遠巻きにしてるのは可哀想でしょ。いくら貴族って言ったって人間は人間だし。報奨とかくれて義理堅いし……そういやこれ、なんだったのかな」
はたと思い出して身体を起こし、アルはシャリオが渡してくれた厳重な包みを解き始めた。
「隊長からか。執務室の不要品を押しつけられたのでは？」
「……可能性は高い気がしますけど、ね……どうかなあ」
期待していいのか、悪いのか。複雑な気分で包みの中をのぞくと、アルは目をまん丸にした。
「あれ？　これ、銃……？」
「ああ!?　って、おいこら、これ、閣下の銃じゃねえか！」
すかさずフラムが身を乗り出し、まじまじと包みの中身を見つめる。
アルは一体何が起こったのか、よく把握することができずに、エトワール隊員たちを見渡す。
「えっ、これって本物ですよね？　隊長が持ってたやつ？……どうして、これがここに？」
「それは、こっちが訊きたいところなんだけど……なんだかこれ、誰かの生き霊が憑いてる気がするし……」
ラウルが陰鬱に首を傾げる横で、リシャールが卓に両肘をついて首を傾げた。
「生き霊はともかく、隊長が大事にしてたものだよ。多分、これは、君が隊長に信じられてるってことさ」

「信じられてる、ですか……？」
「んーっと、ここで全部話すのはちょっと気が引けるから、後で説明するけど。多分、君は僕らのほんとの仲間として迎え入れられるんだと思う。僕らは大体血筋で選ばれてるけど、君は完全な実力で認められたんだろうなあ。戦闘能力と、あと、星石を扱う力」
いつもの甘ったるさを少し控えた声で言われ、アルはますます混乱してきた。
「俺、星石はこの間初めて触ったんですけど。っていうか、星石は関係あるんですか？」
「だから、そんな軽々しく口に出しちゃ駄目だって。まあ、星石に関してはきっと隊長が手取り足取り指導してくれるよ。レアにもやってたし」
「レアの、手取り足取り……？」
「余計なところで反応するねー、若いねー！」
あはは、と笑うリシャールにどう突っこもうかと考えるアルだったが、そのとき不意に首筋がびりっと痺れた。
――どこか、近くに危険が迫っている。
それも、この感じだととびきりの危険だ。
「みんな――」
アルが真顔で危険を告げようとして見ると、すでにエトワール隊の四人は緊張の面持ちで、それぞれ武器に手をかけて身構えている。
「三呼吸めで動く。アル、お前はその銃、死んでも守れよ？」

フラムが緊張感の足りない口調で言い、片眼をつむった。
「――ほんと、おもてなし部隊とか名ばかりですよね……っ！」
アルはため息混じりに言い、椅子を蹴っていきなり動いた。
間髪容れず、他の四人も動く。
酒場の人々が驚いて身を避けたのとほとんど同時に、粗末な扉が外から蹴り開けられた。
「お前ら、俺の店に何を――っ!?」
酒場の主人が勘定場で叫ぶ。
しかし、敵は話を聞く気など最初からない。
乾いた銃声がいっせいに響いて、酒場の中は一気に悲鳴で一杯になった。
（ここで立ち回ったら他に被害が出る！）
最初の銃撃が止んだ隙に、アルはためらいなく飛び出した。
倒れた卓の陰から、一気に怪しい黒服の男たちの懐に飛びこむ。
腰の短剣を抜くと同時に、ひとりの手首を切った。
「ぐっ……！」
血が吹き出て、男が持っていた銃が床へ転がる。
「貴様！」
行く手をさえぎろうとした敵に、とっさに短剣を突き出す。
最短距離で脇腹に刺さる刃先。思ったより深く刺さった。引き抜く暇がない。

（しょうがない、外に出るのが先決だ！）

アルはうずくまった敵を放置して、そのまま薄暗い路地裏に走り出た。

背後では乾いた銃声が何回も繰り返されている。やたらと響き渡る悲鳴。慌ただしい足音。エトワール隊の他の隊員たちと連係したほうがよかったのかもしれない。

けれど、もう飛び出してしまったものは仕方ない。

（この街は俺の庭だ。翻弄して、ひとりずつ仕留める。それが一番、被害を少なくする道だ）

きっとできる。そう信じている心と、妙に不安をかき立てられている心が、身体の中で同居しているのがわかる。妙に心臓が高く鳴る。耳の奥で、にぎやかな音楽が聞こえ始める。

――さあ、公演の始まり。

七年前の旅芸人の声が蘇り、アルはどっと冷や汗が出るのを感じた。

……そうだ。何かが、妙に七年前と重なる。

一体何が？　敵の、得体の知れなさだろうか。突然現れてひとを殺し始める、非人間的な敵。

同じ場所に響く、同じ――訓練された足音。

思えばかつて宮殿の庭園で戦ったのも、この相手ではなかっただろうか？

（畜生、ダメだ、こんなときに余計なことを考えるな！　今考えていいのは、敵を仕留めることだけだ。こんな大事なもの預けてくるんだ、隊長は、俺を信用してるんだ）

裏切れない。裏切りたくない。

あの、星みたいな瞳。

過去の幻影から、アルを引きずり出してくれた冷えた指。
と、そのとき、目の前の路地から誰かが走り出てきた。
とっさに立ち止まる。
十数歩先に現れたのは、黒っぽい、どこの所属ともつかない服を着た男。
彼が銃を構えているのを見るやいなや、アルも銃を構える。同時にぐらりと視界が揺らいだ。
過去に舞い戻ったような、あの幻影。
こんなものに惑わされている場合じゃない。
血が出るほどに唇を噛み、狙いを定めて、叫ぶ。
「お前ら、何者だ！　俺の街を荒らしやがって、殺されたいのか!?」
「俺の街？　お前、ひょっとして……ここの出身か？」
笑うような錆びた声が言う。
途端に、心臓が抑えようもなくひどく鳴り始めた。冷たい汗が長い睫毛にひっかかってうっとうしい。それでも、瞬きをすることができない。
アルの眼球は震えながら、相手をとらえていた。
相手は、あはは、と乾いた声で笑う。
（俺は、この声を、知ってる）
間違いない。まぎれもない。これは七年前に、アルが両親をかばおうと銃を向けた相手だ。
子供だったアルをあざ笑った、邪悪な敵だ。

もう完全に過去の幻の中に押しこめたと思った人間が、生きて、生身で目の前に居る。

相手はまじまじとアルを見つめると、不意にかぶっていた黒いフードを剝いだ。あらわになった顔には、こめかみに大きな傷があり、片眼が完全には開いていない。

そんな顔でじいっとアルを見つめ、彼は確信したように笑う。

「お前、俺と、昔会ったか？」

問われた瞬間に震えが酷くなる。幼い恐怖が全身を満たしてしまう。

駄目だ。怖い。どうしようもない。引き金にかかった指が痙攣する。

男は、まだ笑っている。

「なんだ、お前やっぱり、七年前の探しもののときの子か！　奇遇だなあ。しかしまあ、あのころとろくに変わっちゃいねえじゃねえか。ご主人はお前らの何が怖いんだろうねえ？」

探しものって、一体なんだ？

相手を問いただしたい。あざけり笑う声音に、反論したい。

でも、目の前はひどい目眩でくらくらして、過去の幻影がぼんぼん飛び出しては躍る。

笑っていた両親。軽業師たちのかけ声。右から左へ、芸を仕込まれた獅子が跳んでいく。そして、そのすべてを謎な男たちが殺していく。真剣な顔で——あるいは、笑って。

そういえば、彼らはたまにこそこそと話し合っていただろうか？

——脱走兵だって？　なんでも大事なもんを持って逃げたとか。

——そいつだけは殺すなよ。他は、こんなとこに住むような奴らだ。皆殺しでもいい。

「さあ、星にお祈りしな、ぼうや」
敵が歌うように言った。七年前は、同じ間で路地裏から救い手がかけ出してきてくれた。
でも、あんな奇跡は一度だけ。もう、自分で自分を救わなければいけない。
（くそ……くそ！　動け、動け、動け、動け!!）
石のように重い指を、それでも少しずつ動かそうとした、そのとき。
「アルカイド、兎になるな。撃て！」
暗い幻想を裂いて、鋭い声が響いた。
アルははじかれたように目を開ける。ぼやけた視界。
躍る幻影。この声――同じ声を、自分は七年前も聞いた！
あのとき自分を助けに来てくれた兵士は、同じ声で、同じことを言った。
――狩られる兎になるな。撃て！
あのとき、アルは必死に目を開けた。でも、結局、引き金は引けなくて。
しかし、今は違う。あのときとは違う。おびえたままでも、命令を聞けば心がすっと落ち着く。呼吸と身体が整う。訓練されたままに、指は引き金を引き絞る。
乾いた銃声。
びっくりするほど浅い反動。
敵が驚愕に目を瞠ったのがわかる。
撃てたんだ、と思うと、古い幻想はすべて消え去った。

残るのは、まっすぐ男の額へ向かって飛ぶ、弾丸。初めて自分はひとを殺すのだ。そう思うと、今までとは別種の恐怖が背筋を駆け上る。

……多分、この恐怖は、自分が一生抱えていくもの。

愛しいひとを、愛しい場所を守るために、銃を持つ人生が、自分が選んだ道。

（ひとを殺すのって、こんなに怖いことなんだ。こんなの——なるべく少ないといい。俺が背負っていけるくらいで、すむといい）

ほんの一瞬の間にそんな祈りが頭をよぎって——辺りに血と脳漿が飛び散るかと思われたとき。不意に、敵ががくんと膝を崩した。

（何……？）

敵がくずおれたせいで、アルの弾は相手の額から外れ、肩に着弾する。

低いうめきをあげて敵が石畳の上へ転がる。

アルはまだ緊張して銃を握ったまま、彼を見下ろしていた。

そこへ、聞き慣れた硬質な足音が近づいてくる。

「お前が撃ったと同時に、そいつの足を撃った。意識的に避けようとした場合では、人間の速度では銃弾は避けられない。しかし、脱力したときは別だ。覚えておけ、アルカイド」

「隊長……あなた……」

歩み寄ってきたシャリオは、どことなく顔色が悪かった。

しかし、そんなことよりも、アルは彼の顔にくぎ付けになっている。

さっきの、目を開けろ、と叫んだ声。
あれは、七年前に聞いた兵士の声そのものだった。そして、シャリオの声でもあった。
それは、つまり。

「久しぶりだな」

当時みたいな、少し崩れた笑みで、シャリオが言う。
途端にどっと感動と懐かしさと、ありとあらゆる温かい気持ちがあふれてきて、アルは思わずシャリオに飛びついた。うっかり子供に戻ったような気分で軍服にしがみつき、懸命に彼の顔を見上げる。
「あなた、あのときのひとですよね、七年前の！　ずっとわかってたんですか!?　ひょっとしたら、士官学校に来たときから？　なんで言ってくれなかったんです！　俺、俺、ずっと……」
「ずっと、忘れていたんだろう？」
シャリオは、冗談めかして冷たく笑う。けれどその目は明らかに優しい。
その差がなんともどかしくて、アルは歯がみして叫んだ。
「覚えてましたよ、ばか！　嘘だ、ばかじゃないですけど、とにかく！　一生、忘れたりなんかできるわけないでしょう！　俺の大恩人なんだから！」
ほとんど涙目になってしまったが、もう、それが格好いいとか悪いとかいうことすら考えら

れない。シャリオはそんなアルをじっと見下ろして目を細め、軽く彼の頭に触れて、少し迷う風情を見せた。あまりひとに触れるのに慣れていない、そんな所作で、結局くしゃくしゃとアルの金髪をかき混ぜる。

「恩人ではない。あのときのわたしは、ただのクズだ。初めての任務で部下をすべて失って、どうにか王都まで辿り着いたものの、どこに帰る気もせずに、ここでぼんやりしていた。……ここはクズには優しい街だ」

「違う。あんたは、クズじゃなかった」

すかさずアルが言うと、シャリオの唇がかすかにゆがむ。ずっと貴公子然としていた彼には似合わない、自嘲的な笑みと共に、シャリオは言う。

「クズだった。七年前の、この街での惨殺事件を起こしたのはソールだ。わたしはあのとき、奴の執着する絶望の星石を持ってソールから逃げていた。そのせいで、ソールはこの一帯に私兵を投入してわたしを狩りに来たのだ。――お前たちを巻きこんだのは、わたしだ」

「そんな……」

あまりに予想外の告白に、アルは呆然とその場に立ち尽くす。

シャリオは緩やかに目を伏せ、不意にその場に膝を突いて囁く。

「許しを請わなくてはならない。すまなかった」

「えっ！　いや、待って、待ってください。とりあえず立って！　よくわかんないけど、それってソール王子のほうがやばいじゃないですか！　しかもあなたひとりに、あんな大規模な狩



りを仕掛けるとか、尋常じゃない。なんでそんなこと表沙汰にならなかったんです！」

アルは大慌てでシャリオの腕をつかんで引きずり立たせ、顔をのぞきこんで夢中で問いを投げた。シャリオは静かにアルと視線を合わせて告げる。

「表沙汰になっていないのは、ソールが国民議会の過激な派と繋がってもみ消したからだ。リシェスと戦争をしたいばかどもが、リシェスのごろつきどもが暴れ回った、という設定でごまかした。……貧民街を再開発したかった元老院も協力したらしい」

「そんな……それって……全部、国のお上が結託して、俺たちを見殺しにしたってこと？」

あんまりに酷い現実に、怒りと衝撃で目眩がした。

ただの賊だと思っていた敵が、どんどん複雑で巨大な黒いものに変わっていく。その黒が、ソールの形を取り始める。シャリオの目が何をずっとにらんでいたのか、わかってきたような気がする。彼の敵はあまりにも大きくて、理不尽なほどの悪意に満ちている。

普通なら、たたきのめされて、ひしゃげて、すべてを放り出したくなるような悪意と罪。

なのに、シャリオはあくまで静かに言う。

「今まで黙っていたのは卑怯だった。黙ってお前を手元に呼んだのも、軍の中のソール派に巻きこまれる前に、という完全な私情だったしな。お前を守るつもりで、結局またソールに目をつけさせるはめになった。……今さらだが、エトワール隊を出るのはお前の自由だ。代わりの職なら用意しよう。国外に出たければ、それでもいい」

不思議に真摯な言葉に、アルは少し途方に暮れたような気持ちで顔を上げる。

そうして見つけたのは、怒りよりも、悲しみを含んだ瞳だった。
（どうしてこのひとは、俺の恩人なのに、すごいひとなのに、こんな顔するんだろう。っていうか……こんな顔したひと、置いてけると思ってるのかな）
アルはしばらく迷った後に、どうにか言葉を選んで、慎重に告げた。
「……訊いてもいいですか？　七年前、あなたはどうして、俺のことを助けてくれたんですか。自分が追われていたのに……俺なんて、そのへんのよくいるガキだったじゃないですか」
「そのへんのよくいるガキが、非力ながらに何かを守って戦おうとしている。それを見て、はっとした。目が醒めた。自分が何をしたいか、知った」
丁寧に刻むように言い、シャリオは軽く目を細めて笑う。
相変わらず、どきりとするような無防備な綺麗な微笑み。彼は続ける。
「わたしは誰かを守って生きたい。それが、お前がわたしに教えてくれた『正義』だ」
「ば……」
「ば？」
ばっかじゃないのか！　と恥ずかしさに任せて叫びそうになったが、シャリオに聞き返されてしまうと、ぐっと言葉につまる。
アルが突っ立ったまんま真っ赤になっていると、ふとシャリオのこめかみから赤い血が輪郭をなぞって零れた。アルは目を円くして叫ぶ。
「隊長、あなた、怪我！」

「ん？　ああ。さっき、ちょっと色々あってな」
「色々あってな……じゃないですよ！　それですまされると思ったら大間違いですからね！　殴られたんでしょ、これ。他に、怪我は？　隠したら呪います！」
「……自分の銃で肩口を撃たれた気がするが、そもそも平時は塩弾しか入れていないし、まあ、大事ない……」
「充分大事ですよ!!　つきっきりで看病されたいんですか！　俺は、あれやこれやの原因があんただからって言って、あんたの不幸を望むほど小さい男じゃない！　むしろ隊長はばか正直でまっすぐすぎですよ。ばかでかい敵相手に、自分の正義を押し通して落とし前つけようとして！　だから死にかけるんだ。もうちょっと自分のことも考えてください！　俺にとっては、あんたはどうしたって、大事な恩人なんだ！　置いてどっかになんか行けるもんか！」
思わず口汚く言ってしまうと、シャリオは少し面食らった様子で瞬いた。
（畜生、やっちまった）
ばか正直に、本音を叫んでしまった。
アルは淡い後悔を胸に、挑むような目でシャリオを見上げる。
そして、残った勢いに任せて言った。
「後悔するくらいなら、あなたが上に行けばいい」
「上？」
「そう。……あなたの言う、『正義』を、ちゃんと貫けるくらい上に」

アルが言うと、シャリオは少し意外なほど驚いた様子で、じっと見つめてくる。
アルも、今度は真っ正面からシャリオを見つめ返すことができた。
「あなたが上に行くつもりなら、俺もついていきます。まだまだ色々ありそうだけど、あなたの作る世界なら、見てみたいし。あなた、上にいるほうが似合ってますよ」
シャリオはアルの言うことを静かに聞いていたが、やがて、いつもの冷たい笑みを浮かべた。
「本当に、可愛げなく育ったな」
「いちいち昔のこと持ち出すのは禁止です！」
「禁止かどうか、お前が決めるな」
淡々と言って、シャリオは身を翻す。石畳を数歩歩いて、正面の路地を見た。
「――見ろ。案の定、みんなぴんぴんしている」
「みんなって、あっ！　そういえば、エトワール隊のみんなは……！」
忘れてた、とばかりに青くなって、アルはシャリオの後ろから背伸びする。道をやってくるエトワール隊の面々を確かめ、彼はほっと息を吐いた。シャリオもしばらく彼らを見つめてから、不意に軍服の裾を翻して振り返る。
彼はごく当然のように、アルに手を伸べて告げた。
「来い。自分だけ、転げ落ちるなよ」
その姿は、静かで、優雅で、生まれながらの気品に満ちていて、ソールなんかよりよほど、アルの想像した王族の姿に近い。気づけば澄み切った夜空にはうるさいほど星が輝いてるけれ

ど、それらを背後にしたシャリオの瞳はどんな星よりも静かに、真摯に輝いていた。
（そういえば、俺、昔、こんな星を見たことがある）
あれは、夢だったのだろうか？　それとも、現実？
冷えた空にぽつんと浮かんだ見知らぬ琥珀の星。
――あなたの星を、守るのよ。
昔聞いた母親の声が、アルの耳の奥で蘇る。
ひょっとしたらあれは、今日の日の予言だったのかもしれない。
そんなことを考えると、胸の奥が、じん、と勝手に熱くなる。アルはすぐにも駆け出して、彼の隣に添いたいのをぐっと押さえて、できるかぎり背筋を伸ばして敬礼した。
そして、その場で思い切り声を張り上げる。
「エトワール隊員、アルカイド・クレール。星が空にあるかぎり、あなたと、俺の『正義』に命を捧げます」
刻むような言葉を発した途端、かすかな予感がした。
自分は一生、今このときを忘れない。
本当に、このひとに命を捧げることになるのだ、と。

あとがき

割合、男の子向けの特撮なんかが好きな子供でした。栗原ちひろです。

「王立エトワール～」は、前回私がビーンズ文庫さんで海軍ものをやらせていただいた流れで、今回は陸軍かな？　なんて単純にスタートした企画だったんですが、さすがにストレート陸軍は埃っぽいだろうと考えた結果、こんな感じになりました。私にしてはかなり、きらびやか！　変わり者だらけの、近衛特殊部隊エトワール隊のお話です。氷の薔薇（黙）ことシャリオはひたすらに「ドS、ドS……」と唱えながら書いたものの、気づけばずいぶん綺麗系に落ち着きました。アルは最初よりだいぶ素直な健気っ子に。フラムは最初から歪みなくフラムです！　三人を始め、エトワール隊の活躍を楽しんでいただけますように。

さて、今回も出版にあたり、たくさんの方のご助力をいただいています。

イラストの櫻井しゅしゅさん。ほれぼれするような色気のある画をありがとうございます！　アルはやんちゃで可愛くて、シャリオは冷たく繊細で綺麗で、フラムは憎い男前。私はヴィジュアル的にはフラム派かもです。新担当氏にも色々とお世話になりました。そして最後は、読んでくださったあなたに。ありがとうございました。また、お会いできますように。

栗原　ちひろ

BEANS BUNKO

「王立エトワール近衛隊 氷の薔薇に敬礼を」の感想をお寄せください。
おたよりのあて先
〒102-8078 東京都千代田区富士見2-13-3
角川書店ビーンズ文庫編集部気付
「栗原ちひろ」先生・「櫻井しゅしゅしゅ」先生
また、編集部へのご意見ご希望は、同じ住所で「ビーンズ文庫編集部」
までお寄せください。

王立エトワール近衛隊
氷の薔薇に敬礼を
栗原ちひろ

角川ビーンズ文庫 BB56-19 17298

平成24年3月1日 初版発行

発行者――井上伸一郎
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/編集(03)3238-8506
〒102-8078
発売元――株式会社角川グループパブリッシング
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/営業(03)3238-8521
〒102-8177
http://www.kadokawa.co.jp
印刷所――暁印刷 製本所――BBC
装幀者――micro fish

本書の無断複製(コピー、スキャン、デジタル化等)並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者等の第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。
落丁・乱丁本は角川グループ受注センター読者係にお送りください。
送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN978-4-04-100221-6 C0193 定価はカバーに明記してあります。

©Chihiro KURIHARA 2012 Printed in Japan

第11回 角川ビーンズ小説大賞 原稿大募集!

大賞 正賞のトロフィーならびに副賞300万円と応募原稿出版時の印税

角川ビーンズ文庫では、ヤングアダルト小説の新しい書き手を募集いたします。
ビーンズ文庫の作家として、また、次世代のヤングアダルト小説界を担う人材として世に送り出すために、「角川ビーンズ小説大賞」を設置します。

【募集作品】
エンターテインメント性の強い、ファンタジックなストーリー。ただし、未発表のものに限ります。受賞作はビーンズ文庫で刊行いたします。

【応募資格】
年齢・プロアマ不問。

【原稿枚数】
400字詰め原稿用紙換算で150枚以上300枚以内

【応募締切】2012年3月31日(当日消印有効)

【発　　表】2012年12月発表(予定)

【審査員】(敬称略、順不同)
金原瑞人　宮城とおこ　結城光流

【応募の際の注意事項】
規定違反の作品は審査の対象となりません。

■原稿のはじめに表紙を付けて、以下の3項目を記入してください。
① 作品タイトル(フリガナ)
② ペンネーム(フリガナ)
③ 原稿枚数(ワープロ原稿の場合は400字詰め原稿用紙換算による枚数も必ず併記)

■2枚目に以下の7項目を記入してください。
① 作品タイトル(フリガナ)
② ペンネーム(フリガナ)
③ 氏名(フリガナ)
④ 郵便番号、住所(フリガナ)
⑤ 電話番号、メールアドレス
⑥ 年齢
⑦ 略歴(文学賞応募歴含む)

■1200字程度(原稿用紙3枚)のあらすじを添付してください。

■原稿には必ず通し番号を入れ、右上をバインダークリップでとじること。原稿が厚くなる場合は、2～3冊に分冊してもかまいません。その場合、必ず1つの封筒に入れてください。ひもやホチキスでとじるのは不可です。(台紙付きの400字詰め原稿用紙使用の場合は、原稿を1枚ずつ切り離してからとじてください)

■ワープロ原稿が望ましい。ワープロ原稿の場合は必ずフロッピーディスクまたはCD-R(ワープロ専用機の場合はファイル形式をテキストに限定。パソコンの場合はファイル形式をテキスト、MS Word、一太郎に限定)を添付し、そのラベルにタイトルとペンネームを明記すること。プリントアウトは必ずA4判の用紙で1ページにつき40字×30行の書式で印刷すること。ただし、400字詰め原稿用紙にワープロ印刷は不可。感熱紙は字が読めなくなるので使用しないこと。

■手書き原稿の場合は、A4判の400字詰め原稿用紙を使用。鉛筆書きは不可です。(原稿は1枚1枚切りはなしてください)

・同じ作品による他の文学賞への二重応募は認められません。

・入選作の出版権、映像化権を含む二次的利用権(著作権法第27条及び第28条の権利を含む)は角川書店に帰属します。

・応募原稿及びフロッピーディスクまたはCD-Rは返却いたしません。必要な方はコピーを取ってからご応募ください。

・ご提供いただきました個人情報は、選考および結果通知のために利用いたします。

・第三者の権利を侵害した作品(既存の作品を模倣する等)は無効となり、その場合の権利侵害に関わる問題はすべて応募者の責任となります。

【原稿の送り先】〒102-8078 東京都千代田区富士見1-8-19
(株)角川書店ビーンズ文庫編集部「第11回角川ビーンズ小説大賞」係
※なお、電話によるお問い合わせは受け付けできませんのでご遠慮ください。

9784041002216

ISBN978-4-04-100221-6
C0193 ¥514E

定価：本体514円（税別）

1920193005141

BEANS BUNKO

王立エトワール近衛隊
氷の薔薇に敬礼を

栗原ちひろ

熱血新米士官・アルの配属先は、お飾りと名高いエトワール近衛隊。失望するアルの前に現れたのは氷の薔薇と称される美形の上官・シャリオとその右腕の野獣系肉体派少佐・フラム。惚れ惚れと二人を見上げたその矢先、突然シャリオに投げ飛ばされ!? 美貌とは裏腹なドS上官に暴れるアルだったが、絢爛な軍服に身を包んだお飾り集団は、実は精鋭士官による特命部隊で!? **宮廷内の事件に挑む、美麗男子達の華麗なる作戦開始！**